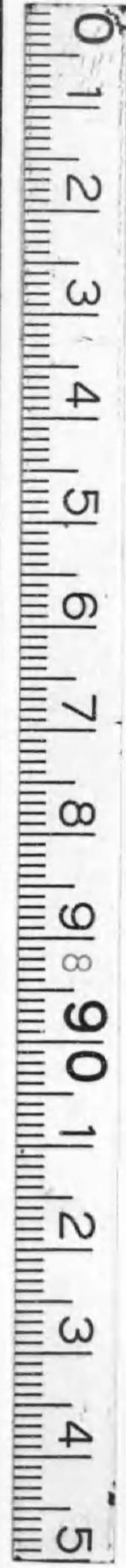


379
671



始



特219
853



純本正俊著

最新
研究
徒然草
詳解

東京
芳文堂刊



序 文

本書は徒然草の新しい研究によつて、徒然草の解釋を検討玩味し、古寫本によつて流布本の悪いところを指摘し、幾分なりとも徒然草の原形の本文を闡明したものである。

徒然草は國文學を研究する者にとつては、必ず精讀玩味すべき書物であることは、今更吾人が嘖々をなすまでもない。然して徒然草を研究するには、古人の解釋書も既に澤山あり、又現代の新しい解釋書も夥しく出版されてゐることである。わざ／＼吾々までが屋上更に屋を架するやうに解釋をなす必要もないことであらう。けれどもここ七年ばかりの間徒然草を研究する間に、從來の解釋書よりも更に徹底して、解釋を精緻正確に闡明したいと思ふところがあつたり、又ところによつては新しい解釋をなすべきところがあり、或は又、本文につきては古寫本によると、今日の流布本は悪いところがあるので、これを訂正したき所があり、斯うした數年間の研究をまとめて、舊來の解釋を訂正し、新解釋を施し、本文のよろしからざるところは、古寫本によつて正しき原形を指摘し、余の新しい見解をまとめた次第である。

思ふに本書は從來の解釋書よりは、幾らか目新しい解釋があると信ずる。その點に於て、徒然草をよむ人並に研究する人にとつて多少なりとも、他山の石ともなり得ば望外の幸である。

本書を著述するに就いては、古人の研究注釋書は固より、現代の先輩諸賢の研究に負ふ所多大なるものがあつたことを特に記して感謝の意を表する次第である。猶江湖諸彦の御指教に依つて更に一層本書を完備したいの念願である。

昭和十二年十二月

徳本正俊誌

凡 例

一、本書の本文及び段の切り方は、大體文段抄によつたが、古寫本、古版本を参照して必要なるところは注記して置いた。

本文研究のために使用した古寫本、古版本は次のやうなものを主とした。

正徳本

傳幽齋自筆本（七海兵吉所藏）

烏丸光廣本（宮内省圖書寮藏）

延徳本

嵯峨本

光悦本

正徳本

屋代弘賢本

無刊記丹表紙本

其の他江戸時代の諸本を参考した。

凡 例

一、本書の假名遣は歴史的假名遣により、漢字の讀假名は古版本のよみに従ひ、なるべく古きよみを存して置いた。

一、本書の語釋に就いて古來の注釋書並に現代の注釋書にては左の如き諸書を參考した。勿論古注釋書の本文について異同ある重要なるところは、その所に注記して置いた。

徒然草抄(壽妙院抄)二卷二冊 慶長九年古活字版 秦宗巴(壽妙院法印)著

徒然草野槌抄 十四卷十三冊 元和七年刊 林 道 春著

徒然草鐵槌 四卷四冊 慶安元年刊 青木宗 胡著

なぐさめ(慰)草 八卷八冊 慶安五年 長頭丸(貞徳)著

徒然草古今抄 八卷八冊 萬治元年 大和田氣求著

徒然草抄(磐齋抄)十三卷十三冊 寛文元年刊 加藤 磐 齋著

徒然草句解 七卷七冊 寛文五年刊 高階 楊 順著

徒然草文段抄 七卷七冊 寛文七年刊 北村 季 吟著

増補鐵槌 五卷五冊 寛文九年刊 山岡 元 隣著

徒然草診解 五卷五冊 延寶五年刊 南部 宗 壽著

徒然草大全 十三冊十三冊 延寶六年刊 高田 宗 賢著

徒然草參考 八卷八冊 延寶六年刊 惠空 和 尙著

諸抄 徒然草直解 十卷十冊 貞享三年刊 岡 西 惟 中著

徒然草諸抄大成 二十卷十冊 貞享五年刊 淺 香 山 井輯

首書 徒然草繪入 五卷五冊 元祿三年刊 三 本 隠 人著

註釋 徒然草集說 十五卷六冊 元祿十四年刊 閑 壽著

現代のものにては、

徒然草講義 上下二卷 佐野保太郎著

新つれ／＼草 一卷 橘 純 一著

徒然草講話 一卷 沼波 瓊 音著

徒然草精義 一卷 藤田豪之輔著

徒然草解釋 一卷 塚本 哲 三著

徒然草新解 一卷 武田 祐 吉著

徒然草評釋 一卷 内藤 弘 藏著

右の如き先賢諸彦の研究により、解釋については、どこ／＼までも徹底するやうにした。又そこに舊解釋よりは異つた新しき解釋を試みたところもある。

一、本書は徹底的に徒然草解釋を精緻正確になすのが主眼であるため、原稿は非常に歴大となり、爲めに評釋、文旨などはとても記すわけにゆかず略することにした。解釋だけで、緻密に組んだ

爲めに八百六十餘頁になつたが、菊判千頁以上の内容がある。

一、口譯はなるべく冗長に亘らぬ限りに、原文の意をあらはすやうに丁寧になして置いた。

一、語釋並に本文に就いては、序文にも記述して置いたやうに、新しい發見が可なり試みられてゐることを信ずる。この點、世の讀者には參考になる點があると信ずる。

最新 徒然草詳解目次

序	段	つれづれなるままに……………	一
第一	段	いでやこの世に……………	三
第二	段	いにしへの聖の御代……………	六
第三	段	萬にいみじくとも……………	一〇
第四	段	後の世の事……………	一四
第五	段	不幸に愁にしづめる……………	一四
第六	段	我が身のやんごと……………	一六
第七	段	あだし野の露……………	一七
第八	段	世の人の心まどはす……………	一七
第九	段	女の髪のためだからむ……………	一八

目次

第一〇	段	家居のつきづくしく……………	一五
第一一	段	神無月の比栗栖野……………	一五
第一二	段	おなじ心ならむ人……………	一七
第一三	段	ひとり燈のもとに……………	一七
第一四	段	和歌こそなほをかしき……………	一八
第一五	段	いづくにもあれ……………	一八
第一六	段	神樂こそなまめかし……………	一八
第一七	段	山寺にかきこもりて……………	一九
第一八	段	人はおのれをつづまやか……………	一九
第一九	段	折節のうつりかはる……………	二〇
第二〇	段	なにがしとかや……………	二〇
第二一	段	よろづの事は月見る……………	二〇
第二二	段	何事もふるき世のみ……………	二〇

第二三段 おとろへたる末の世……………一〇九

第二四段 齋宮の野宮に……………一四

第二五段 飛鳥川の淵瀬常ならぬ……………一八

第二六段 風も吹きあへず……………二五

第二七段 御國ゆづりの節會……………三元

第二八段 諒闇の年ばかり……………一三

第二九段 しづかに思へば……………一四

第三〇段 人のなきあとばかり……………一六

第三一段 雪のおもしろうふり……………一四

第三二段 九月二十日の比……………一五

第三三段 今の内裏作り出され……………一四

第三四段 甲香はほら貝の……………一五

第三五段 手のわるき人の……………一五

第三六段 久しくおとづれぬ比……………一五

第三七段 朝夕へだてなくなれ……………一五

第三八段 名利につかはれて……………一六

第三九段 或人法然上人に……………一六

第四〇段 因幡國に何の入道……………一六

第四一段 五月五日賀茂の……………一七

第四二段 唐橋中將といふ人……………一七

第四三段 春のくれつかた……………一七

第四四段 あやしの竹のあみ戸……………一八

第四五段 公世の二位のせうと……………一八

第四六段 柳原の邊に強盜法印……………一八

第四七段 或人清水へまゐり……………一九

第四八段 光親卿院の最勝講……………一九

第四九段 老來りて始めて……………一九

第五〇段 應長の比伊勢の國……………二〇

第五一段 龜山殿の御池に……………二〇

第五二段 仁和寺にある法師……………二〇

第五三段 是も仁和寺の法師……………二〇

第五四段 御室にいみじき兒……………二〇

第五五段 家の作りやうは……………二〇

第五六段 久しくへだたりて……………二〇

第五七段 人のかたり出でたる……………二二

第五八段 道心あらば住む所に……………二三

第五九段 大事をおもひたむ人……………二三

第六〇段 眞乘院の盛親僧都……………二四

第六一段 御産の時飢おとす……………二五

第六二段 延政門院いときなく……………二五

第六三段 後七日の阿闍梨……………二六

第六四段 車の五緒は……………二六

第六五段 此の比の冠は……………二六

第六六段 岡本關白殿……………二七

第六七段 賀茂の岩本橋本は……………二七

第六八段 筑紫になにがしの……………二七

第六九段 書寫の上人は……………二八

第七〇段 元應の清暑堂の御遊……………二八

第七一段 名を聞くよりやがて……………二八

第七二段 いやしげなるもの……………二九

第七三段 世にかたりつたふる事……………二九

第七四段 蟻の如くにあつまりて……………三〇

第七五段 つれくわぶる人……………三〇

第七六段 世のおぼえはなやか……………三〇

第七七段 世の中にその比……………三〇

第七八段 今様の事どもの……………三〇

第七九段 何事も入りたたぬ……………三一

第八〇段 人ごとく我が身に……………三一

第八一段 屏風障子などの繪……………三一

第八二段 うすものの表紙は……………三一

第八三段 竹林院入道左大臣殿……………三一

第八四段 法顯三藏の天竺に……………三一

第八五段 人の心すなほならねば……………三一

第八六段 惟繼中納言は……………三一

第八七段 下部に酒のまする事……………三一

第八八段 或者小野道風が……………三一

第八九段 奥山に猫またといふ……………三一

第九〇段 大納言法印のめしつかひ……………三一

第九一段 赤舌日といふ事……………三七
 第九二段 或人弓射る事を……………三三
 第九三段 牛を賣る者あり……………三六
 第九四段 常盤井相國出仕し……………三七
 第九五段 箱のくりかたに……………三七
 第九六段 めなもみといふ草あり……………三七
 第九七段 其の物につきて……………三七
 第九八段 たふとき聖のいひ……………三七
 第九九段 堀河相國は美男の……………三一
 第一〇〇段 久我相國は殿上にて……………三四
 第一〇一段 或人任大臣の節會……………三七
 第一〇二段 尹大納言光忠入道……………三九
 第一〇三段 大覺寺殿にて……………三九
 第一〇四段 荒れたる宿の……………三九
 第一〇五段 北の屋陰に消え……………四〇
 第一〇六段 高野の證空上人……………四一
 第一〇七段 女の物いひかけたる……………四二

第一〇八段 寸陰惜しむ人なし……………四三
 第一〇九段 高名の木のほり……………四三
 第一一〇段 雙六の上手と……………四三
 第一一一段 圍碁雙六このみて……………四三
 第一一二段 明日は遠國へ赴く……………四三
 第一一三段 四十にもあまりぬる……………四三
 第一一四段 今出川のおほい殿……………四三
 第一一五段 宿河原といふところ……………四三
 第一一六段 寺院の號さらぬ萬の物……………四三
 第一一七段 友とするにわろき者……………四三
 第一一八段 鯉のあつもの……………四三
 第一一九段 鎌倉の海にかつをと……………四三
 第二〇〇段 唐の物は藥の外は……………四三
 第二〇一段 やしなひ飼ふもの……………四三
 第二〇二段 人の才能は文あきらか……………四三
 第二〇三段 無益の事をなして……………四三
 第二〇四段 是法法師は淨土宗には……………四三

第一二五段 人におくれて四十九日……………四七
 第一二六段 ばくちの負きはまり……………四七
 第一二七段 あらためて益なき事……………四七
 第一二八段 雅房大納言は……………四七
 第一二九段 顔回は志人に勞を……………四七
 第一三〇段 物にあらそはず……………四七
 第一三一一段 貧しき者は財をもて……………四七
 第一三二一段 鳥羽の作道は……………四七
 第一三三一段 夜のおとは東枕……………四七
 第一三四一段 高倉院の法華堂の……………四七
 第一三五一段 資季大納言入道とかや……………四七
 第一三六一段 醫師あつしげ……………四七
 徒然草下卷
 第一三七一段 花はさかりに月は……………五三
 第一三八一段 祭過ぎぬれば後の葵……………五三
 第一三九一段 家にありたき木は松……………五四
 第一四〇一段 身死して財残る事は……………五一

第一四一段 悲田院堯蓮上人は……………五三
 第一四二段 心なしと見ゆる者も……………五三
 第一四三段 人の終焉のありさま……………五三
 第一四四一段 樽尾の上人道を……………五三
 第一四五一段 御隨身秦重躬……………五三
 第一四六一段 明雲座主相者に……………五三
 第一四七一段 灸治あまた所に……………五三
 第一四八一段 四十以後の人……………五三
 第一四九一段 鹿茸を鼻にあてて……………五三
 第一五〇一段 能をつかむとする人……………五三
 第一五一一段 或人のいはく年五十……………五三
 第一五二一段 西大寺靜然上人……………五三
 第一五三一段 爲兼大納言入道……………五三
 第一五四一段 此の人東寺の門に……………五三
 第一五五一段 世にしたがはむ人は……………五三
 第一五六一段 大臣の大饗は……………五三
 第一五七一段 筆をとれば物かかれ……………五三

第一五八段 盃のそこをすつる事…………… 六〇二
 第一五九段 みなむすびといふは…………… 六〇四
 第一六〇段 門に額かくるを…………… 六〇六
 第一六一段 花のさかりは冬至…………… 六〇九
 第一六二段 遍照寺の承仕法師…………… 六一〇
 第一六三段 太衝の太の字…………… 六一三
 第一六四段 世の人相逢ふ時…………… 六一五
 第一六五段 あづまの人の…………… 六一六
 第一六六段 人間のいとなみあへる…………… 六一八
 第一六七段 一道にたづさはる人…………… 六二〇
 第一六八段 年老いたる人の…………… 六二五
 第一六九段 何事の式といふ事は…………… 六二八
 第一七〇段 さしたる事なくて…………… 六三三
 第一七一一段 貝をおほふ人の…………… 六三五
 第一七二一段 わかき時は血氣内に…………… 六四二
 第一七三一段 小野小町が事…………… 六四六
 第一七四一段 小鷹によき犬…………… 六四九

第一七五段 世には心得ぬ事…………… 六五一
 第一七六段 黒戸は小松御門…………… 六五四
 第一七七段 鎌倉中書王にて…………… 六五六
 第一七八段 或所のさぶらひども…………… 六五〇
 第一七九段 入宋の沙門道眼上人…………… 六五二
 第一八〇段 さぎちやうは正月に…………… 六五四
 第一八一一段 ふれくこゆきたんば…………… 六五六
 第一八二一段 四條大納言隆親卿…………… 六五八
 第一八三一段 人つく牛をば角を…………… 六六〇
 第一八四一段 相模守時頼の母は…………… 六六一
 第一八五一段 城陸奥守泰盛は…………… 六六四
 第一八六一段 吉田と申す馬乗の申し…………… 六六六
 第一八七一段 萬の道の人たとひ…………… 六六七
 第一八八一段 或者子を法師になし…………… 六六九
 第一八九一段 今日其の事をなさむ…………… 七〇〇
 第一九〇一段 妻といふものこそ…………… 七〇二
 第一九一段 夜に入りてもののはえ…………… 七〇六

第一九二一段 神佛にも人のまうでぬ日…………… 七〇〇
 第一九三一段 くらき人の人をはかり…………… 七〇〇
 第一九四一段 達人の人を見る眼…………… 七〇二
 第一九五一段 ある人久我繩手を…………… 七〇六
 第一九六一段 東大寺の神輿…………… 七〇八
 第一九七一段 諸寺の僧のみにも…………… 七二二
 第一九八一段 揚名介にかぎらす…………… 七三三
 第一九九一段 横川の行宣法印が…………… 七三三
 第二〇〇一段 吳竹は葉ほそく…………… 七三五
 第二〇一段 退凡下乗の卒都婆…………… 七三六
 第二〇二段 十月をかみな月と…………… 七三七
 第二〇三段 勅勘の所に鞞かくる…………… 七三九
 第二〇四一段 犯人をしもとにて打つ…………… 七三三
 第二〇五一段 比叡山に大師勸請…………… 七三三
 第二〇六一段 徳大寺右大臣殿…………… 七三五
 第二〇七一段 龜山殿たてられむとて…………… 七三六
 第二〇八一段 經文などの紐をゆふに…………… 七三二

第二〇九一段 人の田を論ずるもの…………… 七三三
 第二一〇一段 喚子鳥は春の物なり…………… 七四五
 第二一一一段 萬の事はたのむべからず…………… 七四七
 第二一二一段 秋の月はかぎりなく…………… 七五一
 第二一三一段 御前の火爐に…………… 七五二
 第二一四一段 想夫戀といふ樂…………… 七五四
 第二一五一段 平宣時朝臣老ののち…………… 七五六
 第二一六一段 最明寺入道鶴岡の…………… 七六二
 第二一七一段 或大福長者のいはく…………… 七六五
 第二一八一段 狐は人にくひつくもの…………… 七七一
 第二一九一段 四條黄門命ぜられて…………… 七七三
 第二二〇一段 何事も邊土は賤しく…………… 七七八
 第二二一段 建治弘安の比は…………… 七八三
 第二二二一段 竹谷乘願房東二條院へ…………… 七八六
 第二二三一段 たづのおほいどのは…………… 七九〇
 第二二四一段 陰陽師有宗入道…………… 七九一
 第二二五一段 多久助が申しける…………… 七九二

第二二六段	後鳥羽院の御時……………	七六
第二二七段	六時禮讃は……………	八〇一
第二二八段	千本の釋迦念佛は……………	八〇四
第二二九段	よき細工は少しにぶき刀……………	八〇五
第二三〇段	五條の内裏には……………	八〇六
第二三一一段	園別當入道は……………	八〇八
第二三二二段	すべて人は無智無能なる……………	八三
第二三三三段	よろづのところがあらし……………	八六
第二三四四段	人の物を問ひたるに……………	八七
第二三五五段	ぬしある家には……………	八〇
第二三六六段	丹波に出雲と……………	八三
第二三七七段	柳筥にすうるもの……………	八六
第二三八八段	御隨身近友が……………	八六
第二三九九段	八月十五日……………	八八
第二四〇〇段	しのぶの浦の蟹……………	八五〇
第二四一一段	望月のまどかなる事……………	八五
第二四二二段	とこしなへに違順……………	八六〇

第二四三三段	八つになりし年……………	八三
徒然草概説……………	八五	
注釋語句索引……………	一一一	

目次終

最新研究 徒然草詳解

徳本正俊 著

序 段

つれづれなるままに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

語釋 ○つれづれなるままに——これといふ爲すこともなく退屈であるのにまかせての意。

「つれづれ」は、「徒然」の字を當てる。閑寂無聊の義。これといふ爲すべき仕事もなくして、暇で退屈なるさまにいふ。「なる」は、「にある」の約。「ままに」は、事のなりゆく通りにまかせてある義で、「につれて」「なるにまかせて」「によつて」と譯すべきである。元來は、「まにまに」の「に」の省略されたもの。○日ぐらし——終日。ひねもすといふに同じ、一日中といふこと。

序

口譯 何をするといふこともなく、無聊退屈なのにまかせて、終日筆を執つて、それからそれへと、心の中に浮んで來るとりとめもない事を、これといふ定つたあてもなく書きし

るすと、變に何だかど
うも狂氣じみて居る。

一説に「日くらし」と清音によんで、「日を暮らし」の義となし、昨日も今日も暮らすの意にとる説があるけれどもあまり用ゐられぬ。○硯にむかひて——「筆を執りて」とか、「文章を書く」といふ意味を具體的に示した修辭法である。○心にうつりゆく——それからそれへと心の中に浮んで来るといふ義。「ゆく」(行く)は、「来る」と譯してよい。物事が心の意識界に去來する義。「うつる」は、「移る」の意とするのが妥當であらう。然し一説には、「映る」の意で、「心の中に映する」意とするのもある。○よしなしごと——俗にいふ、くだらぬ事。つまらないこと。たわいもない事の義。この「ごと」は、「言」の意にあらずして、「事」の意。「よし」は、由来。由緒。理由などの意。故に「よし無し事」とは、深いわけもない事。何のわけもないつまらぬ事といふことになる。なほ、「よしなしごと」は形容詞活用の連體形を用ゐて、「よしなきこと」とあるべきであるが、終止形の「よしなしごと」となつてゐる。斯る語法は特殊の用法として存在してゐる。即ち「友無し千鳥」「根無し言」「耳無し山」「棚無し小舟」「目無し鬼」の如し。○そこはかとなく——これといふ定まつた事もなく。即ち斯ういふことを書かうといふ定つた考へもなくの意。本文の趣からいふと、作者兼好法師の心の中では、それからそれへと心の中に浮んでくる考へを、作者の考へで選定して、これは書かう、これは書くまいといふやうな一定の思慮もなく紙に書きつけてゆくといふのである。○かきつくれば——書いて行くと。○あやしうこそものぐるほしけれ——「あやしう」は、妙に。變に。奇怪に。不思議にの意。「ものぐるほしけれ」は、「物狂ほしけれ」で、狂氣じみて居る。何となく氣違ひみてゐるの意。上にある「こそ」といふ強意の助詞のために、「ものぐるほし」といふ形容詞の已然形「ものぐるほしけれ」で、文を

結んだのである。

第一 一段

いでや、この世に生れては、ねがはしかるべき事こそおほかめれ。
みかどの御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御有様はさらなり。ただ人も舍人などたまはるきはは、ゆゆしと見ゆ。その子、うまごまでは、はふれにたれど、猶なまめかし。
それより下つかたは、ほどにつけつつ、時にあひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめどいとくちをし。

口譯 さて、この浮世に生れて来ては、誰しも、ああもありたい、斯うもありたいと、いろ／＼と欲求する事(主として身分、地位をさしてゐる)が澤山あるやうだ。その中で先づ天皇の御位はまことに申すも畏れ多い事である。皇族の御末々の子孫の方まで、人間の御血統でない——神の御血統であらせら

第

段

三

語釋 ○いでや——「いで」「や」の二つの感動詞を重ねたもので、いや。さあ。いやもう。さてまあ。さあなど譯す。多少感歎の意がこもつてゐるが、ここではそれほど強い意味でなく、言葉を変更して説き起すに用ゐたもので、大體、「さて」「さてまあ」といふ位のものである。○この世に生れては——現世即ち、この俗世間に生れたからにはの意。俗界に生れなかつたならばいざ

れる事が、如何にも尊
いことである。次に攝
政關白の御身分の有様
は言ふまでもないこと
で、それ以下の普通の
貴族（大臣、大納言、
大將など）も、隨身な
どを朝廷から賜はる程
の身分の者は立派に見
える。その子供や孫達
までの間は、よしんば
零落してしまつてゐて
も、それでもやつぱり
上品で奥ゆかしい。（吾
等がこの浮世に生れて
はこらだと思ふが、
これ等の地位は門閥が

知らず、苟も俗界に生れたからにはの意。「この世に」とは、欲界、多慾多煩惱の現世にの意味
がよほど含まれてゐる。○ねがはしかるべき事——ああもありがたい、斯うもありがたいと望ましく
願ふ事。○おほかめれ——澤山あるやうだ。澤山あると見える。「おほかめれ」は、「おほくある
めれ」の約略で、「めれ」は「めり」といふ現在推量の助動詞の已然形で、ここでは上に「こそ」
といふ係があるから、その結びをなしてゐる。「めり」は、「見えあり」の約と考へられ、従つて
「のやうに見えてゐる」との原義で、自然に「らしい」「……のやうだ」といふ口語にあたる。こ
こは實は、「多かり」（多くある）と決定的にいふべきところを、斯く不確定的、推測的に婉曲叙
法を用ゐてゐるのは國文の一特徴をなしてゐる。古書では、「おほかめれ」を、「オーカンメレ」
とよんでゐる。○みかどの御位——天皇の御位の意。「みかど」は漢字の「帝」の字を當てる。も
と宮城の門（宮門、禁闕、宮闕）を尊稱して御門といつた。それが轉じて、皇居、朝廷を指すに
いたり、再轉じて天皇をも指し奉るやうになつた。天皇を直ちに指し奉るのを憚つて、その御所
についてお呼び申奉るのである。又この語は廣義には、廣く天皇のお治めになる國（國家）の意
味にもなつた。例、「唐土にも我がみかどにも云々」とある。「御位」のよみ方については、古來、
書によつていろ／＼ある。「オホンクラキ」「オンクラキ」「ミクラキ」などの如し。何れにても
可ならんも、「オホンクラキ」のよみ方は古くして、よいかと思はれる。○いとまかしこし——
非常に畏れ多い。至尊に對して、言葉をかけ申すは憚ることだから論外としての意。「いと」は、
物事の分量の多いことや、程度の高いことをあらはす副詞で、まことに、甚だ、非常に、大變に、
どうもなどの口語にあたる。最大級の意になして、「最も」と譯するのはあたらない。「いとま

あることで、吾等の如
く家柄のない者の到り
得る所ではない。それ
では）それより即ち合
人など賜はる身分より
下の地位は、どうかと
見るに、（もう、その邊
の下々の地位になつた
とて仕方がない）これ
等の地位の物どもは、
各自、身分に應じて、
よき時の運命に遭遇し
て榮譽を得、得意然た
る顔つきをしてゐるの
も、その人みづからは
えらいと思つてゐるだ
らうけれど、他人から
見ると全くつまらぬも

の「も」は、感興の氣分——いやもう、それはもうといふやうな餘韻のある心持をあらはす助詞
で「兎にも角にも」の「も」の如し。○竹の園生——皇族のこと。史記、梁孝王世家に、「於是
孝王築東苑三百餘里」とあり、その注に、「有宋州宋城縣東南十里、俗人言梁孝王竹園」と
ある。地道志といふ書に、「梁孝王東苑方三百里、即兔園也、多植竹、中有修竹園」などとあ
るから、「竹園」は皇族をいふことになつた。つまり孝王は前漢孝文帝の子であるから、「竹園」
の語を以て、天子の子孫、即ち皇子、親王、諸王をさすことに使つたのである。然して國文では
この「竹園」を譯して、「竹の園」又は、「竹の園生」といつたのである。新千載和歌集、雜、二
品法親王承覽の歌に、「傳へきて世々に變らぬ竹の園身にうきふしを殘さずがな」とある。「園
生」の「生」は、芝生、蓬生、麻生、淺茅生などの「生」と同じく、凡べて草の生えてゐる所の
稱。「園」といふ語が既に草木の生えてゐるところの稱であるから、結局「園生」といふのも、
單に「園」といふのと同じ。○末葉——子孫。後裔。末孫の義。前に「竹の園生」の「竹」の語
があつたので、その語の縁で、末葉といつたのである。斯かる關係の語を縁語といふ。末葉とは端
に出てる葉の義で、帝の御子の又その子孫をさす。○人間の種ならぬ——皇族は神の子孫で、
人の子孫でないといふ意。和漢朗詠集の「親王」と題する所に、「此花非人間種、瓊樹枝頭第
二花（後江相公）即ち大江朝綱。と、又今一つ、「此花非人間種。再養平臺一片霞」（菅三
品）即ち菅原文時との詩がある。これは菅三品と後江相公の二人が、或親王の御殿で會し、「名
花在閑軒」といふ題で、花を見て詩を賦し、二人共に同時に暗合して、「此花非人間種」の
一句七字が出来たといふ有名な話である。この句中の「此花」とは、即ちその親王をさす。徒然

のである。(斯う考へて
来ると、結局官位、名
譽なんかは羨望するに
足らぬものとなつてし
まふといふ作者の考へ
を述べてゐる)

草の「人間の種ならぬ」も、この和漢朗詠集中のこの詩句によつたものである。○やんごとなき
——非常に尊い。この形容詞は、前に強意の助詞「ぞ」の係り詞に對して、連體形の「き」で文
章を終止したのである。この語の原義は、「止む事無し」の音便で、止めて置かれぬ。捨てて置か
れぬといふ思想から、高貴の意となつたものである。○一人の人——攝政、關白たる人をいふ。職
原抄上の太政官の條に、「執柄必蒙一。座之宣旨。故稱一人。又云一所。事。」と云ふ。○「執柄」とは攝政、
關白のこと。攝關たる人は官次によらず、常に一座の上に着くからである。當時攝關の地位に上
り得た家柄は、皆、藤原氏の家柄である五攝家、即ち近衛、鷹司、九條、二條、一條の五家であ
る。官職知要に曰く、「攝政、關白をば大職と申すなり。かならず一座の宣旨とて、第一に着き
給ふべきよし宣下ある故に、一人の人と申すなり。同字ながらも、一人と申す時は、天子の御事な
り。世のつねの人の事を一人と申すこと、誰も知りたる事ながら、其事／＼によみかへる事、な
らひのうちにてある也」と。又、左大臣の事を、「一の上」又は、「一の大」といふこともある。
○御ありさまはさらなり——「御ありさま」(御有様)とは、攝政關白の服裝、態度より、護衛
の状態、平素の生活狀況、富の程度、權勢威力に至るまで總括されたものを言つてゐる。「さら
なり」は、いふまでもないの義。「さらなり」は、「新し」の義で、もとは「言ふも更なり」とい
ひ、今になつて又言ふのも事新しくなる。言はなくてもわかつてゐるといふところから出來た語
である。○ただ人——この語は、「凡人」「普通の人」といふ意はあるが、ここは前の「一人の人」
に對して言つたもので、「一人の人」以外の貴族達をさしてゐる。即ち清華(セイグワ、セイグエ)
大臣家、(ダイジンケ) 羽林家(ウリンケ)の如きを指してゐる。清華とは又英雄家ともいひ、

隨身



太政大臣を先途として、大臣大將を兼ねる家柄をいふ。而して清華たる家柄の子息を公達とい
ふ。大臣家とは、近衛の大・中・少將を兼任せずして大臣に任ぜられ、その任大臣を先途とする
家柄。羽林家とは、その官、大・中納言參議等を先途とし、近衛中・少將を兼ねる公卿の家柄を
いふ。又、「ただ人」が次のやうにやや特殊な使ひ方に用ゐられることもある。「二條の後のまだ
帝に仕うまつらで、ただ人におはしましける時の事なり」(伊勢物語)「後の晝の行啓、御産屋、
宮はじめの作法、獅子、狛犬、大床子などもまゐりて、御帳の前にしつらひすゑ、内膳、御へ
つひわたしたてまつりなどしたる、姫君など聞えした人そこそつゆ見えさせ給はぬ」(枕草子)
「三の君の藏人少將、かの中の君を聞え給ふを、いとよき人ぞ、ただ人とおぼさば、これを取り
たまへ見るやうありと常に申し給ふ」(落窪物語)「ただ人の御むすめの、かく后、國母にて立ち
つづき候ひ給へる、ためしまれにやあらむ」(増鏡、おりるる雲)の如きは、何れも皇族に對し
て、皇族以外の臣下をさしてゐる。○舍人などたまはるきは——舍人(トネリ)とは、左右近衛
府の將監以下の官人の總稱。朝廷の重臣に従ひ、その護衛の任務に當るものをいふ。これを「隨
身」(ズキンシン)又は「兵仗」(ヒヤウヂヤウ)ともいふ。「たまはる」とは、特に天皇の勅許を
得て具すべきものであるから斯くいふのである。「きは」は、身分、分際のこと。さて「舍人など
たまはるきは」とは、朝廷から舍人(隨身)などをいだけて外出などに引き連れて歩く程度の
立派な身分の者といふこと。偕て舍人の人數については、弘安禮節に曰く、「太上天皇十四人。
將曹二人、府生二人、番長二人(以上騎馬)近衛八人(歩)。攝政、關白十人。府生二人、番長二
人(以上騎馬)近衛六人。大將、大臣八人。納言、參議六人。中將四人。少將二人。諸衛督四

人。佑二人」とある。○ゆゆしと見ゆ——たいしたものだと思はれる。すばらしい者と見えるの義。「ゆゆし」とは、善い事にも悪い事にも、兎に角、事の甚だ尋常ならざるに使ふ。ここは善い方に用ゐてゐる。○その子うまごまでは——「うまご」は、「孫」に同じ。ずつて末孫の末々などになると別ではあるが、子や孫の代までぐらゐの所ではの意。○はふれにたれど——零落してしまつて居ても。おちぶれてゐても。この句を、「おちぶれてしまつてゐるが」と譯すると、既定的事實になつて、この意義にかなはなくなる。ここは一般的事實を言うて居るのである。斯く一般的に言ふべき場合に、特に事實的に言うて叙述を有力ならしめるやり方は多く用ゐられてゐる。○猶なまめかし——それでもやはり上品で奥ゆかしい。「猶」は、それでもやつぱりの義。「なまめかし」は、優美。優雅。上品。品位があり奥ゆかしいこと。現代はこの語を、婀娜つばいの意に使ふが、ここはその意でない。○それより下つかた——「それ」は、「舍人などたまはる」身分を指し、それより以下の身分の者をいふ。即ち、五位、六位、殿上人、受領などの身分をいふ。下つかたの「つ」は、接續の意をあらはす助詞「の」の古い時代のものが残つてゐるのである。外つ國。中つ國。天つ君。の「つ」の如し。○ほどにつけつ——身分に應じて。身分につけて。「つ」は、現在完了の「つ」の二つ連續したもので、或一つの働きが完了しては繰返されるといふ思想が原義であるが、この場合などは、殆ど「つ」から轉成した助詞「て」と同義に使はれてゐる。この「つ」を「ながら」と譯してはならぬ。○時にあひ——よき時の運命に遭遇して。時を得て出世すること。○したり類なるも——「したり類」とは得意らしい類をしてゐること。即ち得意さうな類つきをしてゐる（人）もの意。この句は、「みづからはいみじと思

ふらめど」の語を隔てて、「いとくちをし」に續く意味である。○みづからはいみじと思ふらめど——自分では大變えらいものだと思ふだらうがの意。「いみじ」は、非常だ。甚だしい。すぐれてゐる。えらいの義。「らめ」は、推量の助動詞「らむ」の已然形である。○いとくちをし——甚だつまらない。なまけないの義。上に「自らは」とあるから、ここは「他人の目から見れば」の意となる。

法師ばかりうらやましからぬものはあらじ。人には木のはしのやうに思はるるよ」と清少納言が書けるも、げにさることぞかし。勢猛にのしりたるにつけて、いみじとは見えす、増賀ひじりのいひけむやうに、名聞ぐるしく、佛の御教にたがふらむとぞおぼゆる。ひたぶるの世捨人は、なか／＼あらまほしき方もありなむ。

口譯 僧侶ぐらゐ羨ましくないものはあるまい。世人には木の切端の如きつまらぬものやうに自然思はられるよ」と、清少納言が書いてゐるのも、本當に尤もなことであるわい。彼等僧侶どもが、高い僧位僧官につき、世に時めいて、偉い勢でわめき立て騒ぎ立て

語釋 ○法師ばかり——僧侶ほど。「法師」は、佛法によく通じてゐて、その教法の師範となるものことであるが、ここは單に廣く僧侶をさした語。「ばかり」は、ぐらゐ。ほどの意で、「だけ」といふ意ではない。○うらやましからぬものはあらじ——羨ましくないものはあるまい。即ち自分は一向羨ましくないといふこと。「うらやましからぬ」は、「うらやましくあらぬ」の約。「あらじ」は、あるまいの義。「じ」は打消推量の助動詞。「あらざらむ」よりは強い感じを出してゐる。

てゐるにつけて、それが別段えらいとは見えない。増賀上人の言うたとか言ふやうに、さういふのは寧ろ、世上の名譽外聞に囚はれ苦しんでゐるもので、佛の御教に背くものだらうと思はれる。然しそのやうな僧侶達とは異つて、名譽外聞など浮世の思ひは捨ててしまひ、佛道修業に専念な僧ならば、それは却つて、そのやうな風にありたいと望まじきところもあるだらう。

○人には木のはしのやうに思はるるよ——法師といふと、世人からは自然に木の切端のやうにつまりぬものと思はれますよの義。「木のはし」は、木のきれはし。こつばともいふ。ごく値打のない、つまりぬ物の喩。流布本の枕草子第五段に、「思はむ子を法師になしたらむこそは、いと心ぐるしけれ。さるはいとたのもしき業を木のはしなどのやうに思ひたらむこそ、いといとほしけれ。精進物の悪しきを食ひ、寝ぬるをも、若きはものもゆかしからむ。女などのある所をも、なごか忌みたるやうに、さしのぞかずもあらむ。それを安からずといふ……」とある。この枕草子の意味は、僧侶になることは、誠に有難く頼もしいことではあるが、その實は世人が、僧侶をただ木の切端のやうなつまりぬものと思つてゐる。かの僧がまづい物を食ひ、難行苦行をして居ても、少しも同情や尊敬を世人はしない。だから可愛く思ふ子を僧侶にするのは氣毒だといふのである。徒然草のここは、枕草子の意味を少しかへて、僧侶はくだぬものだと清少納言は枕草子の中に言つてゐるといふことにしたのである。前田家本枕草子には「思はむ子を法師になさんこそいと心苦しけれ。同じ人ながら、烏帽子、冠のなきばかりに、木のはしなどのやうに、人の思ひたるよ」とあつて、徒然草の文によくあたる。兼好の見た枕草子は流布本でなく、三卷本の前田家本枕草子の如きものであつたかも知れぬ。「思はるる」の「るる」は自然可能の助動詞である。○清少納言——枕草子の著者。清原元輔の女。一條天皇の時。皇后定子に仕へ、紫式部と共に才名一時に高かつた才媛。○げにさることぞかし——成程尤なことであるよ。「げに」は、本當にの義。成程如何にもさうだと了解した趣をあらはす語。「さること」は、「然あること」の約。「ぞ」も「かし」も丁寧な文意をおさへて念を押し強める助詞。○勢猛に——猛々しく。居だけ

高になつて。えらい勢で。○ののしりたるにつけて——偉い僧侶僧官になつて、猛烈に威張り散らしてゐたとて。「ののしる」とは、大きな聲で言ひ騒ぐさま。「いみじとは見えず——僧その人は得意かも知れないが、物のわかつた者には、格別偉いとは見えない。○増賀ひじり——増賀は參議橋恒平の子。比叡山天台座主慈惠僧正の弟子。後年は多武峯に住し、長保五年寂、年八十七。學徳高く奇行多し。極めて心猛く、偏に名利を厭ひて、わざ／＼狂氣の如き振舞をした。彼の傳記については、長明發心集卷一、今昔物語卷十二、元亨釋書卷十に詳しく見えてゐる。「ひじり」は、ここでは高僧といふこと。なほ「ひじり」にはその他にいろいろの意味に用ゐられることもある。○いひけむやうに——言つたとかいふやうに。「けむ」は過去推量の助動詞。○名聞ぐるしく——「名聞苦しく」で、「名聞」とは、世の名譽評判即ちほまれといふこと。この意味は名譽評判を得ようとして、その爲に心身を苦しめるといふことで、つまり名譽慾にとらはれ、そのため常に氣をつかふこと。長明發心集第一、増賀の師、慈惠が大僧正に任ぜられて參内の折、増賀瘦牛に御し、乾蛙を劍に擬し、前驅に交りていつた増賀の詞に、「名聞こそ苦しかりけれ、乞食の身ぞたのしかりけると歌ひて打はなれにけり」とあるのと、徒然草のここにある「名聞ぐるしく」とは意味が少し異つてゐる。○佛の御教にたがふらむ——釋迦の教へ、即ち佛敎の教義とは違ふだらう。佛敎では名利の外に超越すべきことを説くので、さういふ名聞の慾望にとらはれてゐることは、佛敎に違反するといふのである。○ひたぶるの世捨人——佛道以外に何等の希望も期待もなく、ひたすら浮世を思ひ捨てて、佛道修行に精進して居る人。「ひたぶる」は、専一、一すぢ、専らの義。「世捨人」は、僧侶。沙門。桑門。○なか／＼——却つて。反對に。俗世

間に勢力権勢のある僧侶の方を、多くの人は偉いと思ふけれども、さういふ僧侶よりは却つて反對の意。○あらまほしき方もありなむ——ひたぶるの世捨人は、世間では認められないが、さういふ人の方が、却つて望ましく慕はしい所もあらう。「あらまほし」は、望ましいこと。即ち、さういふ風にありたいと思ふこと。「まほし」は希望の助動詞。

人はかたち有様のすぐれたらむこそ、あらまほしかるべけれ。物うちいひたる、聞きにくからず、愛敬ありて、詞多からぬこそ、あかすむかまほしけれ。めでたしと見る人の、心おとりせらるる本性見えむこそ、くちをしかるべけれ。

語釋 ○かたち有様——容姿風采。「かたち」が容貌で、「有様」は風采ときまつてゐるのでなく、外貌、顔つき、態度など概括してかくいつたものである。○すぐれたらむこそ——すぐれてゐることはの意。「たらむ」は、完了の助動詞「たり」の未然形「たら」に、「む」といふ未來の助動詞がついたものである。然し「すぐれてゐようことは」の意味であつたのが、現今は斯る語法はすたれて、單に「すぐれたること」といふのにあたる。○あらまほしかるべけれ——望ましいことであらう。○物うちいひたる——何か一寸物をいうてゐるもの。「もの」は、「何か物を」といふ口語に當る。「うち」は動詞に添はる接頭語で、軽く一寸その動作の行はれる意をあらはす

口譯 人は容貌風采のすぐれて美しくあるのは、大に望ましい事である。何か物を一寸話しても、それが聞きにくくなく、愛嬌がたっぷりあつて、言葉數が多くない人こそ、飽くことなく、いつ／＼迄も對坐してゐたく思ふものである。ところが是れまで立派な偉い人だと思つて見てゐる人

が、やがて自然と今迄のゆかしさのなくなるやうな見下げた地金のあらはれるのは、實に苦々しいやなものである。

のがその原義である。「いひたる」は連體假止ともいふべきで、言うてゐるそれが。言うてもそれが。といふやうに、その動作を直截に活潑に讀者に訴へる語法である。○聞きにくからず——聞いて氣持がよく、相手に快感を覚えさすやうな言ひ方で。これは中止句であつて、終止句ではない。○愛敬ありて——容貌態度にかはゆい所があつて。現今いふ「あいきやうたつぶり」といふのにあたる。○あかすむかまほしけれ——いつ迄も飽くことなく對坐してゐたい。「飽かず」は、しても／＼飽くことがないといふ意で、これは凡て事柄のよい方にいふ。その外に、あきたりない。不満足に思ふといふ意もあるが、ここはさうでない。○めでたしと見る人の——立派な人だと思つて見てゐる人が。「めでたし」は、「愛痛し」の義で、大層よい。誠に結構だといふ意。○心おとりせらるる本性——自然に今迄のゆかしさが無くなるやうな地金。「らるる」は自然可能の助動詞。「心おとり」は、思つて居たよりもつまらないと思はれること。即ちこれまでは、先方の人を立派な人物だと思つてゐたのが、案外さうでなかつたので、つまらない人だと心に感ずることをいふ。「本性」は、本來の性質。俗にいふ「地金を出す」といふ時の「地金」にあたる。○見えむこそ——「見ゆるこそ」といふのを、未來の助動詞「む」を入れて、なだらかに言ひ廻したものである。見えるのはの義。○くちをし——苦々しいの義。「くちをし」は、物足らぬ氣がして歎かはいといふ意の語であるが、此處はそれが少し強くあらはされてゐる。「べけれ」は推量の助動詞。

口譯 人品、容貌こそは生れつきのもので、どうにもならぬものであらうが、人の精神はどうして賢い上にも、更に一段と賢いやうに變へようとすれば變へられないことがあらうか。そのやうなことはない。それでは容貌や氣だてのよい人であれば十分かといふに、それでも學問藝能がないといふことになる、自分よりも身分も低く、顔も醜い下品な人たちの中であつて、それ等の人だちにすら、

品かたちこそ生れつきたらめ。心はなか賢きより賢きにもうつさば移らざらむ。かたち心ざまよき人も、才なくなりぬれば、品くんだり、顔にくさげなる人にも立ちまじりて、かけすけおさるること、本意なきわざなれ。

語釋 ○品かたち——「品」(シナ)は、「人品」(ジンピン)のこと。品がよいとか、品がわるいとかいふ場合の「品」で、人格などいふ道德上の堅苦しい意味ではない。源氏物語の「品あてにえんならむ女」などの如き「品」で、主として外形にあらはれた姿をさす。「かたち」は容貌のこと。「かたちありさま」といふ前にあつた語とは語の本質が少し異つてゐる。古注ではこの「品」を、官位官等の品で、遙かに第一節の「一人」云々に應じてゐるといつてゐる。○生れつきたらめ——「生れつきてあらめ」の約。人品などは生れつき定まつたもので、何とも仕方がないであらう。「たらめ」の「め」は上の「品かたちこそ」の「こそ」に應じて「む」の已然形で結びとなつてゐる。○心はなか賢きより賢きにも云々——心はどうして賢い上にも更に賢くといふこといだらうか、いや賢くなるとの意。「なかか」は、どうしての義。下の「移らざらむ」にかかつて、結局「移すことが出来る」の意となる。「賢きより賢きにも」は、賢い上にも更に賢くといふことで、論語學而篇に、「賢レ賢易レ色」の句があるけれども、ここはこれによつたものでなくして、皇侃の論語義疏の「能改易好色之心以好於賢、則此人便是賢於賢者」によつたものと思はれる。然し、野槌に、「論語學而篇に、賢レ賢易レ色を、カシヨキヨリカシヨカラントナラバ、イ

わけもなく脆く壓倒されるのはどうも残念なことである。

ロニカヘヨとよむ點、古來あるによりて、ここに引用するなり」とある。或はこれによつたものかの一説もある。○かたち心ざまよき人——容貌もよく、氣だてもよい人。○才なくなりぬれば——「才」は、ザエとよむ。學問藝能のこと。「なくなりぬれば」は、是れまで一寸學問藝能のあるやうに見えたのが、とかくしてゐる間に、實は何の學問藝能もないことがあらはれてくるとの意。○品くんだり——この「品」は、人品の意ではない。身分。家柄。種姓をいふ。自分より身分の低い者をさす。○顔にくさげなる人——醜い顔をした下品な人といふこと。必ずしも恐ろしい顔をした人といふのではない。○立ちまじりて——單にさういふ下品な人々の間にあつての意。實際の意ではない。○かけず——さはらず。滯らずの義。わけもなく。もろくといふこと。この語の比較の義に解く人もあるがよくない。○けおさる——壓倒される。壓伏される。おされるの義。「け」は接頭語で、形容詞、動詞などに冠して稍その意を強くする。○本意なきわざ——残念な事だ。遺憾な事だ。「わざ」は、ここでは「こと」の意。

ありたき事は、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、又有職に公事の方、人の鏡ならむこそ、いみじかるべけれ。手などつたなからず走りかき、聲をかしく拍子とり、いたましようするものから、げこならぬこそをのこはよけれ。

口譯 人として習いたいと願ひ望むことは、本式の學問(即ち四書五經の經學)や、漢詩を作る道、和歌の道、音楽の道である。それ

から又有職や公事の方面に於ても、人の手本となつてゐるといふことは、偉いことである。その他、筆蹟なども上手にすらりと書き、聲面白く歌の拍子をとつて歌ひ、人から酒をすすめ吞まされるやうな場合には、痛み入つた困惑の有様では居るもの、さりとして下戸ではないといふのが男としてはよろしい。

語釋 ○ありたき事——ありたい事。望ましい事。願はしい事。習ひ知つて居たい事。○まことしき文の道——本式の學問の道。風流な詩歌の道に對して、實用經世の學問と言つたのである。即ち四書五經の道の如き修身齊家治國平天下の道をさしてゐる。○作文——「サクモン」とよむ。漢詩を作ること。即ち詩作のこと。十訓抄第七の十九に、「匡衡、齊名作文の座にて晚寺鐘聲渡水來といふ一句を作り合はせたりけるも此の體の事とぞ」とある。この「作文の座」とは、詩會の席をいふ。この頃作文（サクモン）といつたのは、専ら漢詩のことをいつたもので、第六十七段の作文もこの意味である。古今著聞集卷第四に、「治承二年五月晦日内裏にて密々に御作文ありけり云々。御製の落句に、「豈忘一字勝金徳。可憐白頭卷師」かく作らせたまひたるを承りて云々。」同卷に、「治承二年六月十七日、延久の古き跡を尋ねて、中殿にて御作文ありけり（中略）その後太政大臣御製をたまはりて、文臺の上にひらかれければ、民部大輔ぞ講じ奉りける。禁庭月下勝遊成。有管有絃有頌聲。宴席懋追延久跡。詞花猶異昔風情。發句下の七字、中宮大夫の詩に合ひて侍れば云々」とある。○管絃の道——音樂の道のこと。「管」は、「タダ」で、口で吹いて奏するもの、笛、尺八、笙、箏など。「絃」は、「イト」で、手で糸を弾き奏するもの。琴、琵琶などの樂器である。「道」は、上の「作文」「和歌」にもかかつて、「作文の道」「和歌の道」の意となる。○有職に公事の方——「有職」は、イウソク、又は、イウシヨク、イウソコともよむ。もとは、「物知り」の意で、「有識」と書いたものが、近世となつてからは誤つて、「有職」と書き慣れてゐる。官職その他、公家の故實をいふ。（後には武家故實といふものも出來たが、此所にいふのは公家に關するものだけである）「公事」は、朝廷の政務及び儀式をいふ。「に」

は、並に、その上といふ意の助詞。○人の鏡ならむこそ——「鏡」は、手本とか模範といふこと。人の手本であることはの意。「む」は婉曲に表示したことを示す。○いみじかるべけれ——非常に偉いことである。これは最初の「ありたき事は云々」からを結んだものではなくして、「又有職に公事の方云々」からを結んだものである。「ありたき事は云々」は、「管絃の道」で一度切れてゐる。即ち「管絃の道なり」と、「なり」を入れて解するのがよい。○手などつたなからず走り書き——「手」は、筆蹟、手蹟のこと。「つたなからず」は、まづぐなく、相當にうまく。「走り書き」は、すら／＼と達筆に走り書くこと。早く書きなぐる意ではない。○聲をかしくて拍子とり——聲面白く歌をうたつて、歌謡の拍子をとること。拍子には手拍子、扇拍子などある。ここは上手に拍子をとつて、面白く歌をうたふことをいふ。一本に、「聲を、かくして云々」としてよんでゐるが、これは後の「いたましようするものから云々」と對應して頗る面白い。即ち聲を隠して忍び音で拍子をとるといふことになる。○いたましようするものから——痛み入り困り果てたやうな有様にするもの。「ものから」は反對の思想をあらはす語。もの。けれども。ながらの意。○げこならぬこそ——いくらか少し位は酒を吞む方が。「げこ」は、「下戸」と書く。酒の吞まれぬこと。又はその人をさす。上戸（大酒呑み。大酒家）に對する語。○をのこはよけれ——男はよいといふのである。をのこは「は」は、多くのものの中から、特に一つを取り立てていふ助詞である。即ち女や子供、法師で酒を吞むのはよくないが、それは別として俗男はよいといふのである。

第一一段

口譯 遠い昔の聖天子の御代の仁政の事も忘れ、民が愁ひ歎かうが、國家が衰頹しようが、さういふ事にはおかまひなく、何事につけても、出来るだけ華美傲奢を盡して、それを以て自分が偉いと思ひ、

あたり狭しと威張り散らしてゐる人こそ、どうもはや思慮のない人だと思はれる。衣冠から馬や牛車に至るまで、わざ／＼立派なものを

いにしへの聖の御代の政をも忘れ、民の愁、國のそこなはるるをも知らず、よろづにきよらをつくして、いみじと思ひ、ところせき様したる人こそ、うたて思ふところなく見ゆれ。「衣冠より馬、車にいたるまで、有るにしたがひて用るよ。美麗をもとむる事なかれ」とぞ、九條殿の遺誠にも侍る。順徳院の禁中の事ども書かせ給へるにも、「おほやけの奉り物は、おろそかなるをもてよしとす」とこそ侍れ。

語釋 ○いにしへ——古へ。遠い昔。同じく過去のことでありながら、「いにしへ」といふと、「昔」といふより遙かに遠い時代といふ感じがする。○聖の御代の政——聖徳すぐれた天子の御代の御仁政。「聖」は聖天子。聖主を意味する。即ち徳のすぐれた天子といふ意。我が國では仁徳天皇、醍醐天皇（延喜帝）、村上天皇（天曆帝）をさし、唐土では、堯、舜、禹、湯、文、武、周公などをさす。○民の愁——この「愁」（ウレ）は、名詞とも動詞とも見られるが、文章上から見ると、下の「國のそこなはるる」に對し、これを動詞と見る方がよい。然し兼好が書く時の心

のを作らず、あり合せのものをそのまま使へ。好んで華麗な物を使ふやうな事があつてはならぬ」と、九條殿藤原師輔公の遺誠にも書いてある。又順徳院が宮中の事をいへば、お書きになつた禁秘鈔といふ書物の中にも、「天子のお召しになる御衣は粗末なのがよい」と書いてござります。

理上から見ると、恐らく最初に、「民の愁」といふ一つの熟語が思ひ浮んできたので、この「愁」は名詞として記し、次に「そこなはるる」と動詞に變つたものであらう。○そこなはるるをも知らず——「そこなふ」は、傷つけられる。損ぜられること。「るる」は受身の助動詞「る」の連體形。而して「こと」といふ體言が省略されてゐる。即ち「なこなはるる」ことをも知らずである。「知らず」は「存知せず」の意ではなくして、「氣がつかない顔をする」「意に介しない」の義。○よろづ——萬事に。何事にも。ここは衣食住のすべてにわたつていふ。○きよら——華美。美麗。「きよらをつくして」は、出来るだけ華美贅澤をすること。「ら」は接尾語であつて、「野ら」「うすら寒し」などの「ら」である。○いみじと思ひ——すぐれたことと思ひ。即ちえらいと思ふこと。○ところせき様したる——あたりも窮屈だといふやうに威張り散らしてゐる。即ち驕り高ぶつたさま。○うたて思ふところなく見ゆれ——どうもはや無分別であると見えるの義。「うたて」は尋常ならぬこと。餘りひどいこと。俗語の「どうもはや」に當る。「思ふところなく」は、無分別である。思慮がないに當る。さて「うたて」の副詞は、下の「見ゆれ」にかかる。○衣冠より馬、車——「衣」は衣服で、袍、指貫、「冠」は「カンムリ」をさす。「馬」は乗馬。「車」は牛車。「馬車にいたるまで」の「にいたる」傳幽齋本正徹本なし。○有るにしたがひて——あり合せの物に従つて。○九條殿の遺誠——「九條殿」は、右大臣藤原師輔公をさす。公の邸は京都九條通りにあつたのでかくいふ。關白忠平の子。朱雀、村上の二帝に仕へ。天慶五年大納言。天曆元年右大臣。天德四年薨。年五十三。書家として有名な佐理はこの人の兄實賴の孫にあたる。「遺誠」とは、子孫を誡めるために書き残したもの。群書類從卷四百七十五に出てゐる。その中に、「始

自ニ衣冠ニ、及ニ子車馬ニ、隨レ有用之、勿レ求美麗ニ、不レ量ニ己身ニ力イ、好ニ美物、則必招ニ嗜欲之誘、云々」とある傳幽齋本、延徳本は御遺誠。○侍る——「有り」の敬語法（謙稱）で、會話文、消息文に限つて用ゐられたのが中古文の例であるが、徒然草には地の文の「有り」に相當するところに「侍る」を用ゐた所が隨所にある。本段末の「侍れ」もそれである。○順徳院の禁中の事ども書かせ給へる——「給へる」は、「給へるもの」の意で、禁秘鈔をいふ。「禁中」は宮中のこと。宮中は安りに人の入るを禁じてゐる所だから斯くいふ。順徳院は後鳥羽天皇の第三皇子。正治四年、土御門天皇について御即位。承久三年仲恭天皇に讓位。後鳥羽院と共に關東軍討伐を計られ、戦ひ敗れて佐渡に遷され給うた。斯くて仁治三年遂に佐渡にて崩御。寶算六十四。○おほやけの奉り物——「おほやけ」は天子のこと。「奉り物」は御召物、即ち御裝束をさす。是れは禁秘鈔卷上に「御裝束事」の條に、「但天位着御物、以疎爲美」とある。○おろそか——疎略。手輕の義。華美贅澤の反對で、前の「清ら」の反對をいつてゐる。

第三段

口譯 すべての事にいくらすぐれてゐても、戀愛の趣のわからないやうな男は、まことに

萬よろづにいみじくとも、色いろ好まざらむ男は、いとさうぐしく、玉たまのかた當あたなきことこちぞすべき。露霜つゆしもにしほたれて、所さだめすまどひありき、親おやのいさめ、世よのそしりをつつむに心のいとまなく、あふささるさに思ひみだ

物足りないもので、恰度玉の厄サカヅキの底のないやうな氣持がするであらう。夜露にしよぼ濡れて、どこと定つたあてどもなく、さまよひ歩き、それにつけては親の訓戒や、世間の非難とかに氣兼ねをするので、心の長閑になる暇もなく、とかく思ふやうにならない事が多くて、その爲めにいろ／＼と思ひ亂れる。しかも女の所で一緒に休むことも無いではないが、大部分は獨りで寝ること

れ、さるは獨ひとり寝がちに、まどろむ夜よなきこそ、をかしけれ。さりとして、ひたすらたはれたる方かたにはあらで、女をんなにたやすからず思はれむこそ、あらまほしかるべきわざなれ。

語釋 ○萬にいみじくとも——萬事にすぐれてゐても。「萬」(ヨロヅ)は、學問、道德、藝能、容姿などをさす。○色好まざらむ——戀の趣きを解しないやうなこと。尤も戀といつても、此所は男を主としていつてゐる。「色」は女の義で、戀。戀の趣きのこと。傳幽齋本正徹本には、「色こののみならざらん」○さうぐしく——寂々さびしの音便。淋しく物足らぬ心地がする。殺風景。乾燥無味。「驟々さうさう」と意味が異なる。○玉の厄の當なきこち——「玉の厄」は、非常に立派な盃といふこと。立派な盃でも底がなければ、肝心の酒が入らぬ。故にいくら立派なものでも、肝要の所が缺けてゐては役に立たぬといふ喩。「こちぞすべき」の「べき」は推量の助動詞。さういふ心地がするであらうの意で、本人は何とも思はなくとも、外から見ると、そんな氣がするだらうといふのである。「玉の厄」は、必ずしも玉で作つた盃といふのでなく、玉はたゞ物の美しく立派であることをいひあらはしてゐる。「厄」は音「シ」。圓い盃をいふ。「當」は底(そこ)である。韓非子外儲説右上傳二に、「爲レ人主而漏ニ泄其羣臣語、譬猶玉厄之無レ當」とあり、文選、左思の三都賦序に、「且夫玉厄無レ當、雖レ寶非用」などあるのによつたものか、或は當時このやうなことが世に通用されてゐたものであらう。○露霜——「ツユジモ」とよむ。井上通泰氏の萬葉集新考に、「ツユジモと濁りて唱ふべし」とある。次に「露霜」とは、露と霜との二つに非ずして、單

が多く、夜もよく眠られず、うつら／＼して夜を明かすときが多い。斯ういふ戀愛こそまことに面白いものである。そんなに婚女子のために氣苦勞するからといって、ただ一途に女に耽り溺れるといふやうなことなく、寧ろ、女にこの男は興し易い男でないと思はせるやうなこそ、男子としては當然望ましい事である。

に露といふことである。古今集遠鏡に、「露霜といふは、ただ露のことなり。萬葉に多し。皆然り」と。又玉かつま卷四に、「そも／＼ただ露を露霜といはむことは、いかにぞや開ゆれども、此名によりて思ふに、志毛といふは、もとは露をもかねたる總名にて、其の中に氷らであるを都由志毛といひ、省きて都由とのみもいへるなり。そは都由は粒忌のよしにて、忌とは清潔なるを云ふ。雪の由も同じ。されば露霜とは、粒たちて清らなる志毛といふことなり」とあるのによつて、この露霜は單に露といふことをさす。○しほたれて——「潮垂」で、漁夫の袖などが潮水に垂れて濡れることから、歌では多く涙で袖のぬれるをいふ。此所は夜露で着物の濡れることをいふ。○所さだめずまどひありき——女色を漁つて、あちらこちらとさまよひ歩くこと。どこも定めたあてもなくさまよひあるく。「まどふ」は、心に明確な判断を失つた所から来るすべての行為にいふ動詞である。「ありく」は、「あるく」の古語。○親のいさめ世のそしり——親のいまいめや、世間の非難。「いさめ」は、現今では、専ら下から上に對する忠言を諫めといふが、古文では上から下に對する忠言をも「いさめ」と言つた。○つつむに——憚る。氣兼ねをする。遠慮をする。親がやかましく訓戒するとか、世間の人が非難するとかいふことで、それを憚り氣兼ねをする爲めにの意。○心のいとまなく——心のひまがなく。始終氣兼ねばかりしてゐるので、心がのんびりした時はさつぱり無いといふのである。○あふさきさきに思ひみだれて——「あふさきさき」とは、一方がよければ、他の一方が悪く、左が餘れば右が足らぬといふやうに思ふやうにならぬことをいふ。即ちとかく思ふやうにならないので、そのために氣苦勞すること。古今集俳諧歌に、「そへにととすればばかり、かくすればあないひしらすあふさきさき」とあり、源氏

物語帯木の卷に、「とあればばかり、あふさきさきに、なのためにさてもありぬべき人の少きを云々」とある。○さるは——さうであるが。しかも。吉澤義則氏の「語法の任務に就いて」(國語國文の研究)に枕草子の「さるはかう思ふ人、よろづのことにすぐれてもえあらじかし」の「さるは」について、「さるはといふ語を、そのわけはと釋く人が多いやうであるが、それは誤であつて、それでもと釋かなければならぬ」とあるのによる。○獨寢がちに——女の所へ行つて一緒に休むこともないではないが、大部分は一人で寝ることが多く。○まどろむ——眠ることは眠るが、よく眠られないことをいふ。とろ／＼と眠ること。即ち熟睡出來ぬさま。○をかしけれ——興味がある。戀をするなら、さういふ戀が面白いといふのである。○さりとして——然ありとしての義。さうかといつて。そのやうに女の爲に氣苦勞するかといつて。○ひたすらたはれたる方にはあらで——「ひたすら」は、一途に。専ら。ひとへの義。「たはる」は、うつつをぬかすこと。耽り溺れること。婚女子のために氣苦勞をするからといつても、身も魂も全然、女のために奪はれるといふやうな風ではなくの意。○女にたやすからず思はれむこそ——婚女子に興し易い男だと思はれない事。「たやすからず」の「た」は接頭語。「やすくあらず」の義。「たやすく思はれる」とは、興し易い奴だと思はれる。即ちどうでも思ふやうにしてやることが出来る男だと、女の方に思はれること。○あらまほしかるべきわざなれ——當然望ましいことである。

第四段

後の世の事、心にわすれず、佛の道うとからぬ、こころにくし。

口譯 此の世の事即ち現世の事ばかり考へないで、來世の事も心の中に忘れず思ひ、(即ち現世で善因をなせば、後生にて善果のあることなどを思ふのである)佛の道(供養、讀經、寫經、寺詣などをなさず)をなほざりにしないのは奥ゆかしいものである。

語釋 ○後の世の事、心にわすれず——「後の世」は、後世、來世、死んだ後の世のこと。現世の事ばかりを考へず、死後の事も始終心の中に忘れず思つてゐること。○佛の道うとからぬ——佛道にうとくはないのは。「佛の道」とは、佛敎に關する學問、敎理の知識ではなくして、信仰を持つとか、讀經、寺詣、墓參、供養、勤行、寫經といったやうなこともを總括してさす。うとからぬ」は、うとくなくはしない。なほざりにしない。○心にくし——奥ゆかしい。自分の心に、にくらしく感ずるほど羨ましいといふ心持から來た言葉である。

第五段

不幸に愁にしづめる人の、頭おろしなど、ふつつかに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つこともなく明かし暮らしたる、さる方(かた)にあらまほし。顯基中納言のいひけむ、配所の月、罪なくて見む事、

口譯 身の不幸に遭つて深く憂ひに沈んだ人が、急に頭を剃つて佛門に入るといふやう

さもおぼえぬべし。

に、ふとしたことからつまらなく入道出家の決心をしたといふのでなくて、心から靜かに佛門に入つて、居るか居ないか分らぬ様に門をしめきつて、何の期待することもなく、明し暮らして日を送つてゐるのは、それはそれで又その向きに、如何にも望ましく羨ましいものだ。顯基中納言が言つたとかいふ、「配所の月を罪なき身で見たい」といふこと、それは成程さう思はれさうな事だ。

語釋 ○不幸に——不幸の爲に。不幸によりて。即ち何か不幸な目にあつたので。この不幸とは、思ふに親に離れるとか、子に先立たれるとか、愛妻に去られるとか、主人に別れるとかいふやうな生別、死別のことをさしてゐる。○頭おろしなど——「頭おろす」とは、剃髮して佛門に入ること。出家。圓頂緇衣の身となること。「頭おろしなど」は、頭髮を剃つて入道するなどのやうにの意。動詞の連用形に「など」をつける例は時々ある。源氏物語、帶木の卷に、「唯うはべばかりの情に、手走り書き、折節のいらへ心得て、うちしなどばかりは、随分によるしきも多かりと見給ふれど」とある。○ふつつかに思ひとりたるにはあらで——「ふつつかに」とは、不心得で、深い考へもなく。この語は、高尚、優美、上品などの反對で、行届かない。洗煉されてゐない意である。「思ひとりたる」とは、思ひ定めた。決心したる。心に定めた義。即ちここは深い思慮がなく輕卒に出家の決心をしたのでなくの意。○あるかなきかに——居るか居ないのかわからないくらゐひつそりと。○門さしこめて——門の戸を鎖し固める。即ち門をとちて、家に引籠り、世間との交渉を絶つをいふ。○待つこともなく——期待することもなく。求めるところもなく。「待つ」とは、心の中に何かあてにしてゐること。期待すること。○明かし暮らしたる——夜を明かし、日を暮らすことで、毎日々と日を過ごすことをいふ。「暮らしたる」は、「暮らしたることは」の意。○さる方にあらまほし——さういふ風であつて欲しい。「さる方」は、「然る方に」の意。○顯基中納言——大納言源俊賢の二男。源顯基のことで、長元二年(三十歳)

參議。同八年十月權中納言、翌年（三十七歲）四月出家。永承二年寂。年四十八歲。後一條院の近習で、院崩御の後、大原で出家した。○配所の月罪なくて見む事——罪があつては氣がとがめるけれども、罪も何もない身の、ゆつたりとした心境で、荒涼たる配所に一人靜かに美しい月の景色を眺め、閑寂な氣分を味つて見たいといふのである。○「配所」とは、流罪左遷の人の置かれる地で、都を遠く離れた山奥か、海邊などである。發心集卷五に、「中納言顯基は、大納言俊賢の息、後一條の御門に時めかし仕へ給ひて、若うよりつかさ位につけて、うらみなかりければ、心は此世の榮を好まず、深く佛道を願ひ、菩提を望む思ひのみあり。常のことぐさには、樂天が詩に、古墓いづれの世の人ぞ、姓と名とを知らず、化して路傍の土となりて年々春草生ひたりといふことを口づけ給へり。いみじきすき人にて、朝夕琵琶をひきつ、罪なくして罪をかうぶりて、配所の月を見ばやとなむ願はれける」とあるが、撰集抄卷三には、「中納言天台楞嚴院にのぼりて頭おろして大原といふ所になむ行ひすましていまそかりける。朝に仕へしそのかみより、きは明暮はあはれ罪なくして配所の月を見ばやと涙をながし云々」とあるのが、徒然草のここになつてゐる。なほこの事は、十訓抄六、寶物集七、古事談一東齋隨筆にも出てゐる。○さもおぼえぬべし——そんな氣もしさうな事だ。

第六段

我が身のやんごとなからむにも、まして數ならざらむにも、子といふも

口譯 自分の身が尊く

あるのでも、子といふものはない方がよい。ましてつまらぬ賤しい身分であるのは、猶更子といふものがない方がよい。前中書王、九條太政大臣、花園左大臣は、皆子孫の絶える事を願つてゐられた。染殿の大臣も、「子孫のおありにならぬのがよい。子孫の劣つてゐるのはよくない事だ」と、大鏡の中に書いてある。聖徳太子が生前に御自身の御墓を前以て造らせあそばされた時にも、「墓所の此處を切

のなくてありなむ。前中書王、九條太政大臣、花園左大臣、皆ぞう絶えむ事をねがひ給へり。染殿大臣も、「子孫おはせぬぞよく侍る。末のおくれ給へるは、わろき事なり」とぞ、世繼の翁の物語にはいへる。聖徳太子の、御墓をかねてつかせ給ひける時も、「ここをきれ、かしこをたて、子孫あらせじと思ふなり」と侍りけるとかや。

語釋 ○やんごとなからむにも——尊い身分であるのでもの意。「やんごとなきにも」といふのを婉曲に書いた叙法。「にも」の「も」は、並列の意の助詞にして、次の「數ならざらむにも」の「にも」と對し、共に「子といふものなくてありなむ」にかかる。「やんごとなし」とは、身分が尊いとか高いといふこと。○まして——尊い身分の者でもさうであるから、ましてつまらぬ身分の者は猶更といふこと。○數ならざらむにも——人の數に入らぬ身分の者でも。即ち問題にならぬ、つまらぬ身分の者でも。「數ならず」とは、數へ立てるだけの價値がないといふことで、身分の賤しいことをさす。○子といふものなくてありなむ——「子なくてありなむ」と言うてすむところを、「といふもの」の語を入れて、子の語を印象強くあらはしたものである。その意味は、子といふものは無い方がよい。さうありたいとの意。「ありなむ」の「なむ」は完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に、未來の助動詞「む」の終止形がついたもので、未來の意を稍強く表はす時の形である。然しこの「む」は一轉して稍輕い願望の意をあらはしてゐる。○前中書王——兼明

れ、彼處を斷ち取れ、自分は子孫を待たないやうにしようと思ふのだ」と、仰せられたとかいふ事である。

補「子といふもの」は壽妙院抄には「女などいふもの」とあり、傳幽齋本は「女などといふもの」とある。

親王のこと。醍醐天皇の皇子で、貞元二年四月、一品に叙し、中務卿に任ぜられた。中務の唐名を中書といひ、それが親王であるから中書王といふ。村上天皇の皇子、具平親王も同じく中務卿に任ぜられて、才學亦相匹敵したので、前の兼明親王を前中書王といひ、後の具平親王を後中書王といふやうになつた。○九條太政大臣——藤原伊通をいふ。宗通の子。九條相國又は大宮相國ともいひ、永曆元年太政大臣となる。當時綱紀漸く弛み、舊章が日に廢れて行つたので、伊通は憲法十七條に擬して意見を上つたが、總べてよく時弊にあたつてゐたといふ。永萬元年歿。年七十三。子に爲通、伊實の二人あり、何れも相當の地位に出世し、女の皇子は近衛天皇の后となつてゐる。著書には、無名抄、大槐秘鈔、人記除目鈔などがあり、又雑談（じやうだん）ずきであつたことが、今鏡や平治物語などに出てゐる。九條の太政大臣、花園の左大臣、染殿の大臣などの、九條、花園、染殿は皆、居所の名によりてつけられたものである。然して必ずその居所の下に「の」を付けて呼ぶ慣習である。尙氏姓の下にも、「の」の字をつけて、藤原の道長、源の義家と呼ぶ例である。この人が子孫の絶えることを願つたとの話は未だその出典不明である。○花園左大臣——後三條天皇の御孫、輔仁親王の御子、左大臣源有仁のこと。白河院の御孫にあたる。鳥羽、崇徳、近衛の三朝に歴仕し、保延二年左大臣となつたが、病身のため、久安三年遂に職を辭して薙髮し、成覺といつたが間もなく薨す。年四十五。詩文に達し、書に巧みであり、又、非常に美男でおしゃれであつたといふ。今鏡八の中にこの人の記事がある。○ぞう——子孫のこと。「ぞう」は「族」の音便で、一族の意であるが、ここは子孫の意である。「ぞう絶えむこと云々」は、今鏡八、月の隠るる山のはに、有仁詞、「いとしもなき子などのあらむはいとほいなるべし」と

ある。○染殿大臣——藤原良房のこと。冬嗣の第二子。淳和、仁明、文徳、清和帝の四朝に歴仕し、太政大臣となる。染殿の大臣といふは、その邸宅を染殿といつてゐたからである。その女、明子は染殿の后といひ、文徳天皇の后となり、清和天皇を生み奉つた。「おとど」とは、大臣を敬稱的にいふ語。○子孫おはせぬぞよく侍る——「おはせぬ」は、「無い」の敬語法。子孫の無いのが結構なことである。ここは良房自身が、「子孫のおはせぬぞ云々」と言つたのでなく、良房に子供が無かつたのは寧ろ幸ひだと、世繼の翁の物語の筆者が評した趣向になつてゐるのである。「おはせぬ」は作者の染殿の大臣に對する敬語。御出でにならない。子孫がない。○よく侍る——幸ひである。結構である。○末のおくれ給へるはわるき事なり——「末は」は子孫。「おくれ」は、劣ること。「わるき」は、「あし」の意味を柔和にあらはした語。子孫が先祖より劣つてゐるのはよくないことだ。○世繼の翁の物語——大鏡のこと。この書は、大宅世繼といふ老翁の談話を筆記した體裁になつてゐるので、一名「世繼物語」ともいふ。さて大鏡には、ここに引用したやうな文句はない。大鏡卷二、太政大臣良房の條には、「かくいみじき幸人の、子のおはしまさぬこそ口惜しけれ。御兄の長良の中納言、ことの外に越えられ給ひけむ折、いかばかり辛うおぼされ、又世人も殊の外に思ひ申しけれども、その御末こそ今に榮えおはしますめれば、行末は殊の外にまさり給へりけるものを云々」とある。又、續世繼（今鏡）の中には、「花園大臣、此大臣御子のおはせぬこそ口惜しけれ。かへりてはあはれなる方もありて、我ものたまはせけるは、いとしも子などのあらんは、いとほいなるべし。村上の帝の御末、中務の宮のうまごといふ人々を見るに、させる事なき人々どもこそ多く見ゆめれ。我子などのありともかひなかるべしとぞ

ありける云々」とある。即ち大鏡には染殿の大臣に子がなく、爲に家が榮えることが出来なかつたとは記してあるが、別に子のないのを希望したとの記事はない。ここは兼好の記憶違ひで、右に引用した今鏡の記事など混同してゐるのでないかと考へられる。大鏡の名は世繼とも言ふが、世繼とは必ずしも大鏡のみを指す言葉ではなかつた故である。○聖徳太子の——この「の」は、「が」の意にして、主格を示す助詞。太子は用明天皇の御長子、推古天皇の皇太子となられ、憲法十七條の制定を始め、佛法興隆のために盡された。日本書紀によると、二十九年二月癸巳（五日）半夜、厩戸豊聰耳命薨_ニ于斑鳩宮_ニとなつてゐる。但、久米邦武氏の聖徳太子實録には、「太子は三十年、即ち法興三十二年壬午正月二十二日より病ふの牀に就き給へり……斯くて二月二十一日甲戌の夜半に、遂に飽波の葦塔宮に於て薨じ給ふ。御年四十九歳なり」とある。○御墓——太子御自身の御墓。河内國の石河郡東條科長（磯長）に築く。○かねてつかせ給ひける時も——「かねて」は、前、以てのこと、ここでは生前のこと。「つかせ」の「つか」は、「つく」といふ動詞で、築く義。墓を造ること。「せ」は尊敬の助動詞。○ここをきれ、かしこをたて云々——此處を斷ち切れ、彼處を削れの意。子孫の斷絶を希はれたので、墓參者の通路の必要がないから、墓の周圍の道を斷ち切るやう命ぜられたのである。但、一説には、墓相（墓の作り方）に依り、墓相によりて子孫の斷絶を計られて、斯く命ぜられたものともいふ。恐らく後説が妥當であらう。聖徳太子傳曆（世に平氏太子傳と稱するもの）の推古天皇二十六年（太子四十七歳）の條に、「冬十二月、太子命_ヲ駕_ヲ、科長墓處_ニ造_ル墓者_、直入_ニ墓内_、四望_ヲ謂_ク左右_曰、此處_ハ必斷_、彼處_ハ必切_、欲_レ令_レ應_レ絶_ニ子孫_{之後}、墓工_{隨_レ命_、可_レ絶_者絶_、可_レ切_者切_、太子大悅_、即_チ夕旋_レ駕_、歎_{謂_ク妃曰}、}

遙憶_ニ過去_、因果_相校_、吾未_ニ賽_{了_、禍及_ニ子孫_、子孫不_レ續_、豈云_ニ大咎_ト、孔子遺教_、無_レ後嗣_者、爲_ニ不幸_ト矣_、吾爲_ニ釋迦大聖弟子_ト、豈爲_ニ孔子小賢弟子_ト乎_」との文を見ても、どうも道ではなくして、人爲的に子孫を絶つ法を考へられたものと思はれる。但、法皇帝説によると、聖徳太子には、苦岐岐美郎女、負古郎女、位奈部橘王の三人の御腹に、十四人の王、女王を設けられた旨が見えてゐるから、太子には御子のあつただけは事實である。○思ふなり——「なり」は、指定の助動詞。思ふのである。○侍りけるとかや——申されたとかいふことだ。下に「いふ」の語を補うて解くがよい。「ける」は、普通なら「けり」とあるべきである。}

第七段

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ち去らでのみ住みはつるならひならば、いかに物のあはれもなからむ。世はさだめなきこそいみじけれ。

口譯 あだし野の露が果敢なく始終消え失せてしまふやうに、吾人の命が消え失せて死ぬといふやうなこともなく、又、鳥部山の火葬の煙がはななく立ち去るやうに、この世から

語釋 ○あだし野——墓地の名。山城國嵯峨野の奥、愛宕山の麓であるといふがはつきりとしてない。新古今集、雜に、「暮るる間も待つべき世かはあだし野の末葉の露に嵐たつなり」とある。「あだし野の露」の「露」には、事實上の露と、その露が暫くの間も消える時がない意と、副詞用法としての「露」と三者の意が含まれてゐるとみてよい。○消ゆる時なく——永久に死なないこと。「露」といつたから、縁語で「消ゆ」といつた。人の死ぬことを含めてゐる。○鳥部山——京都

死んで立ち去るといふ事もなく、若し吾人が常住不斷にこの世に住みおほせる習ひのものであつたとしたら、どんなにか物の情趣もないことであらう。やはり世の中は無常變易、定めないので非常にいのである。

口譯 天地間に生命のあるものを見ると、人間ぐらゐる長生きをするものはない。蜉蝣の如

市の東山、阿彌陀峯の麓。清水寺の下にある火葬場。○煙立ち去らでのみ——「煙」は火葬の煙をいふ。「立ち去る」は、煙の立上つて消えて行くことに、人の死んでゆくことをかけて言つたもの。「のみ」は、「ばかり」であるが、これは只それ一つといふ方の意味でなくして、只もう一概にといふやうに、上の句の意義を強める爲においたものである。○住みはつる——住みおほせる。住み通す。住み切る。即ち永久にこの世に生きてゐること。死なないこと。○ならひ——ならはし。人間は誰も皆さういふものと定つてゐること。○いかに——どんなにか。○物のあはれ——「あはれ」は、趣味感興が深い。風情がある。趣致に富む。詩的の感の義。今日用ゐるやうに單に悲哀悲歎をのみ意味しない。何物何事かの刺戟により、喜怒哀樂の情に感激した時の心境をいふ。即ち外象が吾人の感激性に觸接した時が、「あはれ」を生ずる時である。「ものの」は、事物、人事、事件、自然の景物等廣くひつくるめていひ、殆ど無意味に近いほど軽い意味の語。○世はさだめなきこそいみじけれ——世の中は無常であるのが面白いの義。「いみじけれ」は面白い。ひどくよい。至極結構であるの義。形容詞「いみじ」の已然形。上に「こそ」があるので、已然形で終止されてゐる。

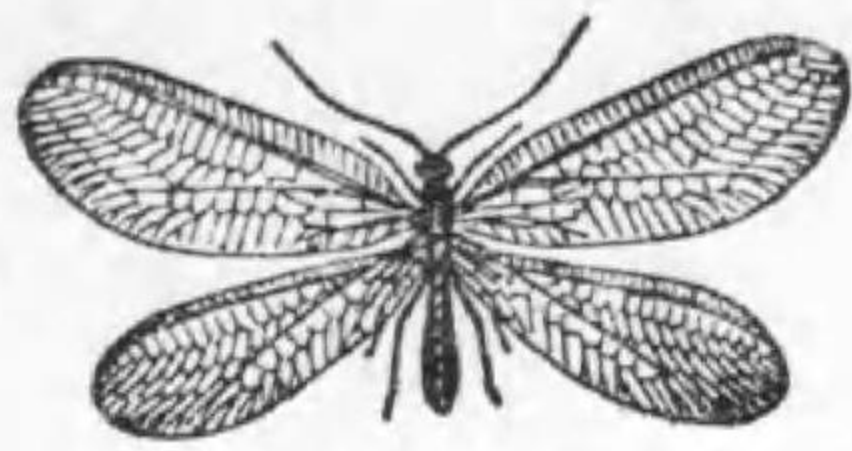
命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふのゆふべを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくぐと一年をくらすほどだにも、こよなうのどけしや。

く、朝に生れて晩まで待たずに死んでしまふものや、夏の蟬のやうに夏の間だけの壽命で、楽しい春や秋の時季を知らないものもあるよ。ゆつたりとした心持で目を暮らしたならば、一年を過ごす程の間でも、この上なく非常にのび／＼としたものである。何時まで生きてゐても、飽き足らず不足に思ひ、死ぬのを惜しいと思つたならば、假に千年の長き間生きて過したところでそれは一夜の夢のや

あかすをしと思はゞ、千年を過すとも、一夜の夢のこころせめ。すみはてぬ世に、みにくきすがたを待ちえて何かはせむ。いのちながければ恥おほし。ながくとも四十にたらぬほどにて死なむこそ、めやすかるべけれ。

語釋 ○命あるもの——生を天地に享けたもの。生きとし生けるもの。○人ばかり——人間ほど。人間ぐらゐる。○久しき——長壽の者。長生きの者。○かげろふのゆふべを待ち——この文は恐らく、「かげろふの夕を待たず。夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし」とあるべきものであらう。即ち、「かげろふの夕を待ち」の「待ち」は、下の「知らぬ」の「ぬ」(打消の助動詞「ず」の連體形)に係る文法で、中止形となつてゐるものとなす。以上は近頃の佐野保太郎氏橋純一氏の新説で、舊來の説では、「かげろふは夕を待ちつけて死ぬ」とか、「かげろふは夕方になると死す」となしてゐる。思ふに前説がよからう。「かげろふ」は、蜉蝣といふ擬膜翅類の昆蟲。蜻蛉に似て小さい蟲。夏の夕方、水邊に群飛するもの。その幼蟲は水中に在つて、兩三年を経て成蟲となるが、一旦成蟲となれば、數時間にて死んでしまふ。よつて古昔から果敢ないものの例にあげられてゐる。淮南子説林訓に、「鶴壽千歳、以極其遊。蜉蝣朝生而暮死、而盡其樂」と。又、爾雅の疏に、「一名渠略。云々。叢生糞土。朝生而夕死」ともある。源平盛衰記卷十一に、「生死不定の命なれば、かげろふの夕を待つよりも短し」。新古今集、戀に、「夕暮に命かけたるかげろふのありやあらずや問ふもはかなし」など出てゐる。但し、古今集戀部に、「かげろふのそれかあら

うな短いものと感ずるだらう。どうせ永久に住みとげることの出来ないこの世の中に、老いて醜い姿となるまで



蜻蛉

生き伸びてゐたところで、それが何にならう。實につまらぬことだ。長命すると恥をかくことが多い。長く生きてゐたとしても、四

ぬか春雨のふる人な(みい)れば袖ぞぬれぬる」とあるのや、後撰集雑の「あはれとも憂しともいはじかげるふのあるかなきかにけぬる世なれば」とある「かげるふ」は、所謂陽炎で、これは春のうららかな日に、野原などにちら／＼と立ちのぼる氣。地物の輻射によつてこれに接する空氣が温められ、且著しく密度を異にするとき、それを通過する光線が不均等に屈折せられてちら／＼とほのめくもので、遊絲、野馬なども書く。○夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし——夏鳴いてゐる蟬は、單に夏の間だけの命で、春も秋も知らぬやうな短命なものもあるよの義。莊子逍遙遊篇に、「朝菌不知晦朔。蟪蛄不知春秋。」とあり、その注に、「蟪蛄寒蟬也。春生夏死。夏生秋死」とあるのを、今ここで特に夏の蟬と書いたのである。○つく／＼と一年をくらすほどだにも——「つく／＼と」は、ゆつたりと。しみ／＼と。こせつかず落着いた氣分での意。「ほど」は、時間で、間。(アヒダ)の義。「だに」はその擧げ示したる上の語を主として、他を顧みないことを表はすを以て、下なる用言に對して限定修飾する。○こよなうのどけしや——非常にゆつたりとしたことであるよの意。「こよなう」は、「こよなく」の音便。この上なく。非常に。「のどけしや」は、のどかな即ちゆつたりしたことであるよの意。「や」は「よ」と同じく感動の助詞。○あかずをと思はば——「あかず」は、「飽かず」で、いくら長生きをしても飽き足らず、死ぬのを惜しいと思ふならば。○千年を過すとも——たとひ千年の長生きをしても。「千年」は單に非常に長い年月といふこと。○ここちこそせめ——心地がするだらう。「せ」は佐行變格「す」の未然形。「め」は、未來の助動詞「む」の已然形で、「こそ」の係詞の結び。○すみはてぬ世に——永久に住みおほせることの出来ぬ世の中に。どの道死なねばならぬ世の中に。○みにくきすがた

十歳に足らぬ程度で死ぬのが、見よいことであらう。

口譯 その四十歳頃を通り越すやうになると、もはや自分の醜い老の容貌を恥ぢる心もなく、人の中へ出しやばる事を考へ、今にも

を待ちえて——醜い姿(年老いた姿)になるまで生きてゐて。「待ちえて」は、待つてゐてそれを得ること。待ち受けて。○何かはせむ——どうしようか、どうにもしようがない。「かは」の「は」は感動詞。第六段の「物語には云へる」のはに同じ。○いのちながければ恥多し——長生すると恥をかくことが多い。莊子天地篇に、「堯觀乎華。華封人曰。噫。聖人。請祝聖人。使聖人壽。堯曰辭。使聖人富。堯曰辭。使聖人多男子。堯曰辭。封人曰。壽。富。多男子。人之所欲也。汝獨不欲何邪。堯曰。多男子則多懼。富則多事。壽則多辱。是三者。非所以養德也。故辭。」とあるのによる。○めやすかるべけれ——見よい事であらう。「めやすし」は、他から見た目の感じがよいといふのである。「死なむこそよけれ」といへば、主觀的になつてしまひ、道德的に正邪の上からか、或は利害の見地からか言つてゐるやうになるが、「死なむこそめやすけれ」と、客觀的に正邪利害を超越して言つてゐる所に作者の趣味があらはれてゐるのである。

そのほど過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなく、人にいでまじらはむ事を思ひ、夕の陽に子孫を愛して、さかゆく末を見むまでの命をあらまし、ひたすら世をむさぼる心のみふかく、物のあはれも知らずなりゆくなむあさましき。

沈まうとする夕日のやうに、餘命いくばくもない老い傾いた年をして、子孫を愛し、それ等子孫の出世してゆく、先き／＼までも見届けるまでの存命を當て込んで居り、ひたすら世の中の名譽利益を欲ばり求める心ばかりが強く、物の情趣もわからぬやうになつてゆく。これは實になさけなくいやなものである。

語釋 ○そのほど——「ほど」は、頃。時分のこと。此處では年配の義。前文を承けて、四十歳頃をいふ。○かたちを恥づる心——「かたち」は容貌のこと。老境の醜き容貌を恥づかしく思ふ心。○人にいでまじらはむことを思ひ——この語は、「世の中に出で交はらむ」といふに同じく、世間に出でて人に交はる意であるが、つまり、とかく出しやばつて世間の事に關係しようとすること。○夕の陽に子孫を愛し——「夕の陽」とは、白樂天の詩の句にある「夕陽」を直譯したもので、老年の意である。餘命いくばくもない老ぼれた身で、子孫のことなどを氣にかけること。白氏文集卷二、秦中吟の中、「不致仕」の詩に、「七十而致仕。禮法有明文。何乃貪榮者。斯言如不聞。可憐八九十。齒墮雙眸昏。朝露貪名利。夕陽愛子孫。掛冠願翠綵。懸車惜朱輪。金章腰不勝。云々。」の「愛」と「愛」と字形の類似より、兼好のおぼろげなる記憶をからして、愛としたものであらう。○さかゆく末を見るまでの命をあらまし——自分の子孫が出世して行くのを見る後々までも長生して居りたいと思ふのである。「さかゆく末」とは、自分の子孫の榮えて行く後々をいふ。「あらまし」は、「あらます」といふ動詞で、當て込んで、その事を願望して居ること。豫期してゐること。○ひたすら世をむさぼる——「ひたすら」は、「一途に。専ら」の意。○世をむさぼる」とは、金持になること、高位高官を得ること、長生きすること等いろ／＼の浮世の慾望をよくばり求めること。○あさましき——實になさけない。ほんとにいやだ。この語は常態から遠くかけ離れた事に對して、驚愕の氣分をあらはす形容詞。上に係詞の「なん」(なむ)があるから「あらまし」といふ形容詞の連體形「あらましき」で文の終止をなしてゐる。

第八段

世の人の心まどはす事、色欲にはしかず。人の心はおろかなる物かな。にほひなどは、かりの物なるに、しばらく衣裳に薰物すと知りながら、えならぬにほひには、必ず心ときめきするものなり。久米の仙人の物あらふ女の脛の白きを見て、通をうしなひけむは、まことに手足、はだへなどの、きよらに肥えあぶらづきたらむは、外の色ならねば、さもあらむかし。

口譯 世の中の人の精神を困惑させるものは澤山あるが、その中で色慾が心を迷はすのより甚だしいものはない。人の心は本當におろかなものである。物の匂ひなどは假りにつけた一時的なものであるのに、ただ暫く衣裳に香りがたきしめてあるのだとは知りながら、非常によい香りには、必ずはつと胸のわく／＼とする思ひがす

第八段

語釋 ○世の人の——「世の人の」を「世の人が」の意味とするのは考へ過ぎてゐる。「の」は主格を示す助詞でなく、やはり所有格を示す「の」で、「世の人の心」とすべきである。○心まどはす——精神を亂し惑はす。心を迷はす。○色欲にはしかず——「色欲」(シキヨク)は佛語で、男女の性欲。色情の欲をいふ。「しかず」は、「如かず」で、それに及ぶものはない。つまり男女間の色情の欲は、人心を惑亂させる第一のものであるといふのである。○にほひ——色の映えて美しいのをいふのが本義であるが、ここは今日いふ「香」(カホリ)の意。○かりの物なるに——「假の物」は、本来その物に附いてゐる本質的のものでなく、ただちよつと一時的についてゐる物のこと。○しばらく衣裳に薰物す——籠を伏せて(これを伏籠といふ)、その中に香爐を入れて

るものである。久米の仙人が、洗濯する女の白いすねを見て、通力を失つたといふ事は、如何にその女の手足や皮膚の美しく肥えて、つや／＼としてゐるのが外部からつけた白粉の色などでなく、肉體その物の色であるから、なるほどさうもあらう。

香を焚き、籠の上に衣裳をかぶせて香ひを染ませる。薰物とは煉香ロウカウのことで、沈香、丁香、伽羅、白檀、龍腦、麝香などの香料を種々に調合したもの。さて「しばらく」とは、その香のついてゐる間をいふ。香を焚いて衣裳をにほはせる。その薰ひはただ暫くついてゐるだけのものであるの義。「衣裳」は、上曰衣ウヘイ、下曰裳ウヘシ。即ち腰より上が衣で、腰より下が裳である。○えならぬにほひ——何とも言へないよいにほひ、いふにいはれぬよい香り。○心ときめきする——胸のどきつく思ひがする。はつと思つて胸がどきんとすること。驚いた時、氣掛りな時、氣まりの悪いとき、面白い時、何れにしても胸のわく／＼するやうな、妙に身内のくすぐたいやうな、そのやうな心境をいふのがこの語の意味である。枕草子の「心ときめきするもの」の所に、「雀の子がひ、兒遊ばす所の前渡りたる、よきたき物たきて、ひとり臥したる、唐の鏡の少しくらき見たる、よき男の車とどめて、物いひ案内せさせたる、頭洗ひけさうじて、香にしみたる衣着たる、殊に見る人なき所にて、心のうちはなほをかし云々」と。この枕草子にいふ薰物云々は、凡て自分自身が香を着物にたきしめた時の感じであるが、この徒然草では、それを女が薰物したよい匂ひの着物を着てゐる場合の、男子の感情になしてゐる。○久米の仙人——この仙人の傳記は今昔物語卷十一に出てゐる。それに曰く、今は昔、大和國吉野郡龍門寺と云寺有り、寺に二人の籠り居て仙の法を行ひけり。其仙人の名をば一人を、あづみと云ふ、一人をば久米と云ふ。然るにあづみは前に行ひ得て、既に仙に成りて、飛びて空に昇りにけり。後に久米も既に仙に成りて、空に昇りて飛び渡る間、吉野河の邊に若き女、衣を洗ひて立てり。衣を洗ふとて、女の腫しむ(脚イ)脛まで搔上げたるに、腫の白かりけるを見て、久米心穢れて其女の前に落ちぬ。其後其女を妻として有

り。其仙を行ひたる形ち、今龍門寺に其形を扉に北野の御文に作りて書し給へり。其れ不消して于今有り。其久米の仙、只人に成りにけるに、馬を賣りける渡し文に、前の仙久米とぞ書きて渡しける。然る間久米の仙、其女と夫妻として有る間、天皇其國の高市の郡に都を造り給ふに、國の内に夫を催して、其役とす。然るに久米、其夫に被催出でぬ。餘の夫共久米を仙人々々と呼ぶ。行事官の輩有りて、是を開きて問ひて云く、汝等何に依りて、彼を仙人と呼ぶぞと。夫共答へて云く、彼の久米は先年龍門寺に籠りて、仙の法を行ひて、既に仙に成りて、空に昇り飛渡る間、吉……女、衣を洗ひて立てりけり。其女の癢げたる腫白かりけるを見下しけるに……：前に落ちて即ち其女を妻として侍る也。然れば其れに依りて仙人とは呼ぶ也。行事官等是を聞きて、然て止事無かりける者にこそ有るなれ。本仙の法を行ひて、既に仙人に成りにける者也。其行の徳定めて不失給(ナシイ)。然れば此の材木多く自ら持運ばむよりは、仙の力を以て空より令飛めよかしと戯れの言に云ひ合へるを、久米聞きて云く、我れ仙の法を忘れて年來に成りぬ。今は只人にて侍る身也。然計の靈驗を不可施と云ひて、心の内に思はく、我れ仙の法を行ひ得たりきと云へども、凡夫の愛欲に依りて、女人に心を穢して、仙人に成る事こそ無からめ、年來行ひたる法也。本尊何か助け給ふ事無からむと思ひて、行事官等に向ひて云く、然らば若しやと祈り試むと、行事官是を聞きて嗚呼の事をも云ふ奴かなと乍思、極めて貴かりなむと答ふ。其後久米、一の靜なる道場に籠り居て、身心清淨にして、食を斷ちて、七日七夜不斷に禮拜恭敬して、心を至して此事を祈る。而る間七日既に過ぎぬ。行事官等久米が不レ見る事を且は咲レひ且は疑ふ。然るに八日と云ふ朝に、俄に空陰り暗夜の如く也。雷鳴り雨降りて、露物不レ見え、是を怪しび思

ふ間、暫計有りて雷止り（みイ）空晴れぬ。其時に見れば、大中小の若干の材木併せて南の山邊なる袖より空を飛びて、都を被_レ造る所に來にけり。其時に多くの行事官の輩敬ひ貴びて久米を拜す。其後此事を天皇に奏す。天皇も是を聞き給ひて、貴び敬ひて忽に免田卅町を以て久米に施し給ひつ。久米喜びて此の田を以て、其郡に一の伽藍を建てたり。久米寺と云ふ是也。」と。又、元亨釋書一八、神仙五には、「久米仙者。和州上郡人。入_ニ深山。學_ニ仙法。食_ニ松葉。服_ニ薜荔。一旦騰_レ空。飛過_ニ故里。會_ニ婦人以_レ足踏_ニ洗衣。其_レ脛甚白。忽生_ニ染心。即時墜落。漸喫_ニ煙火。復_ニ塵寰。然_レ鄉黨契券。當_レ署_ニ其名。皆書_ニ前仙某。今_レ舊券之中。往々猶有_ニ手澤。悉然。云々」と。猶、扶桑略記二三、にも見ゆ。大唐西域記卷五にはこの傳説の根據あり。馬琴は玄洞放言に萬葉集の久米禪師について述べてゐる。「仙人」は、センニンとよんでゐるが、一本には「ヤマビト」とよんだものもある。「仙人」とは、仙術を學び、神通力を得た者の稱。釋名に、「老而不_レ死、曰_レ仙。仙遷也。遷入_レ山也。故製_レ字人傍_レ山也」と。○物洗ふ女の脛——洗濯してゐる女のスネのこと。「脛」（ハギ）は今の「スネ」といふのにあたる。○通をうしなひけむは——「通」（ツウ）は、神通力のこと。何事をも爲し得る超自然的能力。此所は空中を飛行する能力で、その能力が無くなつたのは。○手足はだへ——手足及び皮膚のこと。○きよらに肥えあぶらづきたらむ——「きよら」は綺麗なこと。「あぶらづく」は、脂肪が多くて皮膚の滑らかにつや／＼としてゐること。○外の色ならねば——紅、白粉などの化粧のやうに、外から假りた附け加への色あひでなく、生れつきそのままの肉體の色であるからの意。上の「にほひなどはかりの物なるに」に對してゐる。○さもあらむかし——尤な事である。なるほどさうもあらうよ。上の「まことに」の語は、この

句の副詞となつてゐる。

第九段

女は髪をめだからむこそ、人の目だつべかめれ。人のほど、心ばへなどは、ものうちいひたるけはひにこそ、ものごしにも知らるれ。ことにふれて、うちあるさまにも、人の心をまどはし、すべて女の、うちとけたるいも寝ず、身ををしとも思ひたらず、たふべくもあらぬわざにもよくたへしのぶは、ただ色をおもふがゆるゑなり。

語釋 ○髪をめだからむ——女の頭髮のうつくしいことは。（長く、黒く、澤のあることをさす。女にはいろ／＼男の注意を引く事があるが、就中、頭髮の見事に美しいのはの意。平安朝時代は女の容姿をいふには、まづ身の丈にも餘るほどの頭髮の美しさが第一要件であつた。兼好時代もまだその風習があつたのであらう。○人の目だつべかめれ——人が（男が）目をつけるやうに見える。「目だつ」は今日の「著しく目につく」といふ（自動詞四段）ではなく、目をつける。注目する（他動詞下二段）の意である。又上の「人の」は、「人が」で、人（即ち男）がそれに注目すること。○べかめれ——「べくあるめれ」の約。……であるやうだの意。第一段の「多かめれ」

口譯 女は何よりも頭髮の美しいのこそ、特に男子が目をつけるやうである。所がそれが抑もの間違で、女の人の柄や氣立ては、そんな頭髮などで知れるものでない。何か物を一寸いふそのそぶりによつてこそ、物ごしにでもわかるものだとの意が、女の人品とか、氣だてといふものは、さうした頭髮などでな

く、何か物を一寸云うてゐるその様子によつてこそ、(直接顔を合せなくとも)物を隔ててもよく分るものである。ところが何かにつけて、ただ、かりそめの様子によつても、男の心を迷はし、すべて女がうちくつろいで眠りもせず、つらい目にあつても體を惜しいと思つて居らず、堪へられさうもない事にもよく堪へ忍ぶのは、ただ女が男の愛を失ふまいと思ふからである。補「うちいひたる」は、

の語釋參照。○人のほど心ばへなどは——「人のほど」は、人品。人柄。身分。「心ばへ」は、氣だて。性情。心いき。○ものうちいひたるけはひにこそ——何か物を一寸いうてゐる様子によつてこそ。「うち」は接頭語、ちよつとといふほどの軽い意。「けはひ」は、様子。趣。「に」は、「によりて」の意。○ものごしにも知らるれ——「ものごし」とは、障子、几帳の如く何か物を隔ててゐること。直接女の顔や素振りなど見なくても、物の言ひぶりなどを聞いたのでも、それだけで、女の人柄や心持ちなどがわかるといふのである。○ことにふれて——何か事のあるに當つて。何かの際に。「折にふれて」などと同じ。○うちあるさまにも——ちよつとある有様。不用意の裡にする假初の動作。特に媚を呈する様子をすといふやうな場合でなく、ただ何の氣もなく居る場合の様子によつてもこの意。「うち」は、前にあつた「うちいひたる」の「うち」と同義。○人の心をまどはし——「人」は、男をいふ。男の心をまよはす。○うちとけたるいも寝ず——女が打ちくつろいだ寝かたもせず。これ夜でも見苦しい寝姿をせぬやうになど身嗜みをしてゐる女のさまで、拾遺集にある、「君戀ふる涙のこほる冬の夜は心解けたるいやは寝らるる」の歌の心境である。「い」は名詞で寝ること。熟睡。朝寝。安寝。寝きたなし。股長にはなきむを(古事記)の「い」に同じ。打消の場合には、この「い」と「寝」といふ動詞を重ねて、「いの寝られぬ」「いも寝ず」「いこそ寝られぬ」などとなる。この場合「いも寝ず」は、「寝ても眠られぬ」といふ意でなくして、ただ寝られない。寝入ることができぬといふことを強く言つたのに過ぎぬ。○身ををしとも思ひたらず——「思ひたらず」は、「思ひてあらず」で、女が自分の身を、どんなひどい目にあはせても、少しも惜しいと思はない。○たふべくもあらぬわざにも——とても我慢が

正徹本傳齋本光廣本弘賢本「いひたる」とあり。

出來ないやうなつらい事にも堪へること。○色をおもふがゆゑ——色情を大切に重んじ、戀を大事にするから。男の愛を失ふまいとするから。

口譯 誠に男女戀愛の道は、その根源が遠く深い。(それは人間の本能なのだから)人の心に生ずる耳目等の欲望はいる(澤山あるが、それ等の慾は皆さつぱりと離れ去ること

まことに愛着の道、その根ふかく、源とほし。六塵の樂欲おほしといへども、皆厭離しつべし。其の中にただかのまどひのひとつやめがたきのみぞ、老いたるもわかきも、智あるも愚なるも、かはる所なしとぞ見ゆる。されば、女の髪すぢをよれる綱には、大象もよくつながら、女のはけるあしだにて作れる笛には、秋の鹿かならずよるとぞいひ傳へ侍る。みづからいましめて、おそるべく、つつしむべきは、此のまどひなり。

も出來よう。その中でただ彼の戀の迷の一つだけ、どうしても止めることの出來ないのは、老いたる人も、若き人も、智あるも、愚なる者も、何等變る所

語釋 ○愛着の道——もとは佛教の語で、愚愛執着の意。ここは男女間の愛着即ち戀愛をさしてゐる。「道」は、ただ「事」といふ意。○その根ふかく源とほし——「根」も「源」も要するに同意。その根源が深い。即ち男女の戀愛は、その根源は天性に出づるもので、ちよつとした表面的な一時性のもではない。○六塵の樂欲——「六塵」とは、佛語にて、人間の惑ひを生ずる根源として、眼・耳・鼻・舌・身・意の六つを擧げ、之を六根といひ、この六根を汚す對象として、色(眼)聲(耳)香(鼻)味(舌)觸(身)法(意)の六つを「六塵」と言つてゐる。「塵」は汚れの意。觸は皮膚の感覺、法は自己の意をいふ。「樂欲」の樂は、コノム、ネガフの意で、音はゲ

がないやうである。それだから、それは人間ばかりでなく、女の頭髮の毛をよつて作った綱には、大象でもよく繫がられるし、女の



鹿笛 履いた足駄で作られた笛の音には、秋の雄鹿が必ず寄つて来るといひ傳ひられてゐる。自ら戒めて、恐るべく慎むべきものは、この色欲の迷ひである。

ウ。やはり佛語にして 願ひ欲する。愛欲、欲願の義。○厭離しつべし——よく嫌うて棄て去ることが出来る。「ん」は完了の助動詞。「べし」は可能の助動詞。然して「つ」は、「べし」の意を強めてゐる。○かのまどひ——色欲の迷ひをさす。佛言四十二章經に、「愛欲莫甚於色。色之爲欲大無外」とある。○女の髪すぢをよれる綱には云々——力の強い大象でも、女の髪で作つた綱でつなげば、自由に動くことが出来ないといふことで、女色の力の強大なものであることを表はしたもので當時の俚諺であらうと言はれてゐる。古注には、大威徳陀羅尼經第十九に、「一切女人爲不除欲、乃至以女人髮、爲作網維、香象能繫、況丈夫輩」とあるより出た話と言つてゐるが、僧盤察の温故要略には、大威徳經にはそんな文句はなくして、東晉竺曇無蘭所譯の五苦章句經を引用して、「佛言。有_レ大白象。力壯移_レ山。壞_レ地成_レ澗。拔_レ樹碎_レ石。象力無_レ雙。有_レ人以_レ髮絆_レ繫其脚。象爲_レ之覺。不_レ能_レ復動云々」と。是は女の髪といつてゐないが、斯ういふやうなことから出た俚諺であらう。○女のはけるあしだにて作れる笛云々——「笛」は所謂、「鹿笛」で、牝鹿の鳴聲に似た音を立てて、牡鹿を呼びよせる笛。その鹿笛を女のはいた足駄で作ると鹿がよく寄るといふので、これも當時の俗諺であつたらしい。當時「あしだ」(足駄)といふのは、今の下駄のすべてをさすといふ。野槿に、「或人の申されしは、近代參河國安部山の人、都に上り、名ある遊女のはける履をとりて歸り、笛につくりて、阿邊山中に入りてこれを吹くに、鹿の多くよる事、常のあしだにて作れる笛よりもまさりてしありと語り傳ふる」とあるが、これは三養雜記によると、寧ろこの徒然草の本文によつて作つたものと言はれてゐる。この笛の作り方は、野槿に曰く、「鹿笛の作様あまたあり、鹿のはらごもりの皮を用ゐるもあり、又鹿の耳

のうちの皮を用ゐるもよし、笛乾けば鳴らず、吹く時口にてぬらすなり」とあり、三養雜記には、「予かつて上總國なる知る人に誂へて鹿笛を得たり……その製、鹿角にても、又は木にても造り、鹿の腹ごもりの皮をはりて、吹かむと思ふ時は、水に浸し張りたる皮を潤し、左右の手の指にて皮をこきつつ吹けば、さながら鹿の鳴をなすこと眞に逼れり」といつてゐる。○秋の鹿——妻戀ふる牡鹿である。秋は鹿のさかる時である。

第十段

口譯 住居の具合が、何も彼もしつくりと調和して居り、又如何にも望ましいやうに出来てゐるのこそ、どうせ生きてゐる暫くの間の假りの宿りだと思ひながらも、まことに興味のあるものである。身分もあり風雅な上品な

第十段

家居のつきよくしく、あらまほしきこそ、かりのやどりとは思へど、興あるものなれ。よき人ののだやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、ひとときはしみよくと見ゆるぞかし。今めかしく、きららかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子、透垣のたよりをかしく、うちある調度もむかしおぼえて、やすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。おほくのたくみの心をつくしてみがきたて、唐の大和の、めづらしく、えならぬ調度もならべおき、前栽の草木まで、心のままならず作りなせるは、見る目もくるしくいとわびし。さてもやはながらへ住む

人が、ゆつたりとした
 氣分で心靜かに住ひを
 してゐる所は、光が照
 らしこんでくる月の光
 も、餘所よりは一層し
 んみりと見えるもので
 ある。當世風にけば
 くしくないが、植木
 も時代がついて、人工
 的な手入れなどせず、
 自然のままになつてゐ
 る庭の草も、おもむき
 あるさまであり、簀子
 や透垣の造り具合も面
 白くおもむきあるやう
 に作られ、そこに置か
 れてある手まはりの道
 具類も、古風でわざと

べき。又時の間の煙ともなりなむとぞ、うち見るよりもおもはるる。

語釋 ○家居のつきくしくあらまほしきこそ——この句は、「つきくしくあらまほし」と續けてよむのではなくして、「つきくしくこそ、あらまほしきこそ」と二つになつて、「つきくしくもあり、又あらまほしくもある」の意。住まひの具合が、何も彼も調和よく、好ましいといふやうに出来てゐるのはの義。「家居」は、住まひ。住宅のこと。「つきくしく」は、似つかはし。ふさはしで、住居そのものが、何も彼も具合よく調和してゐること。つまり家の建て方や、庭の作り方、諸道具などすべて釣合や具合がよく調和してゐるのをさす。身分相應などの意ではない。「あらまほしき」は、さうありたい。望ましいといふ意。○かりのやどり——單に一時的の住居の義。佛教では現世そのものをいふが、この場合はこの世にある間だけ一寸住んで居る宿の義。○興ある——趣ある。面白味のある。○よき人——身分もあり、物の興のわかつた上品な人。本書中の「よき人」は、大抵以上のやうな意味に使つてゐる。○のどやかに——物靜かにゆつたりと。生活のためや、名利のために醜態しないさま。○住みなしたる所——住まひをしてゐる所。「住み化したる所」の義。「なしたる」は、住むといふ動作を特にした意。従つて、住めぬ所を住めるやうに變化させたとか、住み馴らしたとかいふ意を持つ言葉である。○さし入りたる月の色——その家の中へさし込んで来る月の光。「さし」は佐行四段の動詞「さす」の連用形にして、「光線が照る」ことをいふ。「陽がさす」などいふ。「月の色」は、月色といふ漢語から來た語で、月影と同じく、月そのものをも、月の光をもさす。ここは月の光のこと。○ひとときは——一段と。一層。

らしく凝つてゐないの
 こそ、奥ゆかしく思は
 れるものである。多く
 の大工どもが全精神を
 ぶち込んで一生懸命に
 立派に造り上げ、支那
 製だの、日本製だのと、
 珍しく何ともいふに言
 はれない立派な手道具
 をさま／＼と並べ置
 き、庭の植込の草木ま
 で自然のままではなく、
 人工を加へて拵へてあ
 るのは、目で見たので
 も見苦しく、まことに
 厭なものである。こん
 なに贅澤に造つたと
 て、どうして何時まで

一入。○しみくしく——心の奥深くしみ込むやうにしんみりと感ぜられること。○今めかしくき
 ららかならねど——當世風に、けばくしいことはないが。「今めかし」は、當世風。現代的。
 「きららか」は、華麗。けばくしく美しいこと。○木立ものふりて——庭の樹木が古色蒼然と
 して時代がついてゐること。○木立(コダチ)は、庭の立並んでゐる樹木。「ものふりて」は時代
 がついて、何となく古めかしい趣がついてゐること。○わざとならぬ庭の草——特に植まつた
 とか、手入れをしたといふのでなく、自然に生えて自然のままにしてある庭の草のこと。○心あ
 るさま——趣致ある有様。おもむき深い状態。○簀子——「スノコ」とよむ。縁側。もとは簀(竹
 を編みたるもの)を以て張つた縁側。それが竹で編んだ竹縁ばかりでなく、板張りの板縁にもい
 はれ、轉じて一般に、ただ縁側のことにもいはれるやうになつた。家屋雜考一に、「廂の外にあ
 り。簀子縁ともいふ。こは小板敷なれども、竹責の如く、間を聊づつすかして打ちつくる故此名
 あり」と。○透垣——「スイガイ」とよむ。スキガキの音便。木又は竹で隙間をあけて作つた垣
 根をいふ。家屋雜考三に、「板と板との間を聊づつすかしたる屏なり」とある。○たよりをかしく
 ——それ等(簀子・透垣をさす)のものの造り具合が、いかにも趣の深いさまをいふ。○うちあ
 る調度——「うちある」は前段と同意。わざ／＼あるのでなく、ただ一寸ある意。此處は飾りつ
 けたやうなものでなく、ただかりそめに置いてある手まはりの小道具類。「調度」は、現今の國語辭
 典にはテウドとよんでゐるが、文段抄や大成は皆、デウドとよんでゐる。貞丈雜記八にも、「調度
 とは道具の事也。デウドとにごりて云ふ也」とある。調度とは手まはりの諸道具のこと。○むか
 しおぼえて——昔の事が思ひ出されること。従つて古雅な味のあるさま。その思ひ出される昔の

も生きながらへて、此處に住んでゐることが出来ようか出来ない。家も亦、火災で瞬く間に焼けて、煙となつてしまふだらうと、一寸見てさへも自然にそのやうにすぐ感ぜられる。

事は何をさしてゐるかといふに、ここでは、「よき人」とあるから、そのよき人の過去の生活が偲ばれる意にも、又一般的に王朝時代の生活への追想にも、又、尙古の感情を表現した言葉にも、三様の解がなりたつ。○やすらかなるこそ——さりりとしてゐるさま。即ちわざとらしく凝つてゐないさま。奇抜、珍奇、高價、華麗などわざとらしくないさまをいふ。○心にくしと見ゆれ——奥ゆかしく見える。奥ゆかしく思はれる。○たくみ——大工。工匠。○心をつくして——全精神をぶちこんで。一生懸命に。○みがきたて——家を立派に造ること。この「たて」は、家を建てる。「たて」でなくして、家の彫刻や裝飾に念を入れて立派に仕上げるの意。○唐の大和の——支那のや、日本のや。即ち支那製のや日本製のやの意。○えならぬ——何ともいふにいはれぬ。非常に立派な。○前栽——センザイとよむ。庭前の植込みのこと。又その樹木のこともいふ。ここは前者の意味。○心のままならず——草木の伸びようとする心そのままでなくの意。即ち枝を切り、葉をすかすなど、庭師の技工が加つて、自然のさまならぬこと。○作りなせるは——「作りなす」は、人工により作爲して、草木をありの儘以上ならしめること。○わびし——不快である。厭な氣持がする。○さてもやはながらへ住むべき——そんなにしてゐたところで、何時までも其所に生きながらへて久しく住んで居られようか、到底それは出来ない。「さても」は、「さて」に同じ。さうしての意。即ちそのやうな様子に華美贅澤な住まひをしてゐるの義。「さても」の「も」は、感歎的の助詞。「やは」は反語。「さてもながらへ住むべきやは」の順次のところを、「やは」を強くひびかせるため、先きに出したのである。○又時の間の煙ともなりなむ——これも亦、瞬く間に焼けてしまふであらう。「時の間の煙」とは、またたく間の煙で、火事で焼けることをいつたも

の。「又」は對立的の意でなくして、上の文は人に就いていひ、下の文は、住宅に就いて言つてゐる。○うち見るよりもおもはるる——ちらりと一見しただけで、すぐもうそのやうに感ぜられる。「うち見る」は、ちよつと見るとすぐといふやうなつづきになる。

大方は家居にこそ、ことざまはおしはからるれ。後徳大寺大臣の、寢殿にとび驚るさせじとて、繩をはられたりけるを、西行が見て、「驚のゐたらむ、何かは苦しかるべき。此の殿の御心さばかりにこそ」とて、その後はのちまゐらざりけると聞き侍るに、綾小路宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩をひかれたりしかば、かのためし思ひ出でられ侍りしに、まことや、「鳥のむれるて、池のかへるをとりければ、御覽じかなしませ給ひてなむ」と、人の語りしこそ、さてはいみじくこそとおぼえしか。徳大寺にも、いかなるゆるか侍りけむ。

口譯 大體、住居の様子によつて、その家の主人公の人格や心持が推察できるものである。後徳大寺左大臣實定が、本殿に蒿をとまらせまいとして、屋根に繩をお張りなされたのを、西行が見て、「蒿が屋根にとまつてゐたとて、それがどうして差支へがあらうか、一向差支へがないではないか。この殿の御心も、

語釋 ○大方——オホカタ。大體。總括的にいつたのである。○ことざま——事の有様。様子。

ここはその家の主人公の平生の様子とか心事をさす。○後徳大寺大臣——藤原實定(サネサダ)。普通はジツテイといふ。公能の子。壽永二年内大臣。文治二年右大臣、同五年左大臣、建久元年

まあその位のつまらぬものか」と言うて、その後は徳大寺邸に参らなかつたと聞いて居りました所が、綾小路宮のおいであそばす小坂殿の棟に、いつであつたか、やはり繩を引張つてあつたので、彼の西行の例が思ひ出されました所が、それはまことにまあ、「鳥が群り集つて池の蛙を取つたので、宮様がそれを御覽になり、可哀想だと思召され、斯ういふ風に鳥を防ぐために繩を張られたのである」と、

致仕し、翌年薨去、如圓といひ、この年薨去、年五十三。藏書家で和漢の書、萬餘卷を藏したといふ。和歌を好み、百人一首に、「ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる。」とある。これは、千載集夏部に、「曉聞ニ郭公」といふ心をよみ侍りける」と題してゐる。ところで實定の祖父實能が衣笠岡に徳大寺を建てたことからして、この家を徳大寺家といひ、祖父實能も、孫の實定も左大臣であつたので、區別するために實定のことを後徳大寺といふ。井蛙抄六に、「徳大寺には歌の間といふ所あり。寢殿の西の隅の間也、是れ後徳大寺左府（實定）西行に被_レ對面ける所なり」とある。○寢殿——シンデン。正殿即ちおも家。昔の貴族の家は、寢殿造りといつて、寢殿が主人の住む所。その東西と北に對屋があり、ここが家族の居所となつてゐた。○鳶とびさせじ——寢殿の屋根に鳶をとまらせないやうにしよう。○西行——西行法師。俗名、佐藤義清。鎮守府將軍藤原秀郷九世の孫。父は左衛門尉康清といふ。代々武の家にて、義清も亦武勇にて射を善くし、和歌にすぐれて居た。鳥羽院に仕へて北面の武士となり、左兵衛尉に任ぜられ、愛せられてゐたが、もともとから名利を好まず、厭離の志があつた。二十三歳にして出家し、西行又は圓位といふ。建久元年二月十六日、七十三歳を以て京都に寂す。この話は古今著聞集十五に、「西行法師出家よりさきは徳大寺左大臣（實能、實定の祖父）の家人にて侍りけり。多年修行の後、都へ歸りて、年比の主君にておはしますむつまじきに、後徳大寺左大臣の御もとにたどり参りて、先づ門外より内を見入れければ、寢殿のむねに繩をはりけり。あやしう思ひて、人に尋ねければ、あれは鳶とびすゑじとて、はられたると答へけるを聞きて、鳶とびのゐる、何か苦しきとて、怨みて歸りぬ」とある。○鳶とびのゐたらむ——鳶とびが止まつてゐることは、「たらむ」は、「たる」を

或人が話をしたので、さういふわけであつたとすると、徳大寺邸に繩を張られたのも、何か深い理由があつたのであらう。

圓滑に叙したものの。下に「は」を省略して、連體假止となつてゐる。○何かは苦しかるべき——



造 殿 寢

何の差支さしつかへがあらう。少しも差支へがないの意。「苦し」は、困る。差支へる。不都合だの意。○此の殿——後徳大寺左大臣實定をさす。○さばかりにこそ——「さばかりにこそあらめ」の略と見ればよい。それ位のものだ。「さばかり」はその程度。それ位の義。この殿の御心も大抵その程度のもののだらう。まことにくだらないの意。○まゐらざりけると——文法上からいふと、「まゐらざりけり」とならねばならぬ。古寫本にては、「る」と「り」と同形の假名であるために、後人の誤つて讀んだものかもしれぬ。○綾小路宮——性恵法親王。龜山院の皇子。本朝皇胤

紹運錄に、「性恵法親王、無品、妙法院、上野綾小路、母内大臣公親公女」とあり、又、諸門跡

譜、妙法院の項に、「無品、龜山院皇子、後醍醐院孫、道教僧正資」とある。妙法院の道教の弟子となつた人で、上野宮又は綾小路宮といつた人であるが、一代要記に弘安八年親王宣下のあつたことが書いてある外、詳しい事は不明。○おはします——おいであそばされる。住んでゐられる。

○小坂殿——綾小路宮即ち性恵法親王御住所の御殿の名。山城名勝志第十四に、「按、妙法院門跡系譜に、尊性法親王、性恵法親王二代を小坂殿と記せり。小坂は綾小路の末に當れり。故に綾小路宮とも申すにや。今の妙法院御所の内に、小坂殿といふ有り、此御所の遺名なるにや。又妙法院の白河殿も是と同所乎」と。○いっぞや——現今口語にいふ「いっぞや」と同義。いつか。過去の或時をぼんやりとさした語。○繩をひかれたり——「繩を張られたり」と同義。○かのためし——藁のとまるのを防ぐ爲にといふ、あの後徳大寺の先例。○思ひ出でられ侍りしに——自然にふと思ひ出されたのである。「られ」は、自然可能の助動詞。○まことや——ほんとにまあ。まことにまあ。○「や」は反語でなく、感歎の意を示してゐる。○鳥のむれゐて——鳥の群り居て。鳥が澤山にゐて。○御覽じかなしませ給ひてなむ——この語の下に、「斯くは、しなさせ給ひける」といふやうな語が省略されてゐる。それを御覽になつて、可哀相だと思召されての意。○人の語りしこそ——「人の」は、「人が」の意。「かたりしこそ」は、「語りしこそ」で、語りしによりての意。又この「こそ」は、下の「おぼえしか」の「しか」で結ばれてゐる。○さてはいみじくこそ——この語の下には、「おはしけれ」などの語が省略されてゐる。「さては」は、それではの意。さういふわけであつたとすればの意。「いみじく」は實に立派なことだ。○徳大寺——實定卿の家は、前にも述べたやうに、徳大寺といつてゐるのだから、後徳大寺をさすのに、家の

號を以てしたものである。傳齋齋本は「後徳大寺」としてゐる。○いかなるゆゑか侍りけむ——多分何か深い理由があつたのであらうかと云ふ程の意である。然し或は皮肉に、後徳大寺には大した理由もあつたのではあるまいといつた意にもとれる。

第十一 段

神無月の比、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入る事侍りしに、遙かなる苔の細道をふみわけて、心ぼそく住みなしたる庵あり。木の葉にうづもるる筧のしづくならでは、つゆおとなふものなし。闕伽棚に菊、紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まわりをきびしくかこひたりしこそ、すこしことさめて、この木なからましかばとおぼえしか。

口譯 陰曆十月の頃、栗栖野といふ所を通つて、或山里に尋ねて入つて行つたことがありました。そのとき私(兼好)がずうつと長く續いた、人も通らぬ苔の生えた細道を踏みわけてゆくと、この長い苔の細道を踏み分けてきて、見るからに心細く淋しく見える庵に、心

語釋 ○神無月——「カミナヅキ」とも、「カンナヅキ」ともいふ。陰曆十月の異稱。下學集に、「十月諸神皆集、出雲大社。故云神無月也。出雲國神有月云也。」とあるのや、藤原清輔の奥義

淋しく住まひをしてゐる一つの庵がある。全く人間界から離れたやうな閑寂な所で、落葉に埋つてゐる筧から落ちる水の音以外には、何一つ音を立てて、訪ねてくれるものもない。而し閑伽棚に菊や紅葉などが折り散らしてあるのは、かかる絶境でもやはり住む人があるからであらう。斯うした淋しい所でも住めば住まれるものだよと、しみじみと興あることと感じ入つて見てゐる内に、向うの方

抄に、「天下もろくの神、出雲國にゆきて、こと國に神なきがゆゑに、かみなし月といふをあやまれり」といふのが普通である。曾根好忠の歌にも、「何事も行きて祈らむと思ひしに神無月にもなりにけるかな」といふのがあつて古くから斯く言はれてゐたらしい。然しこの語源についてはその他いろいろのものがある。○栗栖野——山城國宇治郡山科村大字栗栖野といふ。歌枕となつてゐる。○山里——山間の村里。○遙かなる苔の細道をふみわけて——作者兼好の心としては、遙か長い苔の細道を踏みわけてゆくと、そこに一つの草庵がある。庵の主人公の立場からいふと、庵の主の客觀とが混同して書かれたもので、兼好が遠くつづいてゐる苔の細道をふみわけて入つてくると、ここにこの遙か長い苔の細道をふみわけて来た或る人の庵があるといふのである。○「遙かなる」は、その道のずうつと長く續いてゐるさま。「苔の細道」は、苔の生えた細道のこと、あまり人の通らぬ奥まつたところであることが、この苔の生えてゐることによつてわかる。「苔」とは、蘚類、苔類、地衣類の隠花植物で、古木、濕地、石等に生ずるもの。葉、莖の區別が判然しない。○心ばそく住みなしたる庵あり——心細く住まひをしてゐる庵。世離れていかにも物さびしく住まつてゐるといふのである。「庵」は粗末な小屋。ここはその庵のさまを見た兼好の感じを、そのままそこに住んでゐる人の感じにして書いたのである。○木の葉にうづもる筧——「筧」は、カケヒで、「懸樋」とも書く。地上に架設して飲料水を引くために通すやうにしたとひ。普通は竹の筒を用ゐる。埋樋といつて地中にうづめるものに對して筧といふ。山の中で秋は木の落葉が多い上に、誰も掃除するものがないから、筧の上に木の葉が落ち重つて、殆どその存在

庭に、大きな蜜柑の木の、枝もたはむ程に澤山の果實が生つてゐるのがある。ところがよく見ると、その木の周圍を嚴重に圍ひがして

閑伽棚



あるので、少々感興がさめて、噫、若しこの蜜柑の木が無かつたとしたら、どんなに感興があつてよかつたらうかと思つた。

が見えないやうになつてゐるのをいつたもの。○しづくならでは——「しづく」は筧からしたたり落ちる水をいふ。その水の音でなくてはの意。故に詳しく書くならば、「しづくの音ならでは」とあるべきところを、すぐ下に、「おとなふ」の語があるので、「音」をそれにかかせて省略したものの。○つゆおとなふものなし——少しも訪問してゐる人がない。「つゆ」は、少しの意。「おとなふ」は、音を立てるの意もあるが、ここは訪問の意としてゐる。誰も訪ねる人のない庵の寂しさをいつたもの。○閑伽棚——「閑伽」は、「阿伽」とも書く。梵語 Aghya の音譯。水の意。佛教關係では佛に奉る水をいふ。閑伽棚は佛に供へる水、又は花、佛具をすすぐ水等を置く棚。閑伽棚は簀子の端などに作る。○菊、紅葉など——これは、佛に供へる爲に折つてあつたのである。○さすがに——さうはいふものの。このやうな淋しい所では、人などとても住んで居られさうもないが、さうはいふもののはり。○かくてもあらけれよ——こんなにして人里離れた所に、訪ねてくる人がなくても、筧の音を友として、一人淋しく住んで居られるものであるわいの意。「かくても」は、「こんなにしても」で、斯くの如き淋しいところに一人でものこと。「あらけれよ」の「ある」は、世に存在、生存すること。「れ」は、可能の助動詞「る」の連用形。「ける」は、「けり」といふ感動の助動詞の連體形。「よ」は感動詞。「住めば住まれるのであつた」と譯するより、「住めば住まれるのであるわい」と譯するがよい。○あはれに見るほどに——しみじみと心に深く感じながら眺めて居るうちに。「あはれ」は物悲しくでなく、感興の意。○かなたの庭に——兼好の立つてゐる位置は、庵の入口かどこかわからないが、そこから少し離れた所に庭のあるのが見えるのである。○柑子の木——蜜柑の木をさす。重訂本草綱目啓蒙廿六の橘の條に、「本

補 「苔の細道」は、傳
幽齋本、正徹本には、
「苔の道」とある。

邦國史類ニ柑子トイフハ、ミカンノコトナリ。橘ヲカウジトヨブハ、今ノ俗名ニシテ古名ノ柑子
ニアラズ」とある。○枝もたわむになりたるが——「たわむに」は、枝が撓むほどにの意。實が
澤山なつてゐるさまをいふ。「なりたる」の「なり」は、「あゝなつた」「かうなつた」といふ「な
る」(成る)とも考へられるが、果實がなるの「なる」(生る)とも考へられる。何れでも結局は
同じことになるが、ここは、枝もたわむほどに果實が生つてゐるとした方が穩當のやうである。
○きびしく——嚴重に。○かこひたりし——柑子の木の周圍に垣か柵がこしらへてあつたのをい
ふ。○ことさめて——興がさめて。今までもおもむきがあると思つて見てゐたのが、その面白味が
なくなつての意。上の「かこひたりしこそ」は、「ことさめて」の原因になるのであるから、「か
こひたりしによりて」の意と見るべきである。この絶境の山奥に住んでゐる庵の主は、浮世を超
越した無欲恬淡の人として兼好には興を感じたのが、柑子の果實を人にとられまいと柵のあるの
で、兼好にはやはりこの庵の人は俗人かと思はれて興さめたのである。○この木なからましかば
とおぼえしか——「この木なからましかば」の下に、「いかによからまし」などの語が省略されて
ゐる。若しこの柑子の木がなかつたならばよからうにと思つたとの意。「ましかば」は、「まし」
と呼應して、さうでないことを假にさうあるとして考へた場合の趣をあらはす語。ここでは、實
際は柑子の木があるけれども、若し假にこの木が無かつたとしたならの意。

第十二段

口譯 自分と同じ心持
を持つたやうな人と、
しみみりと話しあつ
て、面白い事でも、或
は又、一寸したつたら
ぬ世間話でも、少しの
隔てもなく語りあつ
て、心を慰めることは、
實に嬉しく感ずるに相
違ないのだが、さてそ
のやうな人は仲々あら
う筈がないので、少し
でも相手の人のいふ事
にそむくまいと考へて
對坐して居たならば、
まるで一人ぼつちであ
るやうな淋しい氣持が
するであらう。

第十二段

おなじ心ならむ人と、しめやかに物語して、をかしき事も世のはかなき事
も、うらなくいひなぐさまむこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければ、
露たがはざらむとむかひ居たらむは、ひとりあるこちやせむ。たがひに
いはむほどの事をば、げにと聞くかひあるものから、いさかたがふ所も
あらむ人こそ、我はさやは思ふなど、あらそひにくみ、さるからさざとも、
うちかたらはば、つれづれなぐさまめとおもへど、げには少しかこつかた
も、我とひとしからざらむ人は、大方のよしなしごといはむほどこそあら
め、まめやかかの心の友には、遙かにへだたる所のありぬべきぞわびしきや。

語釋 ○おなじ心ならむ人——自分と思想や、趣味、感情、意見、嗜好などの同じい人。「なら
む」は、「なる」の婉曲なる叙法。○しめやかに物語して——しみみりと落着いて語りあつて。○
をかしき事も——世の中の面白い事も。次の「世のはかなき事も」とあるのと同様に、「世の」の
語を冠して、「世のをかしき事も」としたと同意。○世のはかなき事も——世の中のつまらな
き事。即ち日常茶飯事といふに同じ。「世の中の無茶な事」などと解してはならぬ。○うらなくい
はなぐさまむこそ——「うらなく」は、隔てなく。腹藏なくさらけ出して。「いひなぐさまむ」は、
互に語り合つて心慰めること。この「こそ」は、下が「嬉しかるべきに」となつた爲にその結び

互に語り合ふ事をば、なるほど尤もだと聞くだけの價値は認めても、其處に多少違つた考へを持つ人は、「自分はさうは思はない。」などと云ひ争ひ、又こちらには、「さういふわけであるから、さうなるのだ」などと言つて、相語らつたならば、退屈はまぎれるだらうと思ふが、しかし實際は、一寸のわびごとをいふくらゐのことでも、自分と心の同じくない人は、ただ一通りのつまらない事をいふうち

は消失してゐる。○さる人あるまじければ——そのやうな人があるまいから。「さる人」は、「おなじ心ならん人」をさしてゐる。○露たがはざらむと——相手の語ることに少しもそむくまいとして。「露」は借字にて、少しもの意。「と」は、「とて」の意。○むかひ居たらむは——相對坐して居るのは。對ひあつてゐるのは。○ひとりあるこちやせん——相手の人の感情に少しも觸らないやうにと氣を配つてゐるので少しも興がなく、人と對坐して居ながらも、まるで一人ぼつちで居るやうな孤獨の感がするだらう。○たがひにいむほどの事をば——お互に相手の言ふ事をば。「ほど」は、互に語り合ふ話の範圍、程度を示す。○げにと聞くかひあるものから——なるほどそれも尤もだと、相手の言ふ所に對し、聞くだけの價値があるとは、互に思ふものといふ意。「げにと」は、なるほど尤もだと。「聞くかひ」は、聞くだけの價値といふこと。○いさゝかたがふ所もあらむ人——大體に於ては同意もするが、然し少しは意見の違つた所もある人。○我はさやは思ふ——自分はそのやうに思はるか、いやそのやうに思はない。「さ」は、「然」で、即ちそのやうにといふこと。「やは」は反語。○あらそひにくみ——言ひ争ふこと。論争しあふ。「にくむ」の意味はごく輕くて殆どただつたにすぎぬ。○さるからさぞともうちかたらはば——さういふわけであるから、さうなるのだといふやうに語りあつたならばの意。「さる」は、然るで、即ち、さうであるの意。「さぞ」は、さうであるぞの意。○つれづれなくさまめ——退屈もまぎれるだらう。無聊をもなくさめるだらう。○げには——「げに」といふ副詞に、感動の動詞「は」のついたもの。ほんにまああゝの意。「げにや」「げにも」といふに同じ。○少しかこつかたも云々——「かこつ」は、「救きいふ。わびごとといふ、不平をもらす。言ひ争ふ。怨言をいふ」などの義。

よからうけれども、忠實な心の底から氣の合ふ友に比べたときに、非常な相違があるといふことは、それはどうもいやなものであるよ。
補 「あるまじければ」は、正徹本傳幽齋本「あるまじけれど」とある。

故にここは、實際一寸わびごとをいふ位の些細なことでも、自分と同じ傾向でないやうな人の意。つまりここは、話相手としては少し位は議論などをする位の相手ならば張合があるやうに考へるが、しかしそのやうな人は、つまらぬ話をするときにはよいが、眞面目な話となると語り合ふことがうまくゆかず、さうなるとやはり少しでも自分と傾向の異つてゐるのは駄目である。心のあつた眞の友とは随分相違があるといふのである。○大方のよしなしごといはむほどこそあらめ——「あらめ」は、「よくあらめ」の意。世間一般のつまらぬことを語り合つてゐる間はそれでよからうが。○まめやかかの心の友には——「まめやかか」は、眞實の義。まじめな心の合つた友。心の底から氣の合つた友人として見るには。最初の「おなじ心ならん人」をさしてゐる。○遙かにへだたる所のありぬべきぞ——非常な差違がある。非常に距離がある。即ち單にそれだけの相違であるが、それでも眞實の心友たることはできない。○わびしきや——「や」は感動の助詞。つまらぬわい。なさない。つらい。いやなものだよの意。

第十三段

口譯 われひとり燈火の下に書物を繕いて讀み、まだ見ぬ古の世の人を友とするのこそ、

ひとり燈のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とすること、こよたうなぐさむわざなれ。文は文選のあはれなる卷々、白氏文集、老子のことは、南華の篇、此の國の博士どもの書ける物も、いにしへのは、あはれなる事

實にこの上もなく非常に心の慰むことである。書物は文選のしみ／＼とした情趣の深い各巻、白氏文集、老子の言、莊子の書などがよい。わが國の學者たちの書いた書物も、古ものは情趣深いことが澤山ある。

おほかり。

語釋 ○燈のもとに——燈下での意。燈(トモシビ)とは燈臺のこと。今日の燭臺の如きものである。韓退之の符讀ニ書城南詩云、時秋積雨霽。新涼入ニ郊墟。燈火稍可親。簡篇可ニ卷舒。とある。○文をひろげて——「文」(フミ)は書物のこと。即ち書物を繕いて讀むこと。○見ぬ世の人——自分の見たことのない世、即ち古代の人。その古人を友とすること。即ち古人の書いた書物を讀むことをいふ。○ことなうなぐさむわざなれ——この上なく、即ち非常に心を慰めることである。○文選のあはれなる巻々——文選六十巻中の感興の深い巻々だけといふ意味でなくして、各巻全體をさしてゐる。文選(モンゼン)とよむ。支那、梁の武帝の子、昭明太子(肅統)の編纂。周末から六朝までの詩文を輯む。六十巻(もとは三十巻)我が國では平安朝時代に大に愛讀され、室町時代にすたれてしまひ、徳川時代に又盛んに讀まれた。○白氏文集——「ハクシモンジフ」とよむ。唐の大詩人白樂天(白居易)の詩文集。正しくは白氏長慶集といふ。もとは七十五巻あつたが、後、佚して今は十帙七十一巻である。中古時代文選と共に大に行はれた。嘗て弘仁中嵯峨天皇が河陽館に行幸あり、「開闢唯聞朝暮鼓。登樓遙望往來船」といふ一聯を小野篁に示して、どうかといはれた時、その「遙」を「空」に改めなされた方が、更に結構でございませうといつたので、天皇は大に驚き、これは實は白樂天の句で、原作には「空」としてある。「今汝詩情與樂天同也」と仰せられたとの事、江談抄に出てゐる。然して當時この文集はまだ宮中に一部あつただけで、誰も知らなかつたと書いてあるから、恐らく此頃我が國に傳來したも

のであらう。○老子のことば——周の老子の著作「老子」といふ書物のこと。この書は、老子經、老子道德經上下二卷、五千餘言をさす。史記には、「老子乃著書上下篇。言道德之意五千餘言而去。」などあるところから、自然に「ことば」と言つたものであらう。この「ことば」の語は、「書物」といふに同じく、次の「篇」に對して書いたものである。老子は姓は李、名は耳、字は伯陽、一に老聃ともいふ。周代楚の大學者、道教の祖である。○南華の篇——所謂莊子の書をさす。支那周代の人、莊周の著。莊周は曹州の南華山に隠れてこの書を著す。唐の玄宗皇帝、天寶元年莊周に、「南華真人」の號を追贈し、著書莊子を南華真經と呼ぶことにされた。さて文選は六十卷ゆえ卷々といひ、老子は五千餘言ゆゑ、老子のことばといひ、莊子は三十三篇ゆえ南華の篇といつたものである。○此の國の博士どもの書ける物——日本の學者の書いた書物。「博士」「ハカセ」は必ずしも官職名の博士に限つていつたのでなく、廣く學者、物識り、博達の士の意にいつたもの。○いにしへのは——今の世の書物は駄目だが、古の世の書物はの意。このところ野植には、「日本の博士どもの文集には、懷風藻一卷、經國集二十卷、本朝文粹十四卷、文華秀麗集三卷、無題詩十二卷此類多し、又一家にては、野相公が集、菅家文章、善相公が集、都氏が文集、江吏部集、橋在列集、源順集などの類なるべし」とある。○あはれなる事おほかり——情趣あるものが多い。

補 「友とするこそこよなうなぐさむわざなれ」は、傳幽齋本、正徹本は、「友とするぞこよなうなぐさむわざなり」とある。光廣本野植本は「友とするぞ……わざなる」とある。

第十四段

口譯 漢詩漢文も面白いものであるが、何といつても、和歌はやはり面白いものである。みすばらしき賤しき者や、樵夫（キヨリ）のやうな者のする事でも、そのことを和歌として表現し、詠み出すと面白くなり、恐ろしい猪（キノシシ）でも、臥猪の床といふ言葉で歌の中によみ込むと優雅になつてしまふ。近頃の和歌は、どこか

和歌こそなほをかしき物なれ。あやしのしづ、山がつのしわざも、いひ出づればおもしろく、おそろしき猪のししも、ふす猪の床といへばやさしくなりぬ。

此の比の歌は、一ふしをかしきいひかなへたりと見ゆるはあれど、ふるき歌どものやうに、いかにぞや、言葉の外に、あはれにけしきおぼゆるはなし。貫之が、「絲による物ならなく」といへるは、古今集の中の歌くづとかやいひ傳へたれど、今の世の人のよみぬべきことがらとは見えす。其の世の歌には、姿言葉この類のみおほし。此の歌に限りて、かくいひ立てられたるも知りがたし。源氏物語には、「ものとはなしに」とぞかける。新古今には、「のこる松さへ嶺にさびしき」といへる歌をぞいふなるは、まこと少しくだけたるすがたにもや見ゆらむ。されどこの歌も、衆議判の時よろしきよし沙汰ありて、後にも殊更に感じ仰せ下されけるよし、家長が日

記には書けり。

一寸一箇所位は面白く、上手に言ひまわしたと思はれるものもあるが、どうしたものか、古い和歌のやうに、管外にしみ／＼とした情趣を感じるやうなものない。紀貫之が、「絲による物ならなく」と詠んだ歌は、古今集中の歌層だとかいつて世に傳へてゐるが、それでもどうして中々、今の世の人の詠まれさうな詞つきとは見えな

語釋 ○和歌こそなほをかしき物なれ——「なほ」は、やはり。やつばりの義。前段に漢詩漢文がよいと言つたが、何といつてもやつばり和歌は面白いものであるとの義。○あやしのしづ山がつ——「あやし」は、衣服容貌などすべて見すばらしくいやしいこと。「しづ」は、「賤」の字を書き、賤しい者のこと。「山がつ」は、山間の労働者、即ち杣人、樵夫、草刈、炭焼などをいふ。ここは、「あやしのしづ、山がつ」と二つに切つて考へるがよい。即ち見すばらしき賤しき者や、樵夫（キヨリ）などの業（仕事）の意。○いひ出づれば——歌として詠み出すと。彼等賤しき者の仕事のさまを、和歌によみ出すとの意。○ふす猪の床といへばやさしくなりぬ——「ふす猪の床」とは、猪が茅などの枯草を集め敷いて寝て居る所をいふ。さうしてその枯草を「かるも」といふ。「ぬのしし」といふと、人は皆何だか恐ろしいものやうに思ふが、その猪のことも「ふするの床」といふやうな表現をすると、如何にもやさしく聞えるといふのである。文の表面から考へると、猪即ち、臥猪の床といふことになるが、これはただ「臥猪の床」といふ「猪」に關係のある歌の用語を持出して、このやうな言ひかたをすると、おそろしい猪もやさしく聞えるといふのであつて、猪即ち臥猪の床といふことではない。「やさしく」は優美の意。元來「やさし」の語は、恥しの意であるが、相手に對してゐる間にこちらが恥しくなるまでに相手のみやびて居るといふ意に用ひられるやうになり、遂に優美といふ意になつた。さてこの出處は、八雲御抄卷六、用意部に、「寂蓮法師がいひけるは、歌の様にいみじきものなし。ぬのししなどいふおそろし

多い。それなのにこの歌に限つて、特に斯く歌屑と言ひ立てられたのも、どういふわけかわからない。源氏物語には、「物ならなくに」のところを、「ものとはなしに」と書いてある。(として見ると、「ものならなくに」といふ言葉遣がいけないのかしれない)新古今集では、「のこる松さへ嶺にさびしき」とある歌を、歌屑だといふのであるが、この歌はまことに少し歌調がくだけて、調子の整はぬ歌姿

き物も、ふすゐの。と。こ。な。ど。い。ひ。つ。れ。ば、や。さ。し。き。な。り。と。い。ふ、ま。し。て。や。さ。し。き。も。の。を、お。そ。ろ。し。げ。に。い。ひ。な。す、無。下。の。事。也」とあるによる。後拾遺集戀部に「かるもかき臥猪の床のいをやすみさこそ寝ざらめかからずもがな」、新葉集戀部に、「いつまでか伏猪のかるもかくばかり憂き中にのみ思ひ亂れむ」などある。○この比——徒然草の著者兼好の時代をさす。○「ふしをかしくいひかなへたりと見ゆるはあれど——その歌全體として非常にすぐれてゐるといふわけではないが、何處か一箇所位は面白くいひあらはされてゐると思はれるところはあつたが意。」「ふし」は、一箇所。一部分などの意。「をかしく」は、面白く。「いひかなふ」は、題意なり、歌の格調、表現なりの上に、ちやんと合ふやうな具合に拵へてあること。○ふるき歌ども——萬葉集や八代集あたりの歌をさしてゐる。○いかにぞや——どうしたものか。どういふわけか。これは疑問の意など殆どなく極く軽く使つてゐる。文法的にいへば、「言葉の外にあはれにけしき覺ゆるはなし。いかにぞや」の倒置と見るべきであるが、そこまで強い疑問としない方がよい。つまり、ごく軽く間投詞的にいふ一種の慣用語である。武田氏は、「單に「いかに」の意にも用ゐられるが、「どうして……か」の如く理由を詮索する意にも使はれる。この用例はそれで、何故かと疑問を起してゐるのである。」と述べてあるが、この場合は前説がよからう。○言葉の外にあはれにけしきおぼゆる——歌の文字に表はされた意味以外に、しみじみと情趣を感ずること。即ち言外に餘情の溢れてゐること。「けしきおぼゆる」は、情趣を感ずること。「けしき」は、景色よりも寧ろ氣色といふ方の義で、様子、顔色のこと。情趣のこと。「あはれ」は主觀的で、自分の情をいひ、「けしき」は、客觀的に歌のおもむきをいふ。○貫之——紀貫之。望行の子。歌人。御書所預、

とも見えようか。然しこの歌も、衆議判の時に、相當よいといふ判定があつて、後には後鳥羽院が特に感心したとの旨仰せ下されたといふことが、家長の日記に書いてある。

大内記、土佐守、玄蕃頭、木工權頭等に歴任。天慶九年卒。醍醐天皇の勅命を奉じて、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑と共に、古今和歌集二十巻を撰す。延喜五年に成る。勅撰集の嚆矢である。紀行には土佐日記の著がある。○絲によるものならなくに——古今集卷九、羈旅部に、「あづまへまかりける時道にてよめる、貫之」として、「絲によるものならなくに別れ路の心ぼそくおもほゆるかな」とある歌をいふ。「ならなくに」は、「ならぬに」の延音。より合せた糸ならば、その各のよりが分れると細くなるのが當然である。然し今自分が斯うして故郷に別れて來た旅の道は、何も絲によるといふ譯ではないのに、どうしてか妙に心細く思はれる事だの意。この歌は、全く道理一方で出來てゐるもので、何等の情趣も無いの意。この歌を歌屑といふのは、飛鳥井榮雅の古今集抄にいつてゐるが、この古今集抄は、徒然草より百三十年も後のものだから、この典據にならぬ。兼好は何によつたものか不明である。○いへるは——「いへる歌は」の意。○歌くづ——歌屑と書く。多くの歌の中で最も拙劣なもの。「歌くづとかや」の「か」は疑問の助詞。「や」は感動の助詞。○今の世の人のよみぬべきことがらとは見えぬ——この歌をまづいといふけれども、然し近頃の人には、とても詠むことができさうとは思はれないの意。「よみぬべき」は、「よむべき」の強きあらはしかたで、よむことができるの意。「べき」は可能の助動詞。「ことがら」は、言柄の意。即ち、言葉の趣。言葉の姿。○その世の歌には姿言葉の云々——紀貫之時代の和歌には、かういふ歌の姿や、かういふ詞遣の歌が非常に多かつたの義。「その世」は紀貫之時代をさし、「すがた」は、歌全體としての姿。「言葉」は、歌の用語。「この類のみおほし」は、殊にさういふ種類が多いといふので、そのやうなものだけ多くて、他は少いといふの

ではない。○此の歌に限りて——古今集時代には、外にもこの歌に似た歌が非常に多いのに、この歌だけが歌屑といひ立てられたのは、どういふわけかわかりにくい。○源氏物語——紫式部の著。五十四帖。「ゲンジノモノガタリ」とよむ慣習である。○ものとはなしにとぞかける——源氏物語、總角の巻の初の所に、「ものとはなしにとぞ、貫之がこの世ながらの別れをだに、心細き筋にひきかけむをなど、實に故事ぞ人の心をのぶるたよりなりけるを思ひ出で給ふ」とある。即ち古今集には、「ものならなくに」とあるが、それを源氏物語には、「ものとはなしにと」書いてあるといふのである。文段抄に、「兼好の此源氏をひける心は、彼歌を歌くづといひつたへしは、もし物ならなくにといふ所にや。源氏に、ものとはなしにと書きかへたればとなるべし。」と書いてゐるのは、この「ものならなくに」の句がまづいので、式部がわざと「ものとはなしに」と訂したものとし、兼好もさういふ意味でこの歌が拙いといつたものとしたのである。が然し兼好はさういふ意味で書いたとは思はれぬ。ただどうして此歌を歌屑といつたのだらうと書いた序に、源氏物語の文句を思ひ出して、ああさうだ、さういへば源氏物語には斯うあつたといふ位で書いたものと考へられる。○新古今——新古今和歌集二十卷。後鳥羽院の院宣によつて、源通具、藤原有家、同家隆、同定家、同雅經等の撰。○この松さへ嶺にさびしき——新古今集冬部に、「冬の來て山もあらはに木の葉ふり残る松さへ嶺にさびしき」祝部成茂とあるのをさす。この歌の詞書には、「春日社の歌合に落葉と云ふことを詠みてたてまつりし」とある。歌の意は、冬になりて山も禿げて見えすく程に木の葉が散り、峰に残つてゐる松さへ淋しく見えるの意。○歌をぞといふなるは——冬の來て、云々の祝部成茂の歌を、歌屑といつてゐるのは。○少しくだけたる

すがたにもや見ゆらむ——どこか少し調子のこわれて、よく整つてゐない所があるやうに思はれるとの意。「くだけたるすがた」とは、歌の調子の整はず、どこかに碎けた缺陷があるとの意。この事に關しては、文段抄に、「上の句の詞つづきくだ／＼しきやうなれば、新古今の中の歌くづといふにやとの心也」と見え、本居宣長の玉の緒卷二に、「此歌は新古今の中の歌くづなりといへるさたあり。それを兼好がつれ／＼草に、上の句のわるき故なりとやうにいへり。誠に上の句もよろしくはあらねど、もしくはテニヲハのとのはざる故にても有りぬべし。上にソ、ノ、ヤ、何等の辭なくて、シキと留れるは、八代集の中には此一首のみなり。その後の十三代集にも玉葉、風雅にのみ有りて、外の集には一首も見えず」とある。○衆議判——シユギハンとも、シユウギハンともよむ。多くの歌人を左右に分ち、その作を兩々相對せしめ、その優劣を判定し、勝負を決する事を「歌合」(ウタアハセ)といふ。その判定は判者があつて、それによつて決定する場合もあるが、又左右の判者が互に褒貶論議して決することがある。これを衆議判といひ、衆議によつて決しないときはやはり判者が最後の決定をなす。○よろしきよし沙汰ありて——「よろし」は、可なりよの意。まあ相當よいこと。最上によきときは、中古語では、「よし」の語がある。「沙汰」は、判定、評定、とりきめ。即ち衆議判の席上では、この歌がまあ可なりよといふ判定があつての意。○後にも殊更に感じ仰せ下されける——衆議判のときもよいといふ判定があつたが、後日又、後鳥羽院も特に感心してよいといはれたといふのである。○家長が日記には書けり——「家長が日記」は、「家長の日記」の義。家長は源家長のことで、從四位上但馬守。後鳥羽院に仕へ、和歌所の開闢となつた。(和歌所の事務を總理する役である。)彼の日記に曰く、「其次

の年の冬の比、春日の社の歌合とて侍りき。このつがひはおなじ程のよみくちと、よの人のつがひなどおもへるをえりあはせられたりしかば、いつよりも此たびはまけじはやなど、たれも思ひあへり。此歌合によみくちと聞ゆる人々せう／＼歌めされ侍。祝部成茂と申すもの、はじめに歌めされぬ。成中がまご、政中が子也。重代のくら人にて、よみくちと人々申あへり。よみて奉りしうち、落葉といふ題の歌、冬の來て山も顯はに木の葉降り残る松さへ峯に淋しき、此歌、和歌所にて衆議判ありしに、この歌をよみあげたるを、たび／＼詠せさせ給ひて、よろしくよめるよしの御けしき也。つぎのあしたに、よべの御歌合めしよせて御らんずるに、なりもちがうた、かんじおぼしめすよし、御教書をおほせ下さる」とある。家長日記は、和歌所の記録で、續々群書類從第十五、歌文部に収めてある。

歌の道のみにしへに變らぬなどいふ事もあれど、いさや今もよみあへるおなじ詞ことば歌枕うたまくらも、むかしの人のよめるは、更におなじものにあらず。やすくすなほにして、すがたもきよげに、あはれもふかく見ゆ。梁塵秘抄りやうぢんひせうの郢曲えいきよくのことばこそ、又あはれなる事はおほかめれ。昔の人は、いかにいひ捨てたることぐさも、皆いみじく聞ゆるにや。

語釋 ○歌の道のみにしへに變らぬ——何事についても古代はすぐれ、後代になるにつれて悪

口譯 和歌の道だけは、今も古代に變らぬなどといふ事もあるが、いやどうして、今日世人がお互に和歌に詠む、古人が使つたと同じ歌語や歌枕でも、昔の人が歌に詠んだもの

のは、今の人の使つてゐる格調と比して、決して同一のものではない。古人のものは、歌調も平易にすらりと穩當にして、歌の姿も美しく、情趣も深く見える。梁塵秘抄中に記されてゐる詠ひ物の言葉こそ、またどうもしみじみとした情趣のある事が多いやうである。昔の人は、どんなに無雑作に言ひ放つた言葉にも、皆非常に立派に見えるのであらうか。

くなつてゐるが、歌道だけは古代と少しも變らないといふやうに。野守鏡上に、「何事も衰へゆく世の末までも、歌ばかりこそかはらぬ情にてあるよしなん、熊野の権現、夢の中に示し給ひたりけるより」とある。○いふ事もあれど——世間では言つてはゐるが。○いさや——さやどうだらうかと疑ふ意の語で、ずつと句を隔てて、下の「更におなじものにあらず」と呼應してゐる。この語は、「いさ」といふ感動詞と、「や」といふ感動の助詞との合したもので、下に必ず否定の語がくる。「いざ」と濁ると、人を促し誘ふときの「サア」といふ意になる。混同してはならぬ。○今もよみあへるおなじ詞歌枕——「よみあへる」の「あふ」は、單に二人のものが相對して詠むとの意でなく、多くの人が皆詠んでゐるとの義。「おなじ詞」は、古人が使つたと同一の歌の用語。「歌枕」とは、歌によみ込む名所。やはり、「同じ歌枕」の意となる文の構造である。○むかしの人のよめるは——古人の詠んだ和歌は。○更におなじものにあらず——「更に」は、全く。決して、少しもの意。決して同一のものでない。即ち、今人の、歌によむ折使ふ古人と同一の詞や、歌枕であつても、その歌の姿は古人のよんだ歌の姿に比して、決して同じしらべになつてゐない。今人の歌は、古人と同一の用語歌枕を使ひながら劣つてゐるとの義。○やすくすなほにして——歌の用語並にその表現法が平易にすらりと穩當にして、殊更技巧を弄した不自然などこるがない。「やすくすなほ……」の上に、「古人の歌は」の語を補うて見るとよくわかる。○すがたもきよげに——歌の格調も上品にすらりとして美しく。○あはれも深く——歌の情趣も深いやうに見える。○梁塵秘抄——後白河天皇の御撰にて、平安朝末期に行はれた諸物(神樂、催馬樂、法文歌等)を集めたもの。本朝書籍目録によると、「二十卷、後白河院勅撰」とある。早くより歌

補 「いかにいひ捨て」
正徹本、傳幽齋本、光
廣本、嵯峨本、弘賢本
野槌には、「ただいかに
いひ捨て」とある。

逸したが、近頃となつて、梁塵秘抄卷二、及び卷一の斷簡と口傳集卷十とが發見せられた。この殘
缺は大正元年、佐々木信綱博士校訂、明治書院より出版された。「梁塵」とは謠ひ物のことで、
杜佑通典百四十五に云く、「漢有_ニ虞公_一。善歌能令_ニ梁上塵起_一。」とある故事より起る。○郢曲——
エイキョク。神樂歌、催馬樂、風俗歌、今様、朗詠などの謠物の類を概括していふ。俗曲、歌謠
類の總稱。昔、支那戰國時代、楚の首府郢（エイ）にて、客の歌つた俗曲を郢曲といつたことよ
り起る。我が國では朗詠を支那の郢曲に眞似て謠つたので、初めは朗詠を郢曲といつたが、轉じ
て當世風の謠物の總稱となつた。文選卷四十五、宋玉の對楚王問に、「客在_ニ郢中_一者_ハ其始
曰_ニ下里巴人_一、國中屬而和者數千人云々」の故事により流行歌の義。○いひ捨てたることぐさ——
無雜作に言ひ放された無技巧な言葉。「いひすつ」は、無雜作に云ふ。無技巧にいふ。「ことぐさ」
は、言葉の意。○いみじく聞ゆるにや——非常に立派に聞えるのであらうか。「いみじく」はす
ぐれて。立派に。「にや」の下に、「あらむ」の語が省略されてゐる。

第十五段

口譯 何處にもせよ、
暫時旅行してゐて、京
都から離れてゐるの
は、目の醒めるやうな

いづくにもあれ、しばし旅だちたるこそ、めさむるこちすれ。そのわた
り、ここかしこ見ありき、ゐなかびたる所。山里などは、いと目なれぬ事
のみぞおほかる。都へたよりもとめて文やる、「その事、かの事、便宜にわ

新しい氣分のするもの
である。旅先で、その
あたりあちらこちらと
見物して歩く。すると
田舎めいた所や、山里
などは、都では見馴れ
ぬ珍しいものが多く見
える。京都の家の方へ、
幸便をさがし求めて、
それに手紙を託して送
るのに、その手紙の中
に、「あの事も、このこ
れ／＼の事も、それを
なすのによい機會毎に
ちやんと忘れないでや
つて置け」など言つて
送るのは面白いもので
ある。そのやうなまだ

するな」などいひやるこそをかしけれ。さやうの所にてこそ、よろづに心
づかひせらるれ。もてる調度まで、よきはよく、能ある人、かたちよき人
も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。寺、社などに忍びてこもりたるもをか
し。

語釋 ○いづくにもあれ——何處にもせよ、別にどこと定めはしない。どこでも構はぬこと。特
に名所の地などといふのではなくても意。○旅だちたる——この「旅だつ」の語は、今日では、
旅行に出發するといふ意に使ふが、此所は旅にあるの意。枕草子の「旅だちたる所、近き所など
にて、下衆どものざれかはしたる」の如きそれである。○めさむるこち——目がさめるやうな
生新の心地。當時は都鄙の文化が懸絶してゐたから、旅先では目に映ずるものが、すべて目新し
く感ぜられたのである。○そのわたり——そのあたり。旅して行つたその近邊。「わたり」は、
今日のあたりと同じ。○見ありき——見て歩き。「ありく」は、「あるく」の古語。○ゐなかびた
る所山里など——田舎めいた所や、山間の村里など。○目なれぬ事のみぞおほかる——「目なれ
ぬ事」は、見馴れない事。珍しい事。「のみぞおほかる」は、さういふものが多い。○都へたよ
りもとめて文やる——京都への幸便をさがし求めて、それに託して、京の方へ手紙を送るのであ
る。「文」は手紙のこと。○その事かの事便宜にわするな——あの事も、この事も皆、それをな
すべきよい機會には、忘れないやうに爲して置けと、家の者に注意するのである。「その事かの

馴れぬ始めての旅先では、(自分一人で何も彼も氣をつけてゐねばならぬので)萬事につき心づかひが自然とせられる。(が、それが又面白いのである。)旅行中携帯してゐる道具までも、真いものは旅行先では一層よいものとなつて見えるし、藝能ある人や、容貌よき人も、常に都に居た時よりは、一層すぐれて立派に見える。又神社や佛閣にこつそりと止宿してゐて祈願などしてゐるのも、旅寢の風情に通ふところがあつて面白い。

事」といふ書き方は、あの事やこの事といふのと同じく、實際はいろ／＼の事を一一具體的に擧げて書いてあるのを、それと明瞭に指示しない場合に斯く書くのである。源氏物語梅枝の卷に、「その事かの事となく聞え合せたまひて云々」蜻蛉日記に、「その事かの事ものすべかりければ急ぎぬ」などの如し。「便宜」は、よき折。よき機會の意。「忘るな」は忘れずに片付けて置けの意。「な」は禁止の意の助詞。平治物語に、「便宜候はば、當家の浮沈をも試むべし」とある。○いひやるこそをかしけれ——旅先から京都の家に、手紙で言ひ送るのは面白いものである。○さやうの所にてこそ——そのやうな旅先の田舎の所でこそ。○心づかひせらるれ——自然といろいろなことに氣がくばられるの意。「らるれ」は、「らる」といふ自然可能の助動詞。吾々が旅行に出てゐると、何となく些細なことにまで注意を拂ふやうになる。その氣持を書いたもの。○もてる調度——旅先へ持つて行つてゐる道具類。○よきはよく——よい品物は、旅先では一層よいものとなつて見える。家にゐたときには、別にさほど着附かなかつたものだが、田舎などの旅先では、今更のやうによい物となつて見えるのである。○能ある人かたちよき人も云々——藝能ある人や、容貌のよき人も、旅先では一層立派に偉らく見えるといふのである。ここの「をかし」は、立派とか、すぐれてゐるの義。○寺社などにしのびて云々——「しのびて」は、「こつそりと人に知られないやうに隠れてゐること」。「こもる」は、神社、佛閣などに止宿して祈念してゐるさま。この一節は、さきの旅行の際外泊するのと、やや似てゐることなので、作者が末尾に書き加へたのである。○その事かの事便宜——傳幽齋本正徹本には「その事かの便宜」とある。この原文よきが如し。又「をかしとこそ」の「こそ」は右の二寫本になし。

第十六段

神樂こそなまめかしく、おもしろけれ。大かたもの音には、笛、箏、つねに聞きたきは琵琶、和琴。

口譯 神樂は實に優雅で面白いものである。大體、音樂では時たまの神樂などの際に聞く笛と箏とがよい。そしてふだんいつでも常に聞きたいと思ふのは琵琶と和琴とである。

語釋 ○神樂——「カグラ」とよむ。古くは、カミアソビとも言つた。神前に奏する舞樂。天照大神が天岩戸にお隠れになつた時、天鈿女命が岩戸の前でお舞ひになつたのが起源である。庭燎を焚き、和琴、大和笛、笏拍子、箏等の樂器を用ひ、神樂歌をうたふ。普通神樂と言つてゐるが、宮中で行はれるもの。伊勢神宮、石清水八幡宮、賀茂神社等の大社で行はれるもの。諸國の神社で行はれる里神樂(サトカグラ)などの種類がある。内侍所の神樂は一條帝の御時から始まつて隔年に行はれ、白河天皇の承保以後は毎年十二月の吉日に行ふのが恒例となつた。宮中では今日でも賢所で古式のまゝ行はせられる。ここにいふのはこの内侍所の神樂をさすものと思はれる。○なまめかしく——優雅である。○おもしろけれ——「をかし」の語を用ゐずして、「面白し」と言つたのは、天照大神が天の岩戸を出でさせ給ふとき、人の類が皆面白く見えたので、「面白し」とお喜びになつたことを含ませてゐると云つてゐる人がある。これは古語拾遺、天岩戸の條に、天照大神が岩戸から現はれなると、「上天初晴。衆俱相見、面皆明白。伸手歌舞。相與稱曰。阿波禮。(言天晴也)、阿那於茂志呂(言衆面明白也)、阿那多能志(言伸手而舞、今指樂事、

謂「之多能志」此意也、阿那夜瑟（竹葉之聲也）、低瑟（木名也、振其葉之謂也）」とあるのに
よる。然し兼好は果してここまで考へてゐたかどうかは疑はしい。○大方——大體。凡そ。神樂
のことを言つた序に、兼好は一般の樂器についての自己の好尚を述べてゐる。○ものの音には笛
箏築——「ものの音」とは、樂器の音といふこと。凡そ樂器の音の中ですきなものは、笛の音と箏築
の聲とがよいといふのである。「笛」とは神樂の笛のこと。普通の解釋には、「笛——横笛や笙の
笛をいふ」とあるが、それは誤である。我が國中古に用ゐられし笛に四種ある。神樂笛（一に和
笛）、東遊笛（後世亡ぶ）、高麗笛（狛笛）、横笛（一に龍笛）がそれである。此所は作者が神樂の
ことから思ひついたのであるから、神樂笛のことである。此笛は六孔、長さ一尺六寸位。他に比
して太いから太笛ともいふ。箏築に就いては田邊尚雄氏の日本音樂講話の解説を借るとそれに曰
く、「此の樂器はもと支那の北方又は西方の胡人が持つて居たものであつて、之を支那に傳へた
のであるといふことである。尤も胡國では、竹でなく、馬の骨や獸の角で作つたものらしい。然
し支那に傳つてからは、専ら竹を以て作つた。今用ひられて居る箏築は、短い竹製の管に九個
の竅が開けてある（七個は前面に、二個は後面にある）。長さ六寸位、太さ（内徑）三分位、「但
し管の下端即ち開口の方が細く、上端即ち舌の附いて居る方が心持太い）。竹は成るべく寒國の
竹を用ひ、之を先づ石灰で煮てから、次に又之を泥で煮、又再び石灰で煮ると色が黒くなる。そ
れから此の管を竅の所をよけて椶皮又は籐で巻きつける。又此の管の上端に蘆の莖で作つた所の
舌を挿入する。下の方は厚く太く、上の方は薄く削つて、兩方から押しつぶして舌として用ふ。
之を押しつぶすには金の鑷を焼いて暖めてやるのである。此の舌の半程の部分を横に取巻いた帶

の如きものを賣（又は世目）といふ。これは籐で作る。此の賣の置き様によつて音色や音量が變
つて來る云々。」とある。なほ「笛、箏築」の下に、「いとよし」などの語が略されてゐる。○つ
ねに開きたきは云々——ふだん何時でも常に開きたいと思ふのは、琵琶と和琴であるの意。ここ
に注意せねばならぬのは、この段の主意は、笛、箏築は、神樂やその他の時たまに聞くと、その
都度何ともいはれずよいものであるし、琵琶や和琴は常にいつ聞いてもよいといふのである。然
るに、諸抄大成に大金の説を引用して、「笛箏築は、管絃を奏する時はよし、琵琶和琴は一器に
ても面白き心也」と書いてあるので、一般の參考書は大抵これにより、笛と箏築とは合奏の場合
に面白いのであると言つてゐるが、その意ではあるまい。○和琴——「ワゴン」とよむ。又、ヤ
マトゴト、アヅマゴト、單にアヅマともいひ、「倭琴」と書く場合が多い。桐で作る。長さ五尺
乃至六尺二三寸。幅は本五寸一分、末七寸九分、厚さ一寸五六分、柱は楓の枝の皮つきを用ゐる。
水牛製の琴軋（コトサギ）といふ筈にて搔鳴らす。我が國固有の樂器であるが、神樂笛と同じく、
支那の樂器の影響を受けてゐる。外形は主として新羅琴に倣ひ、絃の張り方も、これによつてゐ
るが、絃の數だけは太古そのまま六本が普通である。○琵琶——雅樂用の物を樂琵琶といひ、
今の俗曲琵琶より遙に大にして且つ重い。昔は「琵琶の琴」と呼ばれてゐたこともある。普通は
四絃である。故に和歌には、「四つの緒」といひ、單に「琴」とよんでゐる。然し二絃から八絃
に至る各種類がある。槽（胴の部分）は、果李、紫檀、桑等。海老尾は黄楊又は白檀。轉手は槽
と同木。撥は黄楊。柱は檜木で作る。遣唐使藤原貞敏が支那から傳へたものと言はれてゐる。釋
名に推し手前曰琵琶、引手卻曰琵琶、琵琶本胡家馬上彈也」とある。

第十七段

山寺やまてらにかきこもりて、佛ほとけにつかうまつるこそ、つれづれもなく、心のこころにいりもきよまるこちすれ。

口譯 暫く俗世間から離脱して、俗界を遠く離れた山間の静寂な寺に引籠つて、佛に仕へて居れば、何等の退屈なこともなく、心の底から綺麗になるやうな心持がする。

語釋 ○山寺——山間の淋しい寺のことである。普通の村里近い寺では、俗塵を去つて、眞に閑寂な心境で修業することが出来ないから、特に山寺といつたのである。第五十八段の「心は縁にひかれてうつるものなれば、静かならでは道は行じ難し。」とあるのと同じ考へである。然して兼好の佛道に對する考へは、強い信念から來てゐるのではなく、趣味の上からの佛教であつた。○かきこもりて——「かき」は接頭語でさほど意味がない。「こもる」は、社寺に幾日か逗留して神佛に祈願することをいふ。○佛につかうまつる——「つかうまつる」は、「つかへまつる」の音便。佛に香花を手向け讀經念佛などするをいふ。○つれづれもなく——退屈なこともなくの意。これ念佛誦經のために多くの時間を費すばかりでなく、居を移すは一種の旅をすることになつて、気分が新しくなるからである。(第十五段參照) ○心のこころにいりもきよまるこちすれ——「心のこころにいり」は、心の穢けがれで、いろ／＼さま／＼の煩惱欲望をいふ。その煩惱欲望が綺麗になくなつてしまふやうな氣持がするといふのである。

第十八段

人はおのれをつづまやかにし、おごりを退しりぞけて、財たからをもたず、世をむさばらざらむぞ、いみじかるべき。

昔より、かしこき人の富めるは稀なり。もろこしに許由きよゆうといひつる人は、更に身にしたがへるたくはへもなく、水をも手してさきぎて、飲みけるを見て、なりひさごといふ物を人の得させたりければ、ある時木の枝にかけたりければ、風にふかれてなりけるを、かしがましとて捨てつ。又手にむすびてぞ水も飲みける。いかばかり心のうち涼しかりけむ。孫晨そんしんは冬の月に衾ふすまなくて、藁わら一束ありけるを、夕ゆふべにはこれにふし、朝あしたにはをさめけり。もろこしの人は、これをいみじと思へばこそ、しるしとどめて世にも傳へけめ。これらの人はかたよりも傳ふべからず。

口譯 人は自己の身持をつづましやかにし、驕奢贅澤をしりぞけて財寶を持たず、俗世の名聞利慾を欲ばり求めないやうにするのが、實に偉い立派なことである。昔から賢人の富んでゐた例は少い。支那に居た許由といふ人は、身につけた貯へ物は少しもなくて、水をも手ですくひあげて飲んでゐた。この有様を見て或人が、瓢箪の

語釋 ○おのれをつづまやかにし——己の身を持するに儉約を以てするをいふ。己に奉ずるに薄

杓シヤクといふ物を與へたので、それからその杓で水を汲んで飲んでゐたが、或時その瓢箪の杓を木の枝に掛けて置くと、風に吹かれてひゅう／＼と鳴つたので、これはやかましいものだと言つて、或人から貰つた瓢箪の杓を捨ててしまつた。さうしてもとのやうに手で水をも拘つて飲んだ。どんなにか許由の心の中はずが／＼としてゐた事であらう。又孫農は、冬の寒い時節にも掛蒲團がなくて、ただ藁一

いのである。「つづまやか」は、「奢り」の反対で、簡素にし、手軽にしてゐること。「儉」の字や、「約」の字がそれにあたる。○おごりを退けて財をもたず。——驕奢を退けて、質素な生活をなし、財寶を所有しないこと。「退けて」は、他動詞で遠ざけて用ゐないこと。「財」は、財産。財寶のこと。○世をむさばらざらむ——金持になりたいとか、立派な地位が得たいとかいふ世上の利慾を慾ばり求めないのが意。「むさばる」は、無闇に慾ばること。ここを長生を欲しないのがと解した人もあるが、この文意にあつてゐない。○いみじかるべき——立派なことである。○かしこき人——聖人賢人といふ場合の賢人をさしてゐる。智慧ある人、即ち利巧な人の意でない。○もろこしに——このところは少し變な書き方である。「もろこしに」は、場所を示す副詞であるから、文法的に言へば、「もろこしにありし許由といひつる人は」の意。「もろこし」は、唐土の字をよむ。廣く支那をさしていふ。○許由——支那古代の隱士。箕山に隠れてゐたが、その賢人たるを聞いて、堯帝が天下を之に譲らうとしたが受けず。この話を聞いて耳が汚がれたといひ、潁水の川で耳を洗ひ、箕山に隠れたといふ有名な話がある。本文の「なりひさご」(瓢)の話は、高士傳に云く、「許由隱箕山。以手捧水飲之。人遣一瓢。得以取飲。飲訖掛於樹上。風吹歷々作聲。尚以爲煩遂去之矣。」とある。なほ蒙求上卷に斯くの如き文がある。○更に身にしたがへるたくはへもなく——身についた貯へは少しも無くての意。「更に」は少しもの意で、下の「なくて」にかかる。「したかへる」は、自動詞で、身についてゐるの義。「たくはへ」は、金錢についていふばかりでなく、普通の家具、その他の物品を概括して言つてゐる。○手してささげて——手ですくひあげること。「手して」は、手にて、手を以て、手を使ひての意。「さ

束あつたのを晩にはそれをかぶつて臥し、翌朝になると取片づけたのであつた。支那の人はこの許由や孫農を偉いと思つたからこそ、この事蹟を書物に書きとどめて後世にも傳へたのであらう。我が國の人と來たら、よしやこのやうな人があつたとしたところで、書物に書きとどめるところか、口で語り傳へるところもしない。

さげて」は、さしあげての意。「さしあぐ」の約。上へ持ちあげること。○なりひさご——瓢。ひさご。ふくべ。ふくべの實を、くりぬいて乾したものを。瓢箪を二つに割いて、木の杓子同様に水を汲むに用ゐた器。古語に木の杓を「ひさご」といひ、それと區別して、ふくべひさごを「なりひさご」(木に生つた實の杓の意)といふたのである。今でも朝鮮では瓢箪を斷ち割つて柄杓にして居るといふ。「といふ物」といふ書き方は、或る物事に強く注意せしめる時に使ふ。○人の得させたりければ——或人が與へたので。即ち人が呉れたのでの意。「させ」は使役の助動詞で、或人がそれを彼に得させた。即ち呉れてやつたの意。「ければ」は、「から」の「で」の意。此句の下に、「それで水を汲んで飲み、それから或時云々」とつづくものと考へるがよい。○木の枝にかけたりければ——掛けて置いたところの意。この「ければ」は、幽齋本、正徹本、光廣本、弘賢本など「けるが」とある。この方がよい。○なりけるを——「鳴りけり、そを」として解するとわかりやすい。○かしがましとて捨てつ——やかましいといつて捨てた。○又——もと／＼通りに。もとのやうに。○手にむすびてぞ水も飲みける——「むすびて」は、拘つて。掌(テノヒラ)をくぼめて水をすくふをいふ。○いかばかり心のうち涼しかりけむ——どんなに心の中がせい／＼したことだらうの意。「すずし」は、今日いふ「せい／＼する」の語にあたる。「いかばかり」は、どんなにか。いかほどの義。「涼し」はやはり、水のことを言つた縁語とすべきであらう。○孫農——蒙求卷下、「孫農藁席」の補注魏の趙岐の三輔決録に、「孫農字元公。家貧織席爲業。明詩書。爲京兆功曹。冬月無被。有藁一束。暮臥朝收。」とある。○冬の月——冬の季節の意。即ち冬の間。○食なくて藁一束ありける——「食」は(フスマ)とよむ。掛蒲團の

人」とある。

こと。方形の夜具。被(フスマ)とも書く。「ありけるを」は、「ありけり、それを衾にかへて」の意として解するとよくわかる。○これにふし——藁をかぶつて寝たとの意。○をさめけり——取片づけた。○これをいみじと思へばこそ——「これ」は、許由と孫晨のなした事をさす。「いみじ」は、すぐれてゐる。えらいことである。○しるしとどめて——書物に記録して。○世にもつたへけむ——後世にも傳へたのであらう。「世」は、後世とするのがよい。その時代の世間と解するのはよくない。○これらの人——ここの人の義。即ち我が國の人。日本人。○かたりも傳ふべからず——「語り傳へもすべからず」と同意。語り傳へもしないだらう。わが國人は、たとひそのやうなことがあつても、決して書物に書きとどめるところか、口で語り傳へることもしないの意。

第十九段

口譯 春夏秋冬の季節の變り行くのこそ、自然人事の何事に就いても情趣のあるものである。何かにつけて泌み／＼と感ずる情趣のあ

折節せりふしのうつりかはるこそ、物ごとにあはれなれ。「もののははれは秋こそまされ」と人ごとにいふめれど、それもさる物にて、今ひときは心もうきたつものは、春のけしきにこそあめれ。鳥の聲こゑなども、ことの外ほかに春めきて、のどやかなる日影ひかげに、垣根かきねの草もえ出づる比くらより、やゝ春深く、霞かすみわたりに、花もやう／＼けしきたつほどこそあれ。折しも雨風あめかぜうちつづきて、心

るのは、秋の季節が一番すぐれてゐると、誰も彼も皆そのやうに言ふやうであるけれども、成程それもさうであるが、今一段と心も

あわたゞしく散りすぎぬ。青葉あおはになりゆくまで、よろづにただ心をのみぞなやます。花橋はなはしは名にこそおへれ、なほ梅のにはひにぞ、いにしへの事も立ちかへり戀こひしう思ひいでらる。山吹やまぶきのきよげに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすてがたき事おほし。

浮き立つて面白いのは、どうしても春の景色であるやうだ。鳥の鳴聲なども格別に春らしくなつてきて、ゆつたりとして静かな春の陽光を受けて、垣根の草も芽を吹き出して来る早春の頃から、だん／＼と春も深くなり、そのあたり一面にずうつと深く霞が立ちつづ

語釋 ○折節のうつりかはるこそ——「折節」とは、時節とか、季節の意。春夏秋冬の四季をいふ。春から夏となり、夏から秋、秋から冬と四季の變化するをいふ。鳥部山物語に、「折ふしの移りゆくは世の中の習ひなれど云々」とある。○物ごとにあはれなれ——「物ごと」は、四季の景物や人事の何事につけても。即ち自然現象も社會現象も總べてを含めていふ。「あはれ」は情趣深いこと。○物のあはれは秋こそまされ云々——物事から受ける感興、景物の風情は秋が最もまさつてゐると、誰も彼もいふやうだけれどもこの意。春と秋との優劣論で最古のものは、古事記中卷應仁記に、春山之霞壯夫かすみをとこと秋山之下米壯夫したけをとこの兄弟争ひが始めである。然して秋をよしとするものには、萬葉集卷一に、「天皇(天智)詔内大臣藤原朝臣(鎌足)。競憐春山萬花之艶。秋山千葉之彩。時。額田王以歌判之」と題して、「冬ごもり春さり來れば、鳴かざりし鳥も來鳴きぬ。咲かざりし花も咲けれど、山を茂み入りても聽かず、草深み取りても見ず、秋山の木の葉を見ては、黄葉をば取りてぞしぬぶ、青きをばおきてぞなげく、そこしたぬし、秋山を吾は」とある。但し古注には、萬葉集卷一、額田王(ヌカダノオホキミ)の歌として、「花もみつ紅葉をも見つ

き、櫻花もやう／＼咲き出さうとする頃、恰度折も折、相憎と雨や風がうちつゞいて降つたり、吹いたりして、花も落着いた氣持もなく忙しく散つてしまふ。さうして花の散つたあとが青葉になつて行く迄、即ち晩春すぎるまで、人はただ何や彼につけて氣苦勞ばかりしてゐる。花橋は昔から懷舊の情を起させるものとして知られて居るが、それでもやはり梅のほひに依つて、古の事も今更の如

虫の音もこゑ／＼おほく秋はまされり」の歌をあげてゐるが、萬葉集にかかる歌なし。拾遺集卷九、題知らず、讀人しらすに、「春はただ花のひとへに咲くばかり物のあはれは秋ぞまされる」と。源氏物語、野分の巻の初めに、「つくり渡せる野べの色を見るには、また春の山も忘れられて、涼しうおもしろく、心もあくがるるやうなり……秋に心よする人は數まさりけるを、名だたる春の御前の花園に心よせし人々、またひきかへしうつろふ氣色、世の有様に似たり」と、又、源氏物語薄雲の巻には、「年の内ゆきかはる時々の花紅葉、空のけしきにつけても、心のゆくことも侍りにしがな。春の花の林、秋の野のさかりを、とり／＼に争ひ侍りける、その頃げにと心よるばかりあらはなる定めこそ侍らざなれ、唐土には春の花の錦に若くものなしといひ侍るめり。やまと言の葉には、秋のあはれを取り立てて思へる、いづれも時々につけて見給ふに、目うつりて、えこそ花鳥の色をも音をも辨へ侍らね」とある。白樂天の詩に、「大抵四時心愴苦。就中應斷是秋天。」とあるのや、詩學大成四に、「自古逢秋悲寂寥。我言秋夕勝春朝。」(劉禹錫)とあるのは、秋の景について特に心を使ふことが多いといふので秋のすぐれてゐるとの句といはねばならぬ。○それもさるものにて——なるほどそれもさうであるが。つまり世間の人は多く、物のあはれは秋の方がまさつてゐるといひ、なるほどそれも尤もなことだと思ふけれども。○今一きは——秋に比して今一段との意。ここは、「今一きはあはれも深く、心も浮き立つものは」の意として解かねばならぬ。○春のけしきにこそあめれ——春の景色であるとの意。「あめれ」は、「あるめれ」が音便で、「あんめれ」となり、古人は「ん」を省いて、「あめれ」と書いたので、實際よむときには「ん」をよんだものである。「めれ」は現在推量の助動詞。但し、意味は「なり」と

く新しく感ぜられて、自然と戀しく思ひ出されるものである。山吹のいかにも綺麗なさました姿や、藤の花のぼうとしてたよりないやうな有様をしてゐるのなど、春の景物は何から何までも、心の中からすつかり忘れ去ることの出来ないものが多

いふべきを婉曲にいつたものである。○この外に春めきて——格別に春らしくなつて。○のどやかなる日影に——「のどやか」は「のどか」に同じ。物靜かにゆつたりとしたこと。「日影」は、日の光りそのものをいふ。日の光りによりて生ずる陰影ではない。「に」は、「によりて」の意。○垣根——垣が地中に深く入つてゐるといふ思想から「垣根」といひ、上の方に高く出てるとの思想から、「垣ほ」といふ。要するに單に垣といふこと。岩を「岩根」「岩ほ」といふも同じ。○もえ出づる——萌え出づ。芽を出すこと。「萌ゆ」は、草木の勢よく芽を出すにいふ。○やゝ春深く——「やゝ」は、やう／＼の意。「春深く」は、春のたけること。即ち春になつて、だん／＼日數が経つたことをいふ。この「深く」は、春が深くといふのと、深く霞みわたると、兩方にかかつてゐる。○霞みわたると——ずうつと霞がかかつて。「わたる」は、空間的にも時間的にも、凡て一方から一方へづうつと連続してゐることをさす。○花もやう／＼けしきだつほどこそあれ——「けしきだつ」は、様子があらはれてくる。ここでは櫻花が咲きさうになつてくる。「ほど」は頃の意。「ほどこそあれ」は、「折しもあれ」「時こそあれや」などと同じく、單に、「頃」「時」の意で、ここではすぐ下の「折しも」につづくので、「時も時、恰度その時」の意になる。「ほどこそよくあれ」と解くのはよくない。○折しも——恰度その時。折も折。「し」は強意の助詞。「も」は感動の助詞。○心あわただしく散りすぎぬ——「心あわただしく」は、「しづ／＼ころなく」と同意。花を擬人したもので、花自身が散るのにいかにも、心忙しげに落着かないで散つてしまふことで、見る人の心持を言つたものでない。「散りすぎぬ」は、散つてしまふといふことで、散り過ぎてしまつたと過去の意でない。○青葉になりゆくまで——



花橋

花の散つたあとが青い若葉になつてゆくまで、即ち晩春に至るまでの意。「垣根の草もえ出づるより……青葉になりゆくまで」で、春の季節全體をあらはしてゐる。○よろづにただ心をのみぞなやます——何や彼につけて、人がひたすら氣苦勞ばかりする意。ここは花が人の心をなやますのでない。つまり花が咲くまでは早く咲くのを待ち、さて咲いてしまふと雨や風の心配をなし、かくして春はひたすら花のために、心を悩ますといふのである。古今集春歌に在原業平の歌として、「世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし」とあるのは、この意を極端に表現したものである。○花橋は名にこそおへれ——「花橋」は、花を特に賞美する上から橋を呼ぶ名で、花の咲いてゐる橋をいふ。この橋は蜜柑の一種には相違ないが、食用に供する美味なものではなくして、觀賞用のものであつたらしい。大日本百科辭典に、「花は緑色の萼、白色の五花瓣、多数の雄蕊及び一體の雌蕊を有し、花梗を具ふ云々。果實は黄色、扁球狀の漿果にして、酸味と苦味とを帶ぶ。觀賞用として栽培す。紫宸殿の庭前に在る右近橋は此種なり」といふのが、この橋のことであらう。大體、ミカン、タチバナ、カウジを概括して橋といふが、同じく橋と言つても、その中には蜜柑などの如くに果實が賞美されるものもあるが、中には右近の橋の如きは、花を賞美するもので、果實は食用とされず、この種の橋は、果實を子供がおもちゃにしたものであつた。さてこの橋の花の香は、人に懷舊の情を起させる有名なものとされてゐる。「名にこそおへれ」は、名に負ふ。名にしおふともいひて、さういふ名を持つてゐる。そのやうな名で人に知られてゐる。その名で世に有名である。非常に名高いの意。ここは下文の「いにしへの事もたちかへり云々」の句によつて、懷舊の情を起させるといふ點で世に知られてゐるがの

意。さてこの橋の花の香が、人に懷舊の情を起させるものとされてゐたことは、伊勢物語五十九段及び、古今集夏部に、「五月まつ花橋の香をかば昔の人の袖の香ぞする」の歌や、後拾遺集夏部に、「昔をば花橋のなかりせば何につけてか思ひ出でまし」などとあるのによつて知られる。○なほ梅のほひにぞ——何といつても、やはり梅の香によつて。○いにしへの事もたちかへり戀しう云々——梅の香をかぐことによつて、過ぎし日のこと共に立ちもどつて、懐しくなり、その懷舊の情がいかに新しく、恰もその當時のやうな氣がするの意。「いにしへ」は、古き時代といふよりは過去の意。「立ちかへり」は、もとは立ちもどつての意。即ち念頭に再び浮ぶこと。「戀しう思ひいでらるる」の「らるる」は、自然可能の助動詞の連體形である。さて花橋ならぬ梅の香に昔偲ばれるといふことは、源氏物語早蕨の巻に、「御前近き紅梅の色も香もなつかしきに、鶯だに見過し難げに、うち鳴きて渡るめれば、まして春や昔のと、心を惑はし給ふどちの御物語に、折あはれなりかし。風のさと吹きいるるに、花の香も客人の御匂も、橋ならねど昔思ひ出でらるるつまなり」や、新古今集、家隆の「梅が香に昔をとへば春の月答へぬ影ぞ袖にうつれる」とあるのや、伊勢物語四段に、「又の年のむ月に、梅の花ざかりに、こぞを思ひ出でてかの西の對にいきて、たちて見、みて見、見れど去年に似るべくもあらず、うち泣きて、あばらなる板敷に、月のかたぶくまで臥せりて、こぞを戀ひてよめる。月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして」とあるのがそれである。兼好のここの文章は、源氏物語や伊勢物語及び、「五月まつ」の歌をもととして書いたものであらう。同時に橋の香に昔を偲ぶことは實感よりは、もう知識となつてゐたと見るべきである。○山吹のきよげに——山吹の美しいさましたる

と續く中止法。「きよげに」は綺麗な意にして、この「に」は、「きよげなり」の「なり」の中止法。○藤のおぼつかなきさましたる——山吹が黄金色の目もさめるやうなのに對し、藤は晩春のボカ／＼した空氣の中に、薄おぼろにぼうとしたさまをしてゐるのをさすとする解釋と、今一つは藤は多くの花が一團の房となり、それが上からぶらりと下り、少しの風にでもぶらり／＼とゆつれて、今にも落ちさうになる、その不安さうに見えるさまをおぼつかなしといつたので、「おぼつかなし」は、「心もとなし」の意であるとの解釋と二つになる。この後の解釋では、「さま」の語から考へると、色でなく形であるといふのである。前説ではこの「おぼつかなし」は、はつきりとせぬぼんやりとした色」をさすことになる。さて和泉式部の「見てもなほおぼつかなきは春の夜の霞のうちに咲ける藤浪」の歌なども同じことで、この意味は、前二説の何れの解釋でもなくして、作者兼好が、藤の花を見たる端的の實感そのものであつて、色をも形をも概括した全體より得たあぶなかしいぼんやりとしたさまをさすものである。「さましたる」の下に、「など」の語が略されてゐる。○すべて思ひすてがたきことおほし——「すべて」は、早春より晩春に至るまでの、何から何までものすべてを總括してさす。「思ひすてがたき」は、心の中からすつかり忘れてしまはれないことが多い。

口譯 佛生會や賀茂祭の頃で(即ち初夏の頃で)、若い新緑の葉の枝

灌佛の比、祭の比、若葉の梢涼しげに茂りゆく程こそ、世のあはれも人の戀しさもまさされと、人のおほせられしこそ、げにさるものなれ。五月、あ

の見るも涼しさうに繁つてゆくその時節こそ、世の中のしみ／＼と寂しく感ぜられることも、ひいては人を戀しく思ふ心も、一段とまさるものだと或人が仰せられたが、まことにその通りである。又五月になつて、軒端に菖蒲をさす端午の節句の頃や、早苗を苗代に移す頃となつて、水鶏が家の戸を叩くやうに鳴くのを聞く如きは、どうして心細い感じを起さずにゐられよう、それはとてもさういふ

やめふく比、早苗とる比、水雞のたたくなど、心ぼそからぬかは。六月の比、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。

語釋 ○灌佛——灌佛會の略稱。四月八日、釋迦誕生の日を記念して行はれる法會。釋迦如來が俱毘羅城で生まれた時、天より龍が下り、香水(甘露)を降らして釋迦に浴びせたといふ傳説から起つて、朝廷でも、貴族、武家、寺院等に佛誕生の像に水(後生は甘茶を煎じて)を漉ぎかけて供養された法會をいふ。「比」はその日の前後を含ませてゐる。○祭の比——祭は京都賀茂神社の祭禮をいふ。昔は四月第二の酉の日に行はれたが、今日は五月十五日行はれる。この祭禮は欽明天皇の御代より始まる。賀茂神社は兩社に分れ、下鴨は賀茂御祖神社といひ、賀茂別雷命の御母玉依姫、及びその外祖父賀茂建角見命を祀り、上賀茂の方は、賀茂別雷神社といひ、賀茂別雷命を祀る。共に官幣大社で祭禮は同日に行はれる。この祭の日にはすべて物に葵を飾るので、葵祭ともいふ。この祭禮は最も盛大なものであつたので、單に祭といへば、賀茂神社の葵祭をさすことになつてゐる。恰も、川といへば鴨川、山といへば比叡山、花といへば櫻花をさすが如し。○茂りゆく程——「程」は頃の意。○世のあはれも人の戀しさもまされ——この「あはれ」は、晩春から初夏にかけて美しい青葉の景に接し、溫暖な氣候に浴して、心も身もゆつたりとゆるみ、靜かなのびやかな氣持になつて、心が少しゆるみ勝ちになつた時に感ずる、物なつかしい

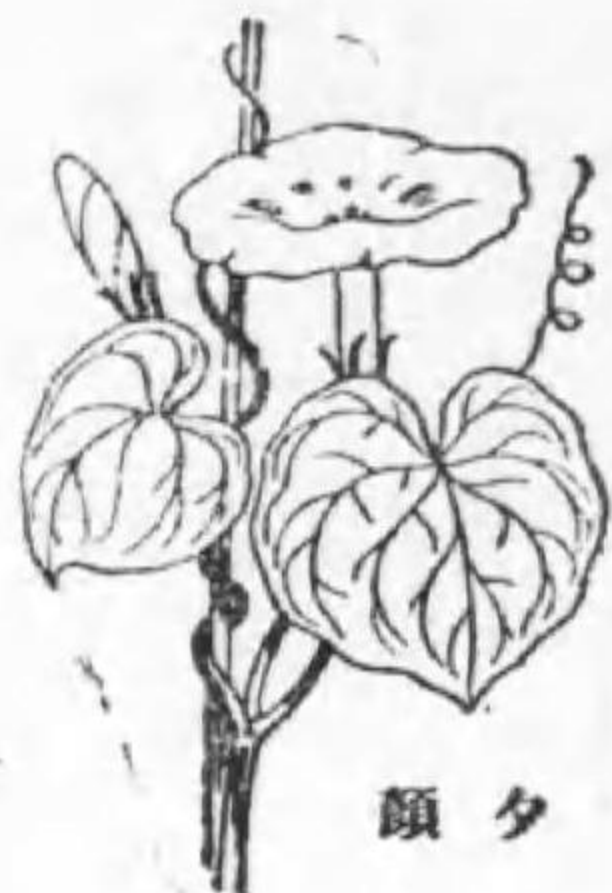
わけにはゆかず、心細い感じに打たれる。六月の頃、見るかげもないやうなみすばらしい家に、夕顔の花が白く咲いてゐるのが見え

水雞



て、蚊やり火をけぶらしてゐるのも、しみじみとした閑寂な趣がある。六月晦日の大赦も面白い。

淋しき、人なつかしい悲しきを感じる。その心持をさしてゐる。櫻の花も散つてしまつてからは、人も訪ねてくるのも少くなり、ために何彼と物淋しくなり、さうした淋しさのために、人を戀しく思ふ情も一層まさつてくるの意。文段抄の「花に見し梢のかはりゆきて、其花のたよりにとひ來し人もとづれぬより、盛者必滅の理りも思ひしられ、人も戀しきとの心也。古今に躬恒、我宿の花見がてらにくるひとはちりなん後や戀しからまし」とある説よろし。○げにさるものなれ——實際そのやうなものである。まことにその通りである。○五月あやめふく比——「五月」は、「あやめふく比」と、「早苗とる比」の雙方にかかり、「心ぼそからぬかは」に續く文脈となつてゐる。「あやめ」は、菖蒲のこと。五月五日の節句に、邪氣を除く意味で家々の軒に菖蒲を挿した。これを「葺く」といつたのである。今日も地方によく行はれてゐる。○早苗とる比——田植の頃、苗代（ナハシロ）から稲の苗をとつて、田に移植する頃。「早苗」（サナヘ）は、「早蕨」（サワラビ）などの早（サ）と同じく接頭語で意味なし。早期の苗や蕨の意でない。○水鶏のたたく——水鶏（クヒナ）はその鳴聲が、恰度人が家の戸を叩くやうに聞えるといふので、この鳥に限つて鳴くと言はずに、「たたく」といふ。拾遺集戀部に、「たたくとて宿の妻戸をあけたれば人もこずゑの水鶏なりけり」詞花集源雅光の「夜もすがら叩く水鶏かなきせりともなき柴のかりやを」、金葉集顯綱の「朝ごといたたく水鶏の音すなり心のとまる宿やなからん」などある。尤も「たたく」といはずに「鳴く」といつたのもある。風雅集夏部に、「水鶏なく森一むらは木ぐらくて月に晴れたる野べのをちかた」の如し。水鶏は、初夏に來て秋に去る候鳥で、水田の稻の中、沼澤の雜草の中などの茂みのうちに隠れて夏を過す。鳴聲は詩歌や文章に有名であり、コン、



夕顔

コン、コン、……と連続して、次第に速くなつて消える。地方によつてはこの鳥のことを、鉦叩きともいひ、東北地方ではカンカン鳥といつてゐる。「水鶏」と書くのも、終夜、且に至るまで鳴いて、人家の戸を「叩く」やうな聲を出すためである。水田の多い田舎の夜、この聲を聞く頃、夏の哀愁の迫るのを感じる。○心ぼそからぬかは——心細くなからうか心細いの意。○あやしき家——みすばらしい家。粗末な家。源氏物語夕顔の巻に、「かの白く咲けるなむ夕顔と申し侍る。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ咲き侍りける」の文句によつて書いたものであらう。○夕顔——葫蘆科の一年生蔓草。全株に粗毛を有す。葉は掌狀淺裂、卷鬚を有す。夏の夜、五淺裂した白花を開き、細長い果實を生ずる。四、五の品種があつて、或は干瓢（カンペウ）を製し、又果肉を除いて容器とする。夕に花が開いて、朝に萎むからこの名がある。○蚊遣火ふすぶる——蚊いぶしをする。「ふすぶ」は、「くすべる」意で、他動詞であるから、蚊やり火を焚いてけぶらすこと。蚊遣火がけぶることでない。○あはれなり——情趣が深い。ここは靜かな淋しい情趣をいつてゐる。○六月赦——六月晦日に行ふ大赦（オホハラヒ）の事。名越赦（ナゴシハラヒ）ともいふ。中古、六月と十二月との晦日に宮城朱雀門に百官以下、天下萬民の罪穢を解除する儀。天武天皇のときより始まる。田舎にあつては水邊に出て麻木綿つけし五十籤（イゲシ）を立てて行ふ。半歳の罪やけがれを除き去るのである。神代に伊弉諾尊、筑紫の橘小門（タチバナノヲト）にて、黄泉國の穢を拂ひなさつた故事に起源す。

七夕まつるこそ、なまめかしけれ。やうく夜寒になるほど、雁なきて來

祭をするのは、まことに優雅なものである。その頃になると夜がだん／＼冷気を催してくる。すると雁が鳴いてくる頃であり、萩の下葉が黄葉し始める頃である。その頃になると又、早稲の田の稻を刈り取って乾燥する。かく種々様々な情景がとりあつめられてゐる事は、秋は殊に多い。又野分の暴風が吹いた翌朝は實に面白いものである。斯ういふやうな四季の景物について、一々言ひつづけてゆく

るころ、萩の下葉色づくほど、わさ田かりほすなど、とりあつめたる事は秋のみぞおほかる。又野分のあしたこそ、をかしけれ。いひつづければ、みな源氏物語、枕草子などに、ことふりにたれど、おなじ事、又今さらにいはじともあらず。おぼしき事はぬは、腹ふくるるわざなれば、筆にまかせつつ、あぢきなきさすびにて、かいやりすつべき物なれば、人の見るべきにもあらず。

語釋 ○七夕——「タナバタ」とよむ。七月七日の夜、牽牛（男星）、織女（女星）といふ夫婦の星が天の川（銀河）で相逢ふを祝福する祭。織女星は天帝の娘で、天の川の東で、年中、雲の錦の機（ハタ）を織つて日を暮し、折角の美貌も繕ふ暇がなかつた。父の天帝はその獨り住みを慰み、天の川の西に住む牽牛星に嫁せしめた。織女星は結婚後、機を織ることを廢し、歡を食つて歸らなかつたから、天帝は怒つて二人の仲を割き、織女星を川の東に歸らしめて機を織らせ、一年に一度、七月七日の夜だけ天の川の邊で相逢ふことを許した。この時、鵲（カササギ）が天の川原に来て、翼をのべて織女を渡す。かうした二星の戀を祝福した支那の風習が日本に傳來し、牽牛星を彦星（ヒコボシ）、織女星を棚機津女（タナバタツメ）と改めて、年中行事の一つとなつた。その棚機津女の名から「七夕」を（タナバタ）とよみならはしてゐる。この日は特に女がこれを祭つて技藝の上達を願ふ所から、「乞巧奠」（キツカウデン）ともいふ。六日に硯、机等を洗

と、是等の事は何れも全部、源氏物語や枕草子などに、もう既に言ひふるくされてゐることであるが、それ等と同じことを、今又新しくいつて悪いといふ事もあるまい。心の中に思つてゐる事を言はないのは、腹がふくれるやうな不快なことであるから、思ひきつて筆の運び動くのにまかせて、ここに書きつづけたくだらない慰め書きで、もとよりこれは破り捨ててしまふものであるから、他人の見る

ひ清め、七日の早朝、草や芋の葉に置いた露を取つて硯水となし、色紙、短冊、梶の葉などに歌を書き、竹につけて庭に立てる。又裁縫手藝の上達を祈るため、願の糸と稱して、五色の糸を竿頭に掛けて手向ける。そしてこの夜、月の明りに針の穴に糸を通せば織物が上達するといふ。公事根源には、「まづ七日になれば、藏人御調度を拂ひ拭ふ。夜に入つて乞巧奠あり。御殿の庭に机四脚を立てて燈臺九本おの／＼燈あり。机の上にいる／＼の物すゑたり。箏の琴、ことぢを立てて是を置く。机の上、火取に夜もすがら空だきものあり。たらひに水を入れて、大空の星をうつす。ことぢに三つの様あり。常は盤涉調、半呂半律、秋の調なり。是は祕事にて侍る。故に知る人なし。觸穢の時も猶行はる。天平勝寶七年より始まる」とある。晋の周處の風土記に、「七月七日。其夜灑拂於庭露。施几筵。設酒脯時果。散香粉於河鼓（牽牛）織女。」と。荊楚歲事記に、「是夕人家婦女結綵縷。穿七孔鍼。或以金銀鑰石爲鍼。陳瓜果於庭中。以乞巧。」と。述異記に云く。「天河之東有美麗女人。乃天帝之女也。年々勞役織雲霧綉之衣。辛苦殊無歡悅。容貌不暇整理。天帝憐其獨處。與河西牽牛之夫婚。自後竟廢織綉之巧。貪歡不歸。帝怒責歸河東。但使一年一度與牽牛相會云々」と。○なまめかし——優美とか優雅といふこと。うら若き女性たちの美しく飾りたてる祭りであり、かつ二星の戀を祝福するのであるから、その意味に於て優美だといふのである。○やう／＼夜寒になるほど——だん／＼と夜になると寒さを感じる頃。秋がだん／＼と更けるにつれて、日中は暑さも烈しいが、夜になるとひえ／＼とする頃である。○萩の下葉色づくほど——「下葉」は、下の方にある葉。「色づく」は、葉が枯れて黄色くなるをいふ。草木は下方の葉から枯れてゆくのが普通であるから。古今集秋の歌に、

善のものでない。故に
今書いたことが古人の
言つたのと重複しよう
が、しまいがそんなこ
とには構はない。

補 「野分のあしたこ
そをかしけれ」の「を
かしけれ」は、正徹本、
傳幽齋本には「おもし
るけれ」とある。

「夜を寒みころもかりがね鳴くなべに萩の下葉もうつろひにけり」とある。○わさ田かりほす—
「わさ田」は、早稻(ワセ)を作つてある田圃。「わさ」は、早稻(ワセ)のこと。「かりほ
す」は、刈りとつた早稻を乾すこと。○とりあつめたる事は云々—「とりあつめたる事」とは、
種々様々の情景がとりあつめられてある事はの意。それは人爲的に取集めることでない。「秋の
みぞおほかる」の「のみ」は、ただ強く言つただけで、秋は特に多いの意。源氏物語夕顔の巻に、
「白妙の衣うつきぬたの音もかすかにこなたかなたに聞きわたされ、空とぶ雁の聲、とりあつめ
て、しのびがたきこと多かり云々」と。○野分の吹いたその翌朝。「野分」は、今
の曆の九月初旬から中旬かけて吹く二十日から、二十二十日頃の暴風を言ふ。普通の解釋や辭
書などに、秋冬の頃吹く暴風とか、晩秋の暴風といふ解をしてゐるのは誤つてゐる。佐野保太郎
氏の説の如く、二十日前後の暴風である。源氏物語野分の巻に、「八月は故宮の御忌月なれば、
こころもとなくおぼしつ明け暮るるに、その花(萩の花をさす)の色まさるけしきどもを御覽
ずるに、野分例の年よりもおどろしく、空の色變りて吹出づ。花どものしをるるを、いとさ
しも思ひしまぬ人だに、あなわりなと思ひさわがるるを云々」と。枕草子に、「立部、透垣など
の伏しなみたるに、前裁ども心苦しげなり。大きな木ども倒れ、枝など吹折られたるに惜し
きに、萩、女郎などのうへによるぼひ遣伏せる、いと思はずなり」などあつて、まだ萩や女郎花
などの咲いてゐる頃であることから考へても、秋冬や晩秋の暴風とする解は誤つてゐる。○いひ
つづくれば—かく春、夏、秋、の景物の面白いことをいろ／＼と一一いひあげること。○みな
源氏物語枕草子などにことふりにたれど—それ等の事は、皆もう既に源氏物語や枕草子などに

書かれてあり、陳腐な言になつてしまつてゐるがの意。「ことふり」は、「言古り」の意で、言ひ
古されてゐるがの意とするよし。一説に、「事古り」で、古臭い。陳腐である意とするものもある。
これは源氏物語の野分の巻や、幻の巻に四季の詞があり、枕草子の發端に四季の景を叙してゐる
のなどをさす。○おなじ事今さらにはじとはあらず—源氏物語や枕草子に書いてあるのと
同一のことを、今又新しく言つて悪いといふこともあるまいとの意。「同じ事」とは、源氏物語
や枕草子などに書かれてゐると同一の事をさす。「また今さらに」とは、今又事新しくの意。
○おぼしき事はぬは腹ふくるわざ—心に思つてゐることを言はないで置くことは何か腹に
滞つて、腹がふくれ氣持の悪いこと。「おぼしき事」は、胸中に考へ思ふことをさす。「腹ふくる
る」は、何か腹に滞つて氣持の悪いこと。「わざ」はこの意。ここは大鏡の序に、「おぼしき事
いはぬは、げにぞ腹ふくる心地しける。かかればこそ昔の人はものはまほしくなれば、穴を
掘りてはいひ入れ侍りけめと覺え侍る」とある。又、和訓栞に、「兼好が思ふ事をいはぬは腹膨る
ると言へるは、東坡が忍事腹如囊といへるこれ也」とある。○筆にまかせつ—筆の動くの
にまかせての意。筆の運ぶのにまかせて書いたもので。この文章は「筆にまかせつ書きたる
あぢきなきすさびにて云々」とつづくものである。○あぢきなきすさび—くだらないなぐさめ
書き。つまらない筆のなぐさめ。「あぢきなき」とは、とりとめもない。つまらない。何でもな
いの義。「すさび」は慰めごと。遊びごとの意。すさびは、すすみ(進み)の義で、手や口や心
の自然にその方に進むに任せてする慰めをいふ。○かいやりすつ—「かい」は、かきの音便、
漢字「搔」をあてる接頭語である。「やり」は、破りの意。破り棄ててしまふこと。○人の見る

べきにもあらず——人が見る筈のものでない。「人の」は、人がの意。作者兼好のもとの意は、「人に見すべきものにあらず」との意をかく書いたものである。どうせつれづれの慰めに思ふままを書きつづるのであるから、他人に見せる筈のものでない。故に今書くことが古人の言つたことと重複しようが、しまいがそんなことは構はないといふのである。

さて冬枯のけしきこそ、秋にはをさく劣るまじけれ。汀の草に紅葉のちりとどまりて、霜いとしろうおけるあした、やり水より煙のたつこそをかしけれ。年の暮れはてて、人ごとに急ぎあへる比ぞ、またなくあはれなる。すさまじき物にして、見る人もなき月の寒けく澄める二十日あまりの空こそ、心ぼそき物なれ。御佛名、荷前の使たつなどぞ、あはれにやんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎにとりかさねてもよほし行はるるさまぞいみじきや。追儼より四方拜につづくこそおもしろけれ。

語釋 ○さて——接続詞で、上文を受けて下の文につづけるときに用ゐる語。ここでは前段に於て、「あぢきなきすさびにて、かいやりすつべき物なれば、人の見るべきにもあらず」と書いて、筆をとどめたので、今又新しく冬の景物を書くにあたり、「さて」といつて、新しく文を書き起

口譯 さて冬枯の景色こそ、秋に比べるに殆ど劣らないであらう。庭の池などの水際の草に紅葉の落葉が散り止まつてゐて、霜が大層白く置いてゐる朝、庭を流してある小川から煙の立つてゐるのは趣がある。年もすつかり年末頃に近づいて、誰も彼も皆お互ひに急ぎ合つて忙しくしてゐる

頃こそ、比類なく感慨無量なものである。又昔から時節はづれで面



追 儼

すのである。○冬枯——冬の季節となつて、草木の葉が落葉し、枯木のやうな淋しい景色をいふ。○をさく劣るまじけれ——冬の景趣は、殆ど秋に劣らないだらうの意。「をさく」は、殆どの意にて、下に必ず打消の語がくる。○汀——「ミギハ」とよむ。水際（ミズギハ）のこと。庭にある池の水際をさしてゐる。○紅葉のちりとどまりて——散つた紅葉の葉が、草の上につきかかつて居るさま。○あした——ここは朝の意。○やり水より煙のたつこそ——「やり水」は、「遣水」と書く。庭の中へ堰入れた細い流。寢殿造りの庭には必ず人工的小川を流してゐた。これが即ち遣水である。民家では寛が即ち遣水なのである。「煙」は、ケブリとよむ。流れから立ち上る水蒸気が寒気のために冷却して、白い煙のやうに見えるのである。○年の暮れはてて——年末頃となつて。必ずしも大晦日とするに及ばない。○人ごとに急ぎあへる——世間の人々が、誰も彼も皆、忙しさうにしてゐるさま。「人ごとに」は、誰も彼もの意。「急ぎあふ」は、誰も彼も皆急いで居ることをいふ。○またなくあはれなれ——「またなく」は、他に類例がなく。この上なく。「あはれ」は情趣深い意でなく、感慨無量のこと。面白味のないこと。元來この語は、時違ひとか、場所違ひなどして面白味のないことにいふ。即ち、月は秋がよい。春のおぼる月もよい。夏の夜の涼しい月もよい。而して冬の月は眺めてゐるには、あまりに時節違ひで興がないといふのである。この句は源氏物語總角の巻に、「雪のかきくらし降る日、ひねもすにながめくらしして、世の人のすさまじきことにいふなる十二月の月夜の曇なくさし出でたるを、簾まきあげて見給へば云々」狭衣二に、「げにすさまじ

面白くないものとして、見る人もない冬の月が、寒さうに澄んで

ゐる二十日過ぎの月の空は、まことに心細い感じがする。御佛名の式があるとか、荷前の勅使が立つとかのことがある。かういふことも亦感深いものであり、又尊いものである。この他、十二月にはいる／＼の公事どもが、新春の準備があるのに取り重ねて、一どきに頻繁に催し行はれるさまは、まことにたいしたものである。追儼の式からすぐ四方拜の儀につづいて行はれるのは面白いものである。

きものいひおきたるしはすの月も見る人がらにや云々、中務内侍日記の、「すまじきものと
かやいひふるすしはすの月夜なれど」とあるので、兼好の當時よく言ひ馴らされた語であつたの
であらう。○寒けく澄める二十日あまりの空——二十日過ぎの月が、寒さうに澄んで居る空。二
十日過ぎといへば、月も餘程かけて細くなつてゐるし、その月の出るのも、夜おそくなるので、
一層心細い寂しさを感じるのである。○御佛名——「佛名會」(ブツミヤウエ)ともいふ。朝廷に
て行はれる法會の一。三世の諸佛の名號を唱へて罪障を懺悔する。毎年十二月十五日より十七日
まで三夜行ふ。後には十九日より三夜となり、終に一夜となつた。此の儀式は初めは清涼殿にて
行はれたが、後には弘徽殿、常寧殿等にも行はれた。詳しくは公事根源に見ゆ。○荷前の使た
毎年佛名三ヶ日の間は、諸國にて殺生禁斷が行はれた。詳しくは公事根源に見ゆ。○荷前の使た
つ——荷前は、必ず「ノザキ」とよむ。年の暮に諸國から奉つた貢物の初穂を朝廷より十陵八墓
にすすめ、幣帛を奉るために使をお出しになる、その使が出發するをいふ。使者は公卿又は殿上
人で、十二月十三日に拜任。そして吉日を選んで差遣せられる。定つてはゐなかつた。荷は貢物
の意。前(ザキ)は、初穂の意。十陵は御歴代の天皇の或る方、及び天皇の御生母の御陵。八墓
は外戚の御祖父母等のお墓で、その選定は各時代毎に異つてゐた。公事根源に詳しく出てゐる。
○あはれにやんごとなき——「あはれに」は、「あはれなり」の中止形。即ち、あはれでもあり、
やんごとなくもあるの意。「あはれ」は有難さ。一種の崇敬さをいふ。即ち一種の崇敬さを感じ、
又尊いことであるといふのである。○公事どもしげく——「公事」(クジ)は、朝廷で行はれる
儀式、その他の行事をいふ。「しげく」は、「公事ども」の説明語ではなくして、下の「もよほし

行はる」にかかる副詞的修飾語である。故に、「頻繁に」と譯さないで、「頻繁に」と譯す。○春
のいそぎにとりかさねて——「春のいそぎ」は、新春を迎へるための準備。この「いそぎ」は、
急いで爲す用意。前の「急ぎあへる」とは意味は少し異なる。「とりかさねて」は、その上に加へ
ての意。即ち十二月にはいる／＼の行事があるのに、その上、正月の用意まであるのをいふ。○
いみじきや——たいしたものだ。大層なものだ。「や」は、「よ」と同じく詠歎の助詞。○追儼——
「ツキナ」とよむ。十二月晦日の夜に、宮中で年中行事として行はれる疫鬼を追ひ拂ふ儀式。
民間の所謂「鬼やらひ」であり、現今の節分の「豆まき」はその名残である。公事根源に曰く、
「今日(三十日)は儼やらふ夜なれば、大舍人寮鬼をつとめ、陰陽察祭文をもて、南殿の邊につ
きて讀む。上卿以下これを追ふ。殿上人ども御殿の方に立ちて、桃の弓、葦の矢して射る。仙華
門より入りて、東庭を経て、瀧口の戸に出づ。今宵御前に燈を多くともす。東庭、朝餉、豪盤所
の前の砌に、燈臺を隙なく立ててともすなり。追儼といふ事は、年中の疫氣を拂ふところなり。
鬼といふは方相氏の事なり。四目ありて、恐ろしげなる面(オモテ)をきて、楯、戈をもつ。又
俵子(ワラハ)とて、二十人紺の布衣着たるものを率して、内裏の四門をまはるなり。慶雲二年
十二月に始まる。此年天下百姓多く疫癘になやまされ侍りし故なり」と。但し、ここに方相氏を
鬼として追ふやうに書いてあるのは、誤にして、もとは方相氏及び俵子が鬼を追うたものである。
弘仁の内裏式に、「方相以戈擊楯。群臣相承和呼。以逐惡鬼。」とある。○四方拜——正月元旦
寅刻、(午前四時)に天皇清涼殿の東階にある前庭に出御まし／＼て、天地、四方、山陵を拜し、
年災を拂ひ、五穀の豊穰、寶祚の長久を祈り給ふ儀式。公事根源に云く、「清涼殿の東階の前、砌

の外に御屏風を立てめぐらし、その中に御座三所を設け、その前に白木の机を置いて、香花燈などを備へ、此所にして御拜の儀式あり。昔は殿上人の侍臣なども、四方拜をばしけるにや。近頃は内裏、仙洞、攝關、大臣家などの外はさる事もなきなり」と。○つづく——追儼は大晦日の深更に行はれ、それからすぐに四方拜は元旦の早朝に行はれるから、斯く言つたのである。

口譯 十二月大晦日の夜、月はなく、ひどく暗い闇の中を人々が松明(タイマツ)をあちらにもこちらにもともして、夜も深更になるまで、何事であるのか、仰々しくわめき立てて、足も地につかぬほどに、まご／＼と走り歩るさまわつてゐる人々が、夜明けがたからびつたりと止んで、や

つごもりの夜いたうくらきに、松どもともして、夜半すぐるまで、人の門たたき走りありきて、何事にかあらむ、こと／＼しくのしりて、足を空にまどふが、曉がたより、さすがに音なくなりぬること、年のなごりも心ぼそけれ。なき人のくる夜とて、たままつるわざは、此のごる都にはなきを、あづまのかたには、なほする事にてありしこそ、あはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、昨日にかはりたりとは見えねど、ひきかへめづらしきここちぞする。大路のさま、松たてわたして、はなやかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。

語釋 ○つごもり——「月隠」(ツキゴモリ)の略。毎月の最終日。所謂三十日であるが。ここは十二月の晦日、即ち「大晦日」(オホツゴモリ)で、東京の大三十日(オホミツカ)をいふ。又

はり元旦はしいんとして静かになつてしまふ。これが暮れゆく年との最後の別れかと思ふと、いかにも心細くしんみりと感ぜられる。死んだ故人の靈魂が来る晩といつて、亡者の靈魂を祀ることは、この頃では京都の町では行はれてゐないのに、東國地方では、今もなほ行はれてゐる事であつたのは、實に情趣を引くことであつた。斯うしていよく夜も明けてゆく元旦の空模様は、別に昨日の

時には二十五日以後を「つごもり」といふこともある。○いたうくらきに——ひどく暗い闇である中を。○松どもともして——「松明」(タイマツ)をともしして。この「ども」は複數の意を示し、あちらにもこちらにも松明をともして歩いてゐるさま。○夜半すぐるまで——ここを夜中すぎと解する説もするが、一説に夜半の「は」は、ただ添へ言葉で、「半」の字も當字(アテジ)で、意味はない。故に夜半とは、單に夜といふことである。されば、「夜半すぐるまで」とは、深更まで。夜遅くまでの意となる。○人の門たたき——戸をしめてゐる人の家に行きて、門をたたいて、戸を開けさせるさまをいふ。○こと／＼しく——仰山らしく。たいさうらしく。○のしりて——大きな聲で騒しくいふこと。罵詈する義でない。句解に、「是皆今の俗に十二月晦日にかけこふとて人々のありくをいふと見えたり」とあるやうに、借金取などのさまを書いたものと思はれる。○足を空にまどふが——足も地につかぬ程に大いそぎで、そこらぢゆうを、まご／＼と走り廻るさま。「足を空に」は、足が地につかぬといふことで、非常に急いで歩くさまをいふ。「まどふ」は普通には、迷ふとか、まごつく意に使ふが、ここはあちらこちらと忙しく走り廻つてゐるさまをあらはしたものである。「まどふが」のがは主格を示す助詞で、「まどふ者」の意。○さすがに——さうはいふもののはり。何といつてもやはり。○年のなごりも心細けれ——「なごり」は、別れる最後の意。この語はもと、餘波といふことがその原義であつたのが、轉じて、別れを惜む心。別れ。最後の意となつた。ここは新古今集雜歌の「馴れ／＼て見しはなごりの春ぞともなどしら川の花の下陰」のなごりと同じく、別れる最後をいふ。なほその意の中に、名残を惜む心持もいくらか籠つてゐる。○なき人のくる夜とて——死んだ人の靈魂が歸つてくる晩だ

大晦日の空とは變つたとは見えないが、何だか打つて變つて珍しいやうな心持がする。都大路の様子は、どの家も〳〵門松を立てつらねて、いかにも美しく陽氣に嬉しさうであるのは、これがまた實に面白いことである。

補 「つごもりの夜」は、正徹本、傳幽齋本「つごもりの夜は」とある。又、「夜半」は同じく右二本には、「夜なか」となり、「さすがに」は右二本「さすが」となつてゐる。

といふので。○たままつるわざ——死者の靈魂を祭ること。所謂魂祭(タママツリ)をいふ。古くは七月十五日と、十二月晦日との二回に行つたものであるが、後は七月のみ行はれることになつた。日本書紀齊明天皇三年七月に、「作_レ須彌山像於飛鳥寺西。且設_レ孟蘭盆會。」とあるのが古く同紀五年七月庚寅十五日に、「詔_レ群臣。於_レ京内諸寺。勸_レ講孟蘭盆經。使_レ報_レ七世父母。」と。又十二月に行はれたことは、平安朝によく見える。後撰集哀傷部に兼輔の、「妻のみまかりての年のしはすつごもりの日ふることいひ侍りけるに、亡き人の共にしかへる年ならば暮れゆく今日は嬉しからまし。同じく貫之のかへし、「こふる間に年のくれなば亡き人の別れやいとど遠くなりなむ」と。後拾遺集哀傷の和泉式部の、「十二月のつごもりの夜よみ侍りける、亡き人のくる夜ときけば君もなし我が住む宿や魂無きの里。」詞花集冬に曾根好忠の、「魂祭る年の終になりにけり今日にやまたもあはむとすらむ」などある。○此の比、都にはなきを云々——「此の比」は、作者兼好の時代をさす。その頃は京都にはもう十二月晦日に魂祭をすることはなくなつたが、東國地方にはまだ昔の魂祭(十二月の)の風俗が残されて、なほ行はれてゐたのが、しみ〳〵と心に感じた。この「ありしこそあはれなりしか」と、過去の助動詞が使はれてゐるのは、文脈として一寸おだやかでないが、思ふにこれは嘗て兼好が東國に行つた時、見た事か聞いた事を思ひ出して、その感じを新によび起して不用意にかく書いたものであらう。ここだけが過去になつて、すぐ「かくて」とつづけたのは随分をかきな書き方になつてゐる。○ひきかへ——昨日(大晦日)とは打つて變つて。○大路のさま——都の大通りの有様。○松たてわたして——この松は、門松のこと。「たてわたす」とは、どの家も、どの家も、ずうつと門松を立てつづけてゐること。○

はなやかに——美しく陽氣に、にぎやかなる有様。○あはれなれ——面白きことである。

第二十段

なにがしとかやいひし世すて人の、「この世のほだしもたらぬ身に、ただ空のなごりのみぞをしき」といひしこそ、誠にさもおぼえぬべけれ。

口譯 何の某とやら言つた世捨人(僧侶)が、「この俗世間の束縛(妻子眷族、官職財寶など)は何も持つてゐない身に、ただ四季の移り變つて行く自然界の風物情景の別れだけが惜まれて心を悩ます。」と言つたのは、なるほど如何にもそのやうに思はれることだらう、同感である。

第二十段

語釋 ○なにがしとかやいひし世すて人——なにがし(某)は、何人をさすか穿鑿する必要もないが、兼好自身を他人のやうに言ひなしたものともし、又、方丈記の、「一期のたのしみはうたたねの枕の上にはきはまり、生涯の望は折々の美景に残れり」を引用して、鴨長明だともいふ。整齊抄の如きはさうである。世すて人は、俗世間との關係を絶つて、隱遁生活をしてゐる人。わが國の「世捨人」は、すべて俗世間から去ると共に佛門に入つたもの、即ち僧侶である。「なにがしとかや」のかやは、某人とかまあの義。かは疑問の助詞。やは感動詞。斷定するを避けた言ひかたである。○この世のほだし——「ほだし」とは、身を拘束するもの、即ち妻子眷族、官職財寶の類をいふ。「ほだし」は、羈とも絆とも書き、身の自由を妨げるもの、手足まとひである。所謂世事、社會關係、係累をさす。○もたらぬ——「もちてあらぬ」の約。持つてゐない。○空の名残——春夏秋冬四季の景色との別れること。空は、廣く自然界の風物現象をいふ。なごりは「別れ」の意。四季の景色風物の變化につれて、花鳥風月の趣も次第に移り變つてみくのを惜別

する情をさす。○さもおぼえぬべけれ——成程そのやうに感ずることであらう。「ぬべけれ」は
推量の意を強めていふ形である。

第二十一段

よろづの事は月見るにこそ慰む物なれ。ある人の「月ばかりおもしろき物
はあらじ」といひしに、又ひとり、「露こそあはれなれ」とあらそひしこそ
をかしけれ。折をりにふれば、何かはあはれならざらむ。月花つきはなは更なり。風の
みこそ人に心はつくめれ。岩にくだけて清く流るる水のけしきこそ、時を
もわかすめでたけれ。「沅湘げんしやう日夜東に流れ去る、愁人の爲にとどまること
しばらくもせず」といへる詩を見侍りしこそあはれなりしか。嵇康も「山
澤たくにあそびて魚鳥ぎよてうを見れば、心たのしぶ」といへり。人とほく水草みづぐさきよき
所にさまよひありきたるばかり、心なぐさむことはあらじ。

語釋 ○よろづの事——喜怒哀樂其他どんなことでも。○月見るにこそ——月を眺めることによ
つて。「に」は、「によつて」の意。○慰む物なれ——慰められるものである。感興が深められる

口譯 喜怒哀樂その他
すべて何事でも、きれ
いな月を眺め見ること
によつて、感興が湧い
て氣が晴れるものであ
る。ところが或人が、
「月ほど感興の面白い
ものはあるまい」とい
つた所が、又他の或人
が、「いや、露が一番し
み／＼とした感興が深
い」と争論したのは實
に面白い。月といはず、

露といはず、その時そ
の場合にあれば、何
であつてもすべてしみ
／＼とした感興のない
ものはない。月や花は
言ふまでもないが、あ
の風は殊に人に深い情
感を興へて、感興を催
さすものである。又、
岩にくだけて清く流れ
る水の景色及び、それ
に伴ふ心境は、いつと
いふことなしに、まご
とによいものである。
「沅水、湘水の流れは、
晝夜の差別なく、東へ
／＼と流れ去つて行
き、深い悲しみに沈ん

ものだの意にして、悲しみが慰められるといふのは穩當でない。○月ほどおもしろき物はあらじ
——月ほど面白いものはあるまい。○露こそあはれなれ——月より露は感興の深いものである。
○あらそひしこそ——月と露と、どちらが感興があるかについて言ひ争つたこと。「あらそふ」は
争論したことで、喧嘩の意ではない。○折をりにふれば——何かの時か場合にあたると。○何かはあ
はれならざらむ——「かは」は反語。何かはあはれでなからう。すべては皆あはれであるの意。「あ
はれ」は、しみ／＼と感ずる感興をいふ。前の「おもしろき」や、「をかしけれ」などと共に同
義。○月花は更なり——「更なり」は、いふまでもないとか、勿論のことであるの意。月や花が
人の心を動かすのは勿論のことである。即ち「月花は人に心はつくめり」は勿論なことといふの
である。○風のみこそ人に心はつくめれ——「のみ」は、だけの意でなく、特にそれを心強くい
ふために言つたもので、殊に風こそその意。「人に心はつく」は、人に心を付けるやうだ。人の
心を動かすやうだ。つまり、人をしてしみ／＼と感ぜしめるやうだの意。心は心をばの意。即ち
「心は」は感動的の書き方で、「つく」は他動詞。「心はつく」は心をつくりに同じ。「心」は感興
的の心である。かかる語法は、拾玉集卷一に、「世の中を思ひも入らぬ人にさへ心をつくる秋の山
里。」新古今集秋に西行の「おしなべて物をおもはぬ人にさへ心をつくる秋の初風」などある。西
行の「おしなべて」は、文段抄に、「おほかたの」としてゐる。○水のけしき——單に客觀的の
溪流の風光、眺望ばかりをいつてゐるのでなく、それに對する主觀的心境をも含有せしめてゐる。
○時をもわかすめでたけれ——別にいつといふ時節の區別もなくいつてもよい。結構なものだの
意。即ち春がよいとか、秋がよいとかいふ區別がなく結構なよいものだ。「めでたけれ」は、よい

である者のために、少々位は同情して暫くは止まつてもよきそんなものだけに、暫くも止まることをせぬ」といふ詩の文句を見たことがあつたが、まことに感興の深いものであつた。嵇康も、「山や水邊に遊んで、魚や鳥を見ると心が樂む」といつてゐる。人里遠く離れた村里で、水や草の清い所に逍遙してゐたほど、心の慰められることはあるまい。

とか。結構だといふのである。○沅湘日夜東に流れ去る云々——三體詩卷一の唐の戴叔倫の「湘南即事」の詩に、「盧橋花開楓葉衰。出門何處望京師。沅湘日夜東流去。不爲愁人住少時」とあるのをここに引用したものである。この詩は戴叔倫が晉王に仕へて湘南に客寓するときの作。盧橋は花橋のこと、枇杷なりとする一説は非なり。詩意は、冬の初になりて、盧橋が花を開いたと思ふと、さて秋は過ぎて楓葉が衰へた。かく月日はおし移つて行けども、我はまた故郷には歸られぬものかな。さもあれ京師は何處のあたりかと門を出でて見れば、萬里の外にてどこのほどとさすべきやうもない。沅水湘水の河は、日夜とどまらず、京の方をさして東へ流れ去るぞ、愁人とは叔倫自らをいふ。是れほど我が心に、京を戀しく思ふに、いかなれば、流れはその思ひやりもなくして、我がために暫時もどまらずして、日夜さざめいて、京の方、東へ流れ去るや、あらうらめしの水の心や、あら恨めしの水の有様やとて、意を無情の水によせて、或は羨み、或は恨みし詩人の興である。沅湘は沅水、湘水といふ二つの河の名で共に洞庭湖に注ぐ。愁人は心に憂ひのある人。ここは京師を思つて憂ひに沈んでゐる戴叔倫をさす。○嵇康——字は叔夜。晉の人。老莊を好む。竹林七賢人の一人。竹林の七賢とは、阮籍、嵇康、山濤、劉伶、阮咸、向秀、王戎の七人。皆有爲の才能を抱きながら、出仕せず、竹林の中で酒を飲み、超世脱俗の風があつた。○山澤にあそびて魚鳥を見れば心たのしむ——「山澤」とは、山と澤との意で、山や水のほとりのこと。「たのしむ」は、樂むと同語。山濤が嵇康を官に推舉したとき、嵇康が山濤に絶交書を與へた。その書は、文選廿二（注四十三）に、與山巨源絶交書として、次の如き一節がある。「又聞道士遺言。餌木黃精。令人久壽。意甚信之。游山澤。觀魚鳥。心甚樂之。

補 「しばらくもせず」は、正徹本、傳爾齋本に、「しばらくもあらず」とある。沅湘日夜も、傳爾齋本には、「沅湘ひるよる」とある。

口譯 何事でも、古い時代の事はかりがなつかしい。當世風の事は、どうも甚だ下品になつてゆくやうである。かの某の家具師の作つた

一行作吏。此事便賤。安能舍其所樂。而從其所懼哉」といふので、これによつて兼好はこを書いたのである。○人とほく水草きよき所——「人とほく」は、人里から遠く離れた所。即ち俗界から遠く離れた所をさす。「水草」はミヅクサで、水や草のこと。ミヅクサとよむと、水中の草といふことになるが、ここはミヅクサとよみ、俗塵を離れて水もすみ、草も清く生えてゐる閑寂な地をさすものと思はれる。古今著聞集五に、「嵯峨天皇玄賓上人の徳をたふとび給ひて、僧都になし給ひけるを、玄賓位記を木の枝にさしはさみて、和歌をかきつけて失せにけり。外國は水草きよしことしげき天の下にはすまぬまされり」とあるのによつたものか。「外國」とは、畿内以外の諸國をいふ。○さまよひありきたる——さまよつて歩いてゐる、逍遙してゐる。「さまよひ」は、所定めずら／＼と歩くこと。逍遙にあたる。

第二十二段

何事も、ふるき世のみぞしたはしき。今やうは無下にいやしくこそなりゆくめれ。かの木の道のたくみの作れるうつくしきうつは物も、古代の姿こそをかしと見ゆれ。文のことばなどぞ、昔の反古どもはいみじき。ただいふ詞も、くちをしうこそなりもてゆくなれ。いにしへは、車もたげよ、火かかげよとこそいひ

道具器物も、古風な製作様式は、まことに雅趣あるものと見える。

手紙の文章なども、昔の反古になつてゐる手紙の文章は立派なものである。平生常に口にする談話の言葉も、後生になるとだん／＼とつまらぬものになつてゆくやうである。昔は、「牛車もたげよ」「火かかげよ」と言つたのを、當世風の人は、「もてあげよ」「かきあげよ」といふ。又、主殿寮の「人数たて」といふべきことを、「立ち明し白くせ

しを、今やうの人は、もてあげよ、かきあげよといふ。主殿寮の「人数たて」といふべきを「たちあかし、しろくせよ」といひ、最勝講の御聽聞所なるをば、「御かうのろ」とこそいふを、「かうろ」といふ、くちをしとぞふるき人は仰せられし。

語釋 ○古き世のみぞ——「のみ」は、強めるためにある語で、前段の「風のみこそ」と同じ。古代の世がの意。○したはしき——なつかしい。○今やうは無下にいやしくこそなりゆくめれ——當世風のもの、どうも甚だ下品になつてゆくやうだ。○今やうは、今様と書き、當世風。現代的なこと。○無下に「ひどく。甚だ。一途に。ことの悪くなつてゆく場合に使ふ副詞。大變よといふ場合に使ふ「こよなく」の反對にあたる。○かの木の道のたくみ——たくみは、元來大工のことをいつたのが、轉じて一般の工作人をさす稱となつた。その一般の大工と區別するの意で「木の道のたくみ」といつたのである。下文に、「うつくしきうつは物云々」の語のあるところから考へると、この「木の道のたくみ」は、指物師、家具師をさしていつたものである。かのは「彼の」で、この文の表面では誰と示してゐないで、單に「あの何某」といふことになつてゐるが、兼好の意中には漠然とさしてゐるものがあつたのである。このやうな書き方は、源氏物語帯木の巻に、「彼の木の道のたくみのよるづの物を心にまかせて作り出すも云々」とある。○うつは物——器物。この語より考察すると、前の「木の道のたくみ」は、指物師、家具師と考へら

よ」といひ、最勝講の御聽聞所である處（即ち御座所）をば、「御講の處」といふべきであるのに、單に「講處」といふは、なさない事だと、或る有識の古老が仰せられました。

れる。○古代の姿——昔風の製作様式。昔風の細工振りをいふ。○をかし——おもむきがある。情趣がある。○文のことば——手紙の文章。○昔の反古——「反古」は、反故とも書く。ホゴ。ホウゴ。ホグ。ホウグなどのよみ方がある。書き散らした不用の古い紙をいふ。ここは昔の手紙であるから、今日は不用となつて反古となつてゐるのを見るが、そんな反古の如きものでも意。「反古ども」の「ども」といふ接尾語は、同類の多くの中から一つをあげて、他を知らしめることに使ふ語。○いみじき——實に立派なものである。○ただいふ言葉——上文にあつた「文のことば」に對して、平生の談話に使ふ言葉をいふ。○くちをしうこそなりもてゆくなれ——「くちをしう」は、物足らぬ感じのすること。つまらない。なさないの意。「なりもてゆく」は、だん／＼さうなつてゆく。「もて」は、深い意味がない。ただ口語の「だん／＼」の如きの意。即ち平常談話に使ふ言葉も、時代が下るにつれてだん／＼とつまらぬ言葉になつてゆくといふのである。古代の語の雅趣がなくなつてゆくことをいふ。○車もたげよ——「車」は牛車（ギツシヤ）のこと。「もたげよ」は持ちあげよ。○火かかげよ——油火の燈心（トウシミ）を搔上げて火を明るくすること。「かかぐ」は、カキアグ（搔上）の約。○今やうの人——近頃の人。當代の人。即ち兼好時代の人をさす。○主殿寮——トノモヅカサとよんだが、その他、トノモレウ。トノモリノツカサ。トノモンレウともいふ。宮内省被官五寮の一つ。輿輦、湯沐、殿舎の洒掃及燈燭炭療等を掌る。○人数たて——「たて」は命令形なる故に清みてよむ。「人数」（ニンジュ）は、連中、者共の意。「立て」は、立ちて松明（タイマツ）を捧げ持て、即ち、松明を明るくするやうにと命ずるのである。「たちあかししろくせよ」（立明白くせよ）とある下の句に同じ。夜の節會や

御神樂などへ行幸あそばされる折、庭燎を焚き、炬火を執つて供奉する主殿寮の官人に斯く命ぜられる意。但しこの「人数たて」を、「人数だて」と濁音によむ説がある。文段抄や大成の説、佐野保太郎氏の説がそれである。然し、ここは文の終止を承けると助詞で受けてゐる、即ち「人数たてといふべきを」とあるから、下の「たちあかししろくせよといひ云々」と同形にして、「人数たて」で文が終止しなければならぬ。故に清んでよんで命令形とする。古注では句解に、「人数たてとは、主殿寮の人数に座をたちて火をとせといふ義也。たの字すみてよむべし。濁りて義理心得るは、あやまりなり」といつてゐる。暫くこの説に従ふ。○たちあかししろくせよ——「たちあかし」は、「たてあかし」ともいひ、「立明」と書く。倭名抄に、「炬。訓與燈同。俗云ニ太天阿加之。東ノ薪灼之」とある。松明（タイマツ）の類をいふ。「しろくせよ」は、あかるくせよの義。○最勝講——五月の吉日を選んで、毎年五日間、清涼殿で金光明最勝王經を講じ、妖災屏息、國家安穩を祈られた儀式。この時は東大寺、興福寺、延暦寺、園城寺の僧を召される。この儀式は一條天皇の長保四年以來行はれてゐる。最勝講に就いての詳しいことは、雲圖抄（群書類從卷第八十二）の最勝講事、及び雲圖抄裏書の最勝講次第の條、建武年中行事の五月の條、（群書類從卷第八十五）参照。○御聽聞所なるをば——天子の最勝王經の論議を御聽聞あそばされる場所。ここは、「御聽聞所なる處をば御講の處といふ」の意である。○御かうのろ——「御講の處」と書く。最勝王經の論議を御聽聞なさる所。「處」はイホとかイホリといふことで、坐席、場所の義に用ゐてゐる。禁中で攝政、關白、大臣、大納言などの宿直又は休息する所を直處といふ、その處と同じ意。○かうろといふ——天子の御事に關したことであるからして、

「御講の處」と申すべきのを、略して、單に、「講處（かうろ）といふはの意。この「いふ」は、ここで文章が終止してゐるのでなく、「いふはくちをし」とつづくのである。つまり「いふ」は終止形でなくして、連體假止である。○ふるき人——古老。何れ有職故實に通曉した老大家をさしたものであらう。

第二十三段

おとろへたる末の世とはいへど、なほ九重の神さびたる有様こそ、世づかず、めでたきものなれ。露臺、朝餉、何殿、何門などは、いみじとも聞ゆべし。あやしの所にもありぬべき小葎、小板敷、高遣戸なども、めでたきこそきこゆれ。

「陣に夜の設せよ」といふこそいみじけれ。夜の御殿のをば、「かいともし、とうよ」などいふ。又めでたし。上卿の陣にて事行へるさまは更なり、諸司の下人どもの、したり顔になれたるもをかし。さばかり寒き夜もすがら、ここかしこに睡り居たるこそをかしけれ。「内侍所の御鈴の音は、めで

口譯 世道人心の衰へた末世とはいふけれども、それでもやはり、宮中の神々しい有様こそ、俗世の風習から超越してゐて、まことに結構なものである。露臺、朝餉、何殿、何門などは、それは一般の民家には無いものであるから、一寸そのやう

な言葉を聞いても、いかにも結構なものと思えるのである。賤しい民の家にもある小葺、小板敷、高遣戸なども、これが民家のものでなく、禁中のものだと思ふと、實に結構なものだと聞える。それから「陣に夜の設せよ」といふのは、實によいものである。陛下の夜の御寝所の燈火をば、「かいともしようよ」（點燈を早くせよ）といふ。これも亦よいものである。公事などがあつて、上卿が陣で執

たく優なる物なり」とぞ、徳大寺の太政大臣は仰せられける。

語釋 ○おとろへたる末の世——世道人心の頹廢した末世との意味であるが、單に佛教思想の澆季といふ意ばかりでなく、當時は南北朝時代の亂世で、畏れ多くも事實皇室も衰微あそばされてゐられたことを含ませてゐる。○なほ——それでもやはり。○九重——禁中。皇居。國語の「九重」（コノノヘ）は、もと漢語の「九重」（キウチヨウ）を直譯したものである。楚辭に「君門以九重」とあり、禮記月令篇に、「季春之月云々。毋出九門」と。注に「天子九門者、路、雁、雉、庫、臯、城、近郊、遠郊、關也。」とある。○神さびたる——物古りて神々しく感ぜられること。鳥部山物語に、「何事も衰へたる世といへど、猶九重の神さびたる様こそ、こよなうめでたけれ」とある。○世づかず——俗世の風習に染まなざること。世俗を超越してゐること。○めでたきものなれ——結構なものである。○露臺——屋根のない板敷の臺、禁中の仁壽殿と紫宸殿の間にある。「露」はツユの意でなく、アラハの意。雨風にさらされてゐるところからかくいふ。露代とも書き、和歌では「露のうてな」といふ。又、月臺ともいひ、單に臺ともいふ。十一月五節の時、ここで亂舞が行はれる。○朝餉——「朝餉の間」のこと。清涼殿にあつて、主上の御食事なされる所。禁秘抄の御膳事の條に、「凡御膳大床子御膳、（朝夕、近代一度供之）朝餉御膳（朝夕夜供）皆一度供之、此御膳等近代主上不着」とあるによつても、主上の御朝食と限らない。諸注に「朝召し給ふ主上の御膳なり」とあるのは誤なり。これ文段抄の「年中行事歌合の注に、あさかれると申は、天子の朝の御膳の名。御膳を供する事にて侍り云々」とある誤によつたもの。

務してゐる様はいふまでもなく、役所々々の下級官人が、得意然として物事に馴れて振舞つてゐるのも面白い。あんなに甚だ寒い冬の一晚中、あちらこちらに、この下級官人どもが、畏れ多い禁中でありながら、馴れた氣安さから居眠りしてゐるのは面白い。内侍所の御鈴の音は、尊く優雅なものである」と、徳大寺太政大官藤原實基公が仰せられた。

○何殿——大極殿、紫宸殿、清涼殿など、殿の字のつく殿舎をいふ。○何門——これも朱雀門、郁芳門、建禮門など、「門」の字のつくものすべてをさして言つてゐる。○いみじとも聞ゆべし——いかにも立派だと聞えるだらう。○あやしの所にもありぬべき——「あやし」は、賤しい者をさす。賤しい者の住んでゐる所にもありさうな。「ありぬべき」は、單に「ある」と言つてよい所を、「あるべき」と婉曲叙法とし、更に強めて「ありぬべき」としたものの。○小葺——コジトミとよむ。「葺」は細い木を縦横に組んで元祿格子となし、内側に板を張つたもので、風雨や日光を遮断する用をなす。格子と共にあるときには、格子の外を掩ひ、蝶番（ナフツガヒ）で上下二枚になり、上は釣しあげ、下ははづすやうになつてゐる。今日の建築の雨戸の用をなすものと考へてよい。小葺は半葺（ハジトミ）ともいひ、葺の小なるもので、清涼殿の殿上間にあるもの。石灰壇の際と上戸との間にある小窓にて、格子をかく、主上殿上なる侍臣の振舞など觀察し給ふ料であるといふ。御物忌として凶事その他、御愼みのある日には、小葺を下し塞ぐといふ。○小板敷——コイタジキ。清涼殿の南面の小庭から殿上に上る階の上の縁にある板敷。小板を敷きならべてあるので斯くいふ。○高遣戸——タカヤリド。丈（タケ）を普通よりも高く作つてある遣戸。（遣戸とは今日の障子のやうに敷居の上を左右に引き交へて開閉する戸にて、引戸（ヒキド）に同じ。清涼殿の臺盤所の壺の南、西南渡殿の南側にある遣戸である。○めでたくこそきこゆれ——いかにも結構なものと思はれるとの意。○陣——ヂン。「陣の座」ともいふ。朝廷で神事、節會、叙任等の公事の行はれる時、諸卿の坐する所。そこにゐて諸事をとり行ふ。

左右近衛の兩陣がありて、左近衛の陣は日華門内に、右近衛の陣は月華門内にある。貞丈雜記四に、「陣の座、又左衛門の陣などいふは、軍陣の事にてはなし。禁裏にて、役人出仕して、役所に列座する事を陣と云ふ也。陣は役所といふ心也。陣はつらなるとよむ字にて、人々多く立列る心にて陣と云ふなり」と。○夜の設せよ——夜の設け、即ち夜の用意をせよとの命令で、燈火の準備をせよといふこと。主殿寮の者がいふのである。○いみじけれ——まことによいものだ。○夜の御殿のをば——夜の御殿は、ヨルノオトド。ヨノオトド。ヨノオトドともよむ。天子の御寢所を申し奉る。清涼殿の晝の御座の北、二間の西にある御部屋である。「のをば」は、「の燈火をば」の意。この「夜の御殿」は清涼殿のものばかりでなく、或は院の御所のものをさしてゐるかも知れぬ。○かいともしとよよ——あかりを早くつけよの意。夜の御殿の御帳臺の四隅の燈樓に火を點ぜよ。かいは掻きで接頭語。とよよは疾くよの音便。早くの義。同じ燈火のことであつても、陣の座では、「夜の設けせよ」といひ、夜の御殿では、「かいともしとよよ」といふ。斯うした言葉遣ひが、兼好の感興を引いてここに書いたものであらう。○上卿——シャウケイとよむ。公事の時、大臣、大中納言の中で臨時にその奉行と定められたもの、即ち上首のもの。○上卿の「の」の「の」は、主格を示す助詞。○事行へる——上卿が自己の務むべき用事をしてゐるさま。○更なり——いふまでもない。勿論である。○諸司の下人——「諸司」は、いろ／＼の役所を概括していふ。「下人」は下級の役人。ここは「地下人」の意であるまい。○したり顔になれたる——得意顔で禁中の務めに馴れたやうに振舞つてゐるさま。「したり顔」とは、得意さうな顔つきをしてゐるさま。○さばかり寒き夜もすがら——非常に寒い夜一晚中。「さばかり」は、それ

ほど、そんなにの意。但し文中に、「どんなに」とさす箇所がないから、非常にとか、ひどくの意。○ここかしこ——此處彼處で、あちらこちらに。○睡り居たるこそをかしけれ——この主語は、「諸司の下人」である。それ等の者どもが、安らかな氣持で眠つてゐるのが面白いのである。尊き禁中に仕へてゐながら、馴れて居るため、心の緊張が弛み、寒き夜に心安らかな居眠りをしてゐるのが面白いのである。○内侍所の御鈴の音——「内侍所」(ナイシドコロ)は宮中の温明殿の内にて、神鏡を奉安する所。普通は賢所(カシヨドコロ、又は、ケンシヨともよむ)といふ。「鈴の音」とは、その神樂の鈴の音である。江家次第第十一、内侍所御神樂事の條に曰く、「十月中撰吉日被行。云々。主上召御笏御拜(兩段三拜)訖女官引鈴鳴之三度」とある。この鈴は手にとりて鳴らすのでなく、紐を引きて鳴らすものといふ。○めでたく優なる——結構で優雅である。○徳大寺の太政大臣——従一位藤原實基(第十段の後徳大寺の大臣(實定の孫)をさすといふ壽命抄以來の注がよいと思ふ。尤も實基は文永二年(六十四歳)で死んでゐるので、兼好の生れたときは既にこの世にない人である。故に一説には實基の子公孝とする人もあるが、實基の直話(ちきわ)でなくとも、又聞きや、記録などによつて、兼好がかく書いたものとしてよいわけだから、必ずしも公孝としなくてもよい。

第二十四段

口譯 齋宮が野宮においでになる有様は、極めて優雅にして趣深いものと思はれた。『お經文』のことや、『佛像』などを忌み嫌つて、これを言ふときには、『なご』、『染紙』などといふのも面白い。凡ての神社といふものは、棄てがたい趣があつて、優雅なものであるよ。古めかしく時代のついた神々しい森の景色も、普通でなくけだか

齋宮の野宮におはしますありさまこそ、やさしく面白きことのかぎりとは見えしか。經、佛などいみて、なご、染紙などいふなるもをかし。すべて神の社こそ捨てがたく、なまめかしき物なれや。ものふりたる森のけしきもただならぬに、玉垣しわたして、櫛にゆふかけたるなど、いみじからぬかは。殊にかしきは、伊勢、賀茂、春日、平野、住吉、三輪、貴船、吉田、大原野、松尾、梅宮。

語釋 ○齋宮——イツキノミヤ。又はサイグウとよむ。歷代天皇御即位毎に、未婚の内親王、又は女王を選んで、伊勢神宮と賀茂神社とに奉仕せしめられた。是を齋王(イツキノミヤ)と總稱し、伊勢のを齋宮といひ、賀茂のを齋院と申し、齋院もイツキノミヤと訓じて居る。總べて未婚の方から卜定する事になつてゐるが、年齢は場合によつて一定してゐない。先づ、齋宮を卜定なると、宮城内に適當の地を定めて、ここに居を移し、之を初齋院といひ、其の後城外に地を卜して新宮を造り、翌年八月、初齋院から此所に移る。之を野宮といふ。ここで潔齋三年、その九

いのに、その上、神社の周圍に玉垣をづうつとめぐらして、神前の櫛に木綿(ニフ)をかけてある如きは、まことに大變莊嚴なものである。その神社の中で、特別に莊嚴な趣のあるものは、伊勢、賀茂、春日、平野、住吉、三輪、貴船、吉田、大原野、松尾、梅宮などの神社である。

月始めて伊勢に移れる。「齋宮」は、伊呂波字類抄などには、「イツキノミヤ」とあるから、本來は斯くよんだものと思はれる。もとは居所を申上げた名稱で、伊勢國多氣郡にあつたので、タケノミヤとも申上げる。その皇女なり、女王なりの人の方は、「齋内親王」又は「齋王」と申すのであるが、居所の名を以て代へることになつた。齋宮は崇神天皇六年に、皇女豐劔入姫命をして、天照大神を大和國笠縫邑に祀らしめられ、次で垂仁天皇の二十五年に倭姫命をして、伊勢の齋宮に奉侍せしめられたのが最初であり、爾來時代により、設けられなかつたときもあるが、天武天皇以後間断なく行はれ、後醍醐天皇の皇女祥子内親王を最後として絶えた。○野宮——「ノノミヤ」とよむ。齋王が、伊勢又が賀茂へ赴き給ふ前に居給ふ宮。齋王卜定後、宮城内の初齋院に居給ひ、翌年八月此の宮に移り、此處で潔齋三年の後の九月、伊勢に發向したまふ。その場所は一定せず、(初齋院も同様)。例へば天武天皇の時は初瀬に、光仁天皇の時は春日に、文徳天皇以後は、大抵皇城の北野に設けられた。○やさしく面白きことのかぎり——優雅にして趣深いこととの至極である。「かぎり」は、最上とか、一番といふこと。○見えしか——この女は普通の書き方にすると、「おぼゆれ」となるところを、「しか」といふ過去助動詞の已然形にて結んでゐるのは、恐らく齋宮の野宮にゐらせられたことどもを、親しく見聞した兼好の經驗を記憶のままに書いた爲であらう。○經佛などいみて——「いみて」は、「忌みて」の義で、嫌ひ避けること。神に奉仕するから、佛に關したことを嫌ひ避けて言はぬやうにするのである。延喜式五に、「凡忌詞。内七言。佛稱=中子。經稱=染紙。塔稱=阿良良岐。寺稱=瓦葺。僧稱=髮長。尼稱=女髮長。齋稱=片膳。外七言。死稱=奈保留。病稱=夜須美。哭稱=鬘垂。血稱=阿世。打稱=撫。穴稱=菌。

補 「齋宮」は、正徹本、傳齋本は、「齋王」とある。

墓稱^{ツチノミ}。又別忌詞。堂稱^{カケキ}ニ香燃。優婆塞稱^{ウパサイ}ニ角筈^{ツノノハ}。とある。○なかご——中子と書く。佛を意味する忌み詞。佛教大辭典に、「中尊の意に取るなり」とある。○染紙——ソメガミとよむ。經^{マクラ}を意味する忌詞。和訓栞に、「儀式帳に志目賀彌と記せば、シメガミとよむべし。是佛經をいへり。黄卷朱軸などいふ意なり。般若の料紙を、きはだの紙とよめる事、著聞集に見えたり」と。○をかし——興味がある。○捨てがたく——何となく人の感興を引くので、見過しがたいの意。○なまめかしきものなれや——優雅なものであるよの意。「なまめかし」は優雅の意。「ものなれや」は上に、「こそ」がある爲に、「なり」の已然形「なれ」となり、それに「よ」と同意の感動の助詞「や」がついたものである。○ものふりたる——時代がついて、何となく古びて莊嚴な感じのすること。○森のけしき——森の様子。○ただならぬに——「ただならぬ」は、普通でないの意。即ち他の所では見られない一種の森嚴な所があるをいふ。「に」は、その上に又の意。○玉垣しわたして——「玉垣」(タマガキ)とは、神社の周圍に造つた垣。「しわたす」は、造つて周圍にずうつとめぐらすをいふ。○櫛——サカキ。玉串(タマガシ)ともいふ。賢木とも書く。山茶科の常綠喬木。高さ十メートル位に達する。樹皮は粗糲で、緑色を帯びた紫黑色。葉は互生し、長橢圓狀倒卵形で先端尖り、全縁をなし革質で厚く、深綠色で光澤がある。五六月頃、葉腋に淡黄白色の細花を開き、花後に紫黑色の球形の漿果を結ぶ。古來神木として、枝葉を神に供せられる。○ゆふ——木綿と書く。桑科楮屬の櫛(カチノキ)、(梶ともかく)の纖維で作つた布。これを櫛の枝々に掛ける。これを「ゆふしで」(木綿四手、木綿垂)ともいふ。現今は細く切つた白紙をつけるが、これは木綿四手の變つたものである。○いみじからぬかは——「いみじ」は、

神々しく優雅であること。「かは」は反語。神々しく優雅でなからうか、神々しく優雅である。○特にをかしきは——「殊に」(コトに)とは、前文に、「すべて神の社こそ捨てがたくなまめかしきものなれや」とあつたのに對し、その神社の中でも、次にあげるのは特別^{トクニ}といふのである。「をかし」は、上の「いみじ」と殆ど同じく、神々しく、優雅で心を引くものの意。○伊勢——伊勢神宮。皇大神宮(内宮)は皇祖天照大神を奉祀し、三重縣宇治山田市神路山の麓、五十鈴川上鎮座。豐受大神宮(外宮)は、豐受大神を奉祀し、同高倉山の麓、山田の原に鎮座。兩宮を總稱して伊勢神宮と申す。○賀茂——京都の上下賀茂神社のこと。詳しくは第十九段の「祭の比」のところ参照。○春日——奈良市春日野鎮座の官幣大社。祭神は建甕槌命、經津主命、天兒屋根命及び同社の比賣神。このうちの天兒屋根命は藤原氏の祖であるので、平安朝以來、藤原氏の氏神として崇敬せられてゐた。祭日三月十三日。○平野——京都府葛野郡衣笠村小北山鎮座の平野神社。今木、久度、古開、相殿比咩神四神を祀る。祭日四月十一日。○住吉——大阪市住吉區住吉町鎮座の官幣大社住吉神社。祭神は表筒男命、中筒男命、底筒男命、息長帶姫を祀る。祭日六月三十日。○三輪——奈良縣磯置郡三輪山に鎮座の官幣大社大神神社。祭神は大物主櫛^{オホモノノヅクシ}玉命を祀り、後、少彥名命を配祀す。この神社は神數なく、三輪山を以て神靈鎮座の處となす。拜殿のみにて老杉よく茂り、四月九日を祭日とす。○貴船——京都府愛宕郡鞍馬村宇貴船に鎮座の貴船神社。閻^{イハ}龍^{リウ}神を祀る。古來祈雨に靈驗ありと稱せられる。官幣中社、祭日六月一日。○吉田——京都市上京區吉田神樂岡町鎮座の官幣中社。吉田神社。祭神は春日神社に同じ。祭日四月十八日。○大原野——京都府乙訓郡大原野村鎮座の大原野神社。官幣中社。祭神は春日神社に同じ。

祭日四月八日。○松尾——京都府葛野郡松尾村上山田鎮座の松尾神社。大山昨命、市杵島姫命を祀る。官幣大社、賀茂神社と相並びて京都の守護神。祭日四月二日。○梅宮——京都府葛野郡梅津村西梅津鎮座の梅宮神社。祭神は酒解神、酒解子神、大若子神、小若子神を祀る。官幣中社。橘諸兄の母三千代の創祀に係り、橘氏の氏神とされてゐる。祭日四月三日。

第二十五段

口譯 飛鳥川の淵と瀬とが常に變化して定まつてゐないやうに、無常轉變してまことに定めない世の中であるから、時日は推し移り、

世の中の物事は消え去り、悲しみと喜びとは交々行き違つて、美しく榮えてゐた所も、何時のまにか人も居ない

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時うつり事さり、たのしびかなしびゆきかひて、花やかなりしあたりも、人すまぬ野らとなり、かはらぬすみかは人あらたまりぬ。桃李ものいはねば、誰と共に昔をかたらむ。まして見ぬいにしへのやんごとなかりけむ跡のみぞいとはかなき。

語釋 ○飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば——「飛鳥川の淵瀬」は、「常ならぬ」にかかる序詞である。飛鳥川は大和國高市郡にあり、源を稻淵山より發し、飛鳥村を経て磯城郡に入る。今は小さい川であるが、昔は大きな川であつたらしい。「淵」は、水の上と深い處。「瀬」は、淺くして速く流れる處。この川は流れがよく變り、深淵と淺瀬が定まらないので、世の中の無常に譬へられる。古今集卷十八、題知らず、讀み人知らず、に、「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の

野と變り、昔のままに残つてゐる住家は、その中に住む人が代つてしまつてゐる。昔立派な邸のあつた跡を訪ふと、そこには美しい桃李の花が昔のままに咲いてゐるが、花は物を言はぬ無情のものであるから、誰と共に昔のことを語らう。昔のことを語り合ふ相手はない。まして自分(兼好)の見たことのない昔の時代に尊く立派であつた邸宅とか寺院などの遺跡の荒れ果てた所を見ると、殊にはかない

淵ぞ今日は瀬になる」の歌が有名になつて、歌文によく引用される。飛鳥をアスカとよむわけは、もと「飛鳥の明日香」といひ、「飛鳥の」は、アスカといふ土地の地名に冠らす枕詞であつたのが、後に單に、「飛鳥」と書いて直ちに、「アスカ」といふことになつた。なほ萬葉集卷七に、「明日香川七瀬の淀に棲む鳥も心あれこそ浪立てざらめ」とあり、古今集戀歌に、「飛鳥川淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ山は忘れじ」などある。○世にしあれば——「世にあれば」に殆ど同じ。「し」は強意の助詞。○時うつり事さり——月日がだん／＼と推し移り、凡ての事は漸次に變遷してゆくの意。古今集序の、「たとひ時移り、事去り、樂しび悲しび行きかふとも云々」や、陳鴻の長恨歌傳に、「時移事去、樂盡悲來」などによつてゐる。○たのしびかなしびみゆきかひて——「たのしび」は、「樂しみ」のこと。「かなしび」は、「悲しみ」のこと。びはみに通ずる。「ゆきかふ」は、行き違ふこと。樂しみが來たかと思ふと悲しみが來、悲しみが來たかと思ふと、又樂しみが來るといふやうに、悲喜交々至るをいふ。○花やかなりしあたり——立派な邸宅など建ち並んでゐて、美しく榮えて居た所。○人すまぬ野ら——住む人も居ない野原。「野ら」の「ら」は一種の接尾語。○かはらぬすみかは人あらたまりぬ——住家が昔のままに残つてゐる所は、其處に住んでゐる人が、昔の人とは變つてゐる。「あらたまりぬ」は、變つてしまつてゐるの義。○桃李ものいはねば誰と共に昔をかたらむ——昔、邸宅のあつた跡や、又家に住む人の變つた邸宅などに、桃や李(スモモ)が、今もやはり昔のままに美しく咲いて、桃李それ自身は昔のことも知つて居る筈であるが、桃李の花はもと／＼無情なもので、何も昔のさまなど語らないから、遺跡を訪ねても、昔のことを語り合ふ友と誰をしよるか、誰もゐないの意。和漢朗詠集

ものである。

雑に、菅原文時の、「桃李不言春幾暮。煙霞無跡昔誰植」の句による。菅原文時のこの詩は、史記李廣傳の「桃李不言下自成蹊」の句から出来てゐる。又、後拾遺集春部に、世尊の桃花をよめる、出羽辨、「故郷の花のいふ世なりせば昔の事をとはまし」などもある。○まして——自分(兼好法師)が今までに見た所でも、上述のやうに非常に變遷してゐるのであるから、まして自分の知らない昔のことはといふこと。○見ぬいにしへの——自分の見たことのない昔の代の。○やんごとなかりけむ跡——話に傳ひ聞くと、昔、此所に高貴な方が住んでゐられた邸宅があつたとか、立派な寺院があつたとかいふことであるが、さうした遺跡はの意。○のみぞ——これも「ばかり」でなく、「殊に」といふほどの意。○はかなき——脆くて頼みがひの無いこと。自分の見ない者のやんごとなかつた跡を見ると、世の中の無常なことが一層痛切に感ずるの意。前の「まして」の副詞は、この「はかなき」にかかる。つまりここを今一度詳述すると、これは昔何といふ方のお屋敷があつたとか、何といふ寺院があつたとかいふ、その遺跡だと聞くと、自分が見たことのない昔の事であるだけに、一入想像を逞しうして、それはどのやうに宏大なものであつたらうと考へる。そしてそれがこんなにならぬ荒廢してしまつた事かと思ふ時、一層果敢ない感じをするのである。

口譯 京極殿や法成寺などを見ると、道長公が子々孫々まで永く榮

京極殿、法成寺など見るこそ、志とどまり、事變じにけるさまはあはれなれ。御堂殿の作り磨かせ給ひて、莊園おほく寄せられ、我が御ぞうのみ御

えるやうにと思つてゐられた故人の志は、今もなほそのやうに留り残つてゐるが、その道長公のその計畫の事業はすつかり變つてしまつた有様が、感慨無量である。道長公が立派に法成寺を造りあそばされて、莊園を澤山寺領として寄進あそばされ、我が藤原氏の一族だけは天子の御後見(攝政關白などを主としてさす)となり、天下の守護役として、未來永久に榮えるやうにとお考へおかれたその

門の御うしろみ、世のかたためにて、行末までとおぼしおきし時、いかならむ世にも、かばかりあせはてむとはおぼしてむや。大門、金堂など近くまで有りしかど、正和の比、南門は焼けぬ。金堂は其の後たふれふしたるまににて、とりたつるわざもなし。無量壽院ばかりぞそのかたとて残りたる。丈六の佛九體、いとたふとくてならびおはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法花堂などもいまだ侍るゆり。これもまたいつまでかあらむ。かばかりの名残だになき所々は、おのづからいしづるばかり残るもあれど、さだかに知れる人もなし。さればよろづに見ざらむ世までを思ひおきてむこそ、はかなかるべけれ。

語釋 ○京極殿——藤原道長が入道する前に住んでゐた邸宅。京都京極の西、土御門の南。拾介抄(中末)に曰く、「京極殿。土御門南。京極西南北二町。其南一町被入道長家。或大入道家上東門院是也。後一條、後朱雀、後冷泉三代帝於此所誕生云々」と。道長の薨去十三年日、即ち長久元年に焼け、再興されなかつた。○法成寺——ホフジヤウジ。道長の入道後に住んだ所。近衛の北、京極の東、今の寺町より東、荒神口より北に當る所にあつた。今の三十三間堂の南。

當時に於ては、いつどのやうに變化する時代になつても、このやうに荒廢しようとはお考へなされてゐられたらうか。いやそのやうなことはあるまい。その法成寺の惣門や本堂などは、近き頃まで存立してゐたが、正和の頃、南大門は焼けた。金堂はその後、倒れうづむいたままになり、再び建て直すこともない。只今では無量壽院だけが、その昔盛んであつた時の形を有して残つてゐる。そこには一丈

地域方二町。治安二年に成る。道長の設立。京極殿の焼けた時、是れは火災をのがれ、後に興廢あり、兼好時代まで舊趾を存してゐたが、その頃水害に遭つて亡ぶ。○志とどまり事變じにける——子々孫々に至るまで永く是等京極殿や法成寺は榮えるやうにと思つてゐた故人の志は、今もなほ留まり残つてゐるが、その子孫を思つてやつた建立の事業は、すつかり變りはてて、昔の面影もなくなつてゐる有様。是れは、後江相公の「樂盡哀來。志留事變」(本朝文粹卷十四、朱雀院四十九日御願文)を引用したものである。○御堂殿——藤原道長のこと。法成寺に住んでゐたので、世に御堂關白ともいつた。又一説に、「好んで御堂(お寺のこと)を造立ある故に、世に御堂殿と稱す」と。道長は關白兼家の第五子。官職にては、攝政、關白、太政大臣といふ最高の地位を得。又、後一條、後朱雀、後冷泉の外祖父として、權威並ぶものなく、自ら「此の世をばわが世とぞ思ふ望月のかけたることもなしと思へば」と歌つて、萬壽四年十二月四日薨去。年六十二。○作り磨かせ給ひて——美しく立派に造りなされての意。風雅集に、かたのの尼、法成寺にまゐりて詠み侍りける歌、「くもりなく磨ける玉のうてなには塵もゐがたきものにぞありける」とある。○庄園多く寄せられ——「莊園」とは、寺社又は個人の私有地。ここは道長が田舎に所有してゐられる地所を寺領として澤山寄附されたのをいふ。「られ」は敬語の助動詞。このところ榮華物語鶴林のところの詳し。○御ぞう——「ぞう」は、族の字音をウ音便にしたもの。藤原氏の一族をさす。○御門の御うしろみ——天子の御後見役。攝政關白となつて天皇を輔佐し奉ること。「御門」(ミカド)は、天皇のこと。○世のかため——世の中の守り。世の守護者。ここは天下の政治を主宰するもの。○行末までとおぼしおきし時——後々までも榮えるやうにと考へおか

六尺の阿彌陀佛が九體、まことに尊いさまに並んでゐられる。藤原行成大納言が書いた額や、兼行が書いた屏が、今も昔に變らず鮮明に存して見えるのが感慨無量である。法花堂なども今だにあるやうである。しかしこれとてもいつまであるだらう。やがて亦類廢するであらう。この法成寺は兎に角に無量壽院や法花堂だけ残つてゐるのだが、これだけの名残さへ残つてゐない所は、たま／＼土臺

れた時。○いかならむ世にも——何時の世、どのやうな時代になるとしても。○かばかりあせはてむとは——これ程までに荒れ果てようとはの意。ここは京極殿や法成寺の頽廢して見る影もなくなつたことをいふ。「あす」は佐行下二段の動詞にして、河海の水が淺くなる。色がさめる。又は衰へすたれる意。ここは後者の意。○おぼしてむや——思つてゐられたらうか。決して思つてゐられなかつたらう。「おぼす」は、思ふの敬語。「てむ」は、現在完了の「つ」の未然形して用ゐたのである。「や」は反語。上の「いかならむ」の意味がここにかかつてゐる。○大門——小門に對して惣門をいふ。外郭の第一の正門。一の惣門の内に數多の小門があるのである。○金堂——コンダウ。本堂のこと。佛のことを金人(キンジン)といふから、金人を安置する堂の意味で、佛堂を金堂といふ。○近くまで有りしかど——法成寺の惣門や金堂は、つひ近頃まで残つて居たがの意。○正和の頃——花園天皇の御代の年號。道長薨去後二百八十餘年。正和元年は兼好の三十歳のとき。○南門——ナンモン。さきに大門といつた門のこと。それが南方にあつたから南門といふ。又、南大門ともいふ。○其の後たふれふしたるままにて——正和の頃南門は焼け、それから後に金堂は倒れ、倒れたままで、再建のこともしないこと。「とりたつるわざ」は、とりは接頭語。「たつる」は「建つる」即ち建築のこと。「わざ」は事業のこと。皇代曆によると、文保元年七月二十二日に地震があり、その後度々餘震があつたので、續史愚抄文保元年八月五日の條に、「戊刻、法成寺金堂西面倒」とある。又、皇代曆には、文保元年、「八、五、戊刻、法成寺金堂西側顛倒了」と。法成、法成音通用。○無量壽院——阿彌堂のこと。法成寺中にある

石だけ残つてゐるものもあるが、それはどのやうな建物が嘗てあつたのか、判然と知つてゐる人も無い。かかるわけであるから、何事によらず萬事について、自分の死んだ後の世までの事を、生前に考へて企て置く事は、實につまらぬことである。

一小寺にして、阿彌陀佛が安置されてゐる。日本外來語辭典に、「阿彌陀婆 Amitayus は无量光、阿彌陀由須 Amitayus は无量壽の義にして、阿彌陀は其略なり。阿彌陀の三字のみ用ひて下略せるは兩名に通じ、巧みなる用法なり。又單に彌陀とも稱す」と。この無量壽院は、餘程立派なものであつたことは、大鏡卷七に、「先づは造らしめ給へる御堂などの有様、鎌足のおとどの多武略、不比等大臣の山階寺、基經のおとどの極樂寺、忠平のおとどの法性寺、九條殿の楞嚴院、あめのみかどの造り給へる東大寺も、佛ばかりこそは大きにおはしますめれど、猶この無量壽院には並び給はず。まして餘の寺々はいふべきにあらず云々」と。○そのかたとて——「その」は法成寺をさす。立派であつた昔の面影として。○丈六の佛九體——高さ一丈六尺の阿彌陀佛九體が無量壽院に安置されてゐるのである。「九體」は九品の淨土（極樂淨土の九階級）に象どつたもので、九體の阿彌陀佛は九品淨土の教主であるといふのである。九品淨土とは、上品上生、上品中生、上品下生、中品上生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生といふ極樂淨土の九階級をさす。日本紀略、後一條寛仁四年二月「七日己酉。入道大相國。安置皆金丈六阿彌陀如來像九體於新造堂」とある。○いとたふとくてならびおはします——その佛の有様を拜すると、まことに尊いさまに並んでゐられる。○行成大納言——藤原行成。書法に長じ、道風、佐理と共に三蹟と稱せられた。右近衛少將義孝の長子、祖父伊尹の養子となる。寛仁四年（四十九歳）權大納言、萬壽三年按察使を兼ね、翌年薨去。年五十六。○兼行——源延壽の子。大和守藤原兼行のこと。書並に畫を能くす。父も能書であつたが、子の兼任も書博士であつた。尊卑分脈に、「能書。額書。大和守、内匠頭正四位下」とある。又、夜鶴庭訓抄に、「御堂法成寺額大納

補 「まぎやか」は、正徹本、傳幽齋本に「なほあざやか」とある。

言行成。扉兼行」とある。○扉——トビラ。阿彌陀堂の扉である。佛堂の扉には繪や經文などを書いたものである。○あざやかに見ゆるぞあはれなる——行成の書いた額や、兼行が書いた扉の字が、今も鮮明に見えるが、まことに感慨無量である。○法花堂——法華三昧（ホツケサンマイ）を修する佛堂。法華三昧堂の略稱。本尊は阿彌陀佛。法華三昧とは法華經を一心不乱に讀誦動行すること。「三昧」とは、心思を専念に一事に集注すること。梵語 Samadhi の音譯。等持、正受、正心行處等と譯す。○かばかりの名残だになき所々は——これだけの面影だけでも残つてゐない所。法成寺などは衰頹したと言つても、阿彌陀堂や法華堂など、幾らか昔を偲ばれる名残があるが、これだけの名残さへ残つたゐない所はの意。○おのづから——たま／＼。偶然。○いしづゑ——建築の土臺石。○さだかに知れる人もなし——はつきり知つてゐる人もない。土臺石だけあつたところで、そこに何といふ建物があつた跡だか、はつきり知つてゐる人もないといふこと。○見ざらむ世までを——自分の見ない後世までを。即ち自分の死んでしまつた後世までを。○思ひおきてむ——考へ處置して置く。「おきてむ」。「おきつ」（掟）といふ多行下二段の動詞に、未來の助動詞「む」のついたもの。○はかなかりけれ——頼みにならぬ事であらう。つまらぬことであらう。

第二十六段

口譯 風が吹けば花は

風も吹きあへず、うつろふ人の心の花になれにし年月をおもへば、あはれ

散る。かの戀人の美しくも又やさしい心情は、このうつくしい花にたとへられる。ところがこの愛する戀人の心は、それは全く風の吹くのを待たずに散つてしまふ。實に果敢ないものである。然るにその散り易い愛人の心情に馴れ親しんで過ごしてきた幾年月の過去を回想すると、身にしみて嬉しく聞いてゐた愛人の言葉は、今もあり／＼とそのまゝ覚えてはゐるが、その愛人もいつのまにか、心が變つてしまひ

と聞きし言の葉ごとはに忘れぬものから、我が世の外ほかになりゆくならひこそ、なき人のわかれよりもまさりて悲しき物なれ。されば白き絲のそまむ事かなしび、路のちまたのわかれむ事をなげく人も有りけむかし。堀河院の百首の歌の中に、

むかし見し妹いもが垣根は荒れにけり
つばなまじりの葦のみして
さびしきけしき、さる事侍りけむ。

語釋 ○風も吹きあへず——風も吹くか吹かぬうちに。風の吹くのを待たずに。「あへ」は「あへて」の（敢）のあへと同じく、「あふ」（下二）の動詞で、おしきつてする。しおほせるなどの意。○うつるふ——移るの延音で、色がさめる、花が散るなど、すべて事の狀態の移り變ること。ここは花の散ること。○人の心の花——「心の花」とは、はかなく變り易い心の比譬。それに戀人の花のやうに美しい心をも含ませてゐる。古今集春部の紀貫之の歌に、「櫻花とく散りぬともおもほえず人の心ぞ風も吹きあへぬ。」同じく戀部に、小野小町の、「色見えでうつるふものは世の中の人の心の花にぞありける」などからきた語である。「うつるふ」は、「人の心の花」全體の句にかかる。○なれにし——馴れ親んできた。「人の心の花になれにし」は、つまり花のやうに

か、心が變つてしまひ自分とは全然没交渉な人となつてゆくならばこそ、死別の悲しさにも勝つて悲しいものである。かく行く末々のことは、何も彼も變つてしまふものであるから、支那の古人は、白い絲を見ては、これもやがて色に染まるであらうといつて悲しみ、又一筋の道を見ても、これも又やがて幾筋かの道にわかれるであらうといつて歎いた人もあつたのであらう。堀河院の百首の歌

美しい戀ひ人の甘きささやきに馴れ親んできたとの意になり、その花が散りやすいやうに戀ひ人の心が變つてゆつたとの意も含まれてゐる。○年月——幾年かの間。○あはれと聞きし言の葉ごと——ああ、情のこもつた言葉として聞いてゐたその戀人の言葉のすべては。○忘れぬものから——忘れないけれども。即ち今もよく覚えてゐるが。○我が世の外になりゆく——自分とは別關係のない世界の人となつてゆく。自分とは全然没交渉な人となつてゆく。○ならひ——ならばし世の戀の多くは皆さういふさまになりがちのものであるといつたのである。○なき人のわかれよりもまさりて——死別よりもまさりて。「なき人のわかれ」とは、死別のこと。○されば——永久に變らぬ熱烈な戀であつてさへ、斯くいづのまにか變るものである。だから未來のことは、どう變るかわからぬといつて、古人も白き絲の云々をつづくところである。○白き絲のそまむことをかなしび云々——「そまむ」は「染まむ」にて、「かなしび」は、「悲しみ」の意。今は白き絲であるが、これが未來に於て、いろ／＼の色に染まるといつて悲むこと。○路のちまたのわかれむ事をなげく——「ちまた」は、道段（チマタ）の義で、道の岐れるところ。但しここは單に道の意に用ひてゐる。「道のちまたのわかれむこと」で、道の別れることをいふ。「白き絲のそまむ云々」から、この「路のちまたのわかれむ」云々の二句の本義は、そのもとは同じくして、末の異なるを悲むの義で、漢籍の方では、専ら人の心が、善にも悪にも染み易い事の喩に用ゐるが、ここでは深い戀仲で同じ道を歩いてゐたものが、遂には別れ／＼になることの喩に使つたものである。淮南子説林訓に、「聖人之偶物也。若以鏡視形。曲得其情。楊子見遠路而哭之。爲其可以南。可以北。墨子見練絲而泣之。爲其可。以黃。可。以黑。」とある故事によ

の中にも、
むかし見し妹が垣根
は荒れにけり
つばなまじりの藎の
みして
といふのがある。歌人
の淋しい趣がよくあら
はれてゐるが、成程さ
うした淋しさもあつた
であらう。

る。○有りけむかし——あつたらうよ。「かし」は文の終止について、念を押し意を強める語。
○堀川院の百首の歌——「堀川院の百首」とは歌集の名。堀川天皇の康和年中、時の歌人藤原公
實以下の十六人の歌人に、各百首づつの歌を奉らしめられた。それを権大納言藤原公實が勸進し
た。是れを堀川院の百首といふ。又、太郎百首と稱し、次の鳥羽天皇の永久四年に行はれたもの
を「次郎百首」といふ。但し石田吉貞氏の「堀川院百首の成立その他について」(國語と國文學、
第百二十五號)によると、堀川院の名稱をつけてゐるが、院の御召しになるものとは限らないで、
堀川院に於いて披講された故にこの名があるので、勅命ではなく、源俊賴によつて發起せられ、
康和四五年頃第一次成立、其後長治元年四月より年末までの間に最終的の成立をなして居り、第
一次的成立のときは作者は十四人であつたが、最終的成立のときは十六人になつたといはれてゐ
る。○むかし見し妹が垣根は云々の歌——その昔、嘗て相愛してゐたあの愛人(女をさす)はど
うなつたことであらう。あの時分、自分がよく、あの愛する女のもとに通うて、その家を見たど
きには、家の手入れなども立派に出来てゐたその垣根が、今はすつかり荒廢してしまつて、淋し
い庭には、ただ茅花まじりに藎の花が咲いてゐるだけで、女はもう見えないの意。「昔見し」は、
昔親しく逢つてゐたこと、「むかし見し妹」で、一つの句になる。「妹」(イモ)は、今日の妻と
か、親しい女性(愛人)の意。即ち、男より女を親しんで呼ぶときに使ふ代名詞。「つばな」は
「茅花」と書き、茅の花であるが、轉じて茅のことにもいふ。ここは何れと見てもよい。普通は
ちがやといふ。やはり「茅」の字を書き、禾本科の多年生の草本。高さ約一米。地下莖をひいて
盛に蕃殖し、葉は線形で先端尖り、春、葉に先立つて莖を抜き、其の上端に細く圓長き圓柱状の

多くの小穂からなる穂を單生し、各小穂は多くの穎花より成り、多数の白い總苞生を有する。之
をつばなといひ、採りて火口(ほぐち)をつくる。又、葉莖を用ゐて屋根などを葺くに用ゐるこ
ともある。「藎」は、徳川時代の歌人香川景樹は紫雲英(レンゲソウ)のことであらうと言つて
ゐる。思ふにこの説正しからん。さてこの歌は、藎の題にして、權大納言藤原公實の詠である。
又、文段抄には、本歌として家持集(群書類從卷第二百三十四)の「つばなぬく淺ぢが原のさほ
(文段抄つば) すみれ今はさかりにしげるすが戀」をあげてゐるが、萬葉集卷八には、大伴田村
家之大嬢與ニ妹坂上大嬢ニ歌として、「茅花抜く淺茅が原のつばすみれ今盛りなり我が戀ふらくは」
とある。或は萬葉集の方正しきか。○さること侍りけむ——成程そのやうなこともあつたであら
う。(單に題詠や假想でなくして)

第二十七段

口譯 御讓位の儀式が
行はれて、三種の神器
を新帝の方へ御渡しあ
そはされるその間の事
は、實にこの上もなく
甚だ心淋しいものであ

御國ゆづりの節會おこなはれて、劔、璽、内侍所わたし奉らるるほどこそ、
限なう心ぼそけれ。新院のおりゐさせ給ひての春、よませ給ひけるとかや。
殿もりのとものみやつこよそにして
はらはぬ庭に花ぞちりしく
今の世のことしげきにまざれて、院にはまるる人もなきざざびしげなる。

る。新院が御位を退きあそばされたその年の春、上皇がお詠みあそばされたとかいふ歌に、

殿もりのものみや つこよそにしてはら はぬ庭に花ぞちりし く。(主殿寮の下級の官人(殿部)までが、皆新帝の方にばかりゆき、こちらの上皇の方はよそごとにして来もしない。新しくして掃除もしない庭には、花が一面に散り敷いてゐる。)この歌は、花が一面に散

かかるをりにぞ、人の心もあらはれぬべき。

語釋 ○御國ゆづりの節會——「御國ゆづり」とは、天子御存命中に御位を次の天子にお譲りになるをいふ。即ち讓位である。これに對して新帝が位を受けさせられるを受禪といふ。明治になつてからは、讓位は廢せられて、踐祚のみとなつた。天皇崩御あつて、東宮が御位につき給ふを踐祚といひ、踐祚後これを天下の萬民に告げなされる式を即位といふ。「節會」とは、朝廷にて節日に饌を群臣に賜ふをいふ。節會とはもと節日の儀式をいつたが、後には饌を賜ふことに限りて節會といふ。節日(セチニチ)とは、古、季節の變はるをりなどに祝ひを行ふ日。即ち元旦、踏歌、端午、相撲、重陽、豊明などの諸節の日、禁中にては群臣を召して酒宴を賜ふ。大節には残らず召し、小節には五位以上を召す。但しこの節會は讓位といふ公事の儀式をいふ。○劔、璽、内侍所——三種の神器のこと。「劔」は天叢雲劔。「璽」は八坂瓊曲玉。「内侍所」は八咫鏡。「内侍所」は、もと温明殿の別名。神鏡を奉齋して、女官の内侍が此殿に奉侍する所からかくいふ。それから轉じて、神鏡をも申すのである。○わたし奉らるるほどこそ——新帝へお傳へになる時。「奉ら」は、「奉る」の未然形で、讓位の帝が、新帝に對する敬語。「るる」は、尊敬助動詞「る」の連體形で、作者より御讓位の帝に對する敬語。「ほど」は、その時間だけをさしてゐるのでなく、廣くその前後を含めてゐる。○限りなう心ぼそけれ——この上もなく心細い感じがする。○新院——新に上皇になられた方。ここは花園上皇を指してゐる。従つて新帝は後醍醐天皇をさし奉る。上皇が幾人もゐられるときには、最も新しい上皇から順次に、新院、中院、本院と申し奉

つて、却つてえもいへぬよい風情であるとの心持を歌つてゐられるその反面に、掃き清めるものがない、掃除するものもないさまを眺められての一種の哀寂があらはれてゐる。新帝御即位あそばされてから、その御用事の多いのに心ひかれて、上皇の御所へ参る人もないのは、いかにも心淋しいさまである。斯ういふ時にこそ、人の心といふものがよくあらはれるものである。

る。○おりみさせ給ひての春——御讓位になつたその春の意。花園天皇の御讓位は文保二年二月二十六日であつた。○よませ給ひけるとかや——花園院がお詠みになつたとかいふことである。下に「いふ」の語が略されてゐる。○殿もりのものみやつこ——主殿寮の下級の役人をいふ。(主殿寮については、第二十二段参照)。主殿寮の職員は、頭一人。助一人。允一人。大屬一人。少屬一人。殿部四十人。使部二十人。直丁二人。驅使丁八十人。(令義解)。「殿もりの」とは、「主殿寮の」の意。「ものみやつこ」とは、この「殿部」をいふので松明をともすとか、庭の掃除をするとかがこの殿部の仕事である。○よそにして——よそ事にして顧みないこと。うち捨てておくこと。○はらはぬ庭に花ぞちりしく——掃除をしない庭の表面には、散つた櫻花が一面に散り敷かれてゐるの義。この歌は、拾遺集卷十六、雜春に、源公忠が、「延喜の御時南殿にちりつみて侍りける花を見て」と詞書して、「このもりのものみやつこ心あらばこの春ばかり朝ぎよめすな」とあるのを本歌として、公忠は落花に興を感じてゐたのを、ここは落花にことよせて、悲哀寂莫の感をうたつたものである。○今の世のとしげきにまぎれて——新帝の御代の用事の忙しいの心がひかれての意。「今の世」は、新帝後醍醐天皇の御代をさす。「ことしげき」は、事繁きで、多忙なること。用事の多いこと。「まぎる」は心がその方に引かれること。○院には——上皇の御所には。○まゐる人——上皇の御機嫌奉伺に參上する人。○さびしげなる——淋しい有様である。○かかるをりにぞ——斯様な時にぞ。かやうに失意の時にぞ。○人の心もあらはれぬべき——人々の眞情はあらはれるものであらう。前の天皇に、眞に仕へてゐたものであつたらば、御讓位なされたあとでも、度々御機嫌奉伺のために參上すべき筈であるから、一旦御

讓位になされた後にこそ、以前の臣下がどんな心で仕へてゐたかがわかるといふのである。「ぬべき」は、「べき」を強めた言ひ方である。史記汲鄭列傳に、「一死一生乃知交情。一貧一富乃知交惡。一貴一賤交情乃見」の類である。

第二十八段

諒闇の年ばかり哀なる事はあらし。倚廬の御所のさまなど、板敷をさげ、
草の御簾をかけ、布のもかうあらしく、御調度どもおろそかに、皆人
のさうぞく、太刀、平緒まで、ことやうなるぞゆゆしき。

口譯 諒闇の年ほど、しみ／＼と悲哀の感に打たれることはあるまい。喪中の假御所の有様など、板敷を低く下げ、簾の御簾をかけ、それにかけて布の帽額（モカウ）も粗末なもので、さま／＼の御道具類もごく粗略なものであり、出仕する人々の装束、太刀、平緒の

語釋 ○諒闇——リョウアン。天子が父母の喪に服し給ふ一ケ年間をいふ。諒闇の字はもと支那の語にして、漢書に、「陛下即位思慕諒闇」と見え、顏師古の注に、「諒信也。言居父喪、信默三年、不レ言也」とある。即ち、マコトニモダスの義にして、字としては、亮陰、諒陰とも書く。塵添壇藁抄には、「天子の御忌を諒闇と云ふは何ぞ。國主の崩に限りて、諒闇とも諒陰とも云ふ也。諒陰をばマコトニモダスと讀む也。諒ニ陰スとは、天子は日々に萬民の訴を斷ち給ふべきを、一向に黙して不開食ニ故也」とある。○ばかり——ほど。○哀なる——しみ／＼と悲哀寂寥の感にうたれること。○倚廬の御所——諒闇の御忌の間、天子の御籠居になる假りの御所。中古、天

やうなものに至るまで、いづれも平生とは異つてゐるのが、いかにも不吉らしく忌はしいものである。

皇が喪に籠り給ひし時、宮中に建てられた假屋を、倚廬。又は倚廬の御所といった。「倚廬」の語も、もと支那から來た語で、天子にのみ言ふ語でなかつたが、我が國では、天子の場合にのみいふことになつた。禮記（問喪）に、「成壊而歸。不ニ敢入處。居ニ倚廬。哀ニ親之在レ外也。寢レ若枕。塊。哀ニ親之在レ土也」と。又、禮記喪大記に、「父母之喪居ニ倚廬不レ塗。禮記雜記上注に、「廬在中門外東壁。倚レ木爲。故云ニ倚廬」と。○板敷をさげ——板の間の造り方を普通よりも低くするのである。○草の御簾——草で作つた御簾。普通の御簾は竹を細くさいて作るが、諒闇中は特に草で作つた粗末なものをかけたのである。○布のもかう——「もかう」は、帽額と書き御簾の上部の外側に一幅の帛を横に張つて飾としたもの。普通は萌黄色の地に窠の紋を黒く染めたものを用ゐるが、諒闇の間は、鈍色（ニビイロ）の布を用ゐる。これを「布のもかう」といふ。○あら／＼しく——粗末であること。○おろそか——粗末で簡略であること。粗略。○皆人のさうぞく——「皆人」は皆の人で、その事に關係のある凡ての人。即ちここでは朝廷奉仕の人々。百官諸司。「さうぞく」は、装束のこと。助無智裝束抄に、「天皇御服之時ノ事（天子諒闇是也）。殿上侍臣、四位、五位、六位、皆椽（ツルバミ）の袍。但し表袴、下重（シタガサネ）等鈍色（ニビイロ）なり。宿裝束は差貫、袷等皆鈍色。但し袷は黄色花田皆交へ着る也」と。○太刀——黒作り銀金具であるといふ。○平緒——束帶附屬の裝飾具で、袴の上に垂れるもの。もとは太刀の帶で、平たい粗緒になつてゐて、その緒の結び餘りを長く垂れたものだが、後世では帯とは全く別物になつて、只前に垂れた飾物になつてしまつた。平時はそれに桐、竹、鳳凰などの模様を附けるが、諒闇の時は鈍色を用ゐる。傍抄に、「鈍色。諒闇之時用之。重服之人同用之。但無總

敷」と。○ことやう——平生と様子の違つてゐること。異様。○ゆゆし——不吉で忌むべきやうに感ぜられること。

第二十九段

しづかに思へば、よろづに過ぎにし方の戀しさのみぞせむかたなき。人じづまりて後、長き夜のすさびに、何となき具足とりしたため、残しおかしと思ふ反古などやりすつる中に、なき人の手ならひ、繪かきすさびたる見出でたるこそ、只その折のこちすれ。此の比ある人の文だに、久しくなりて、いかなる折、いつの年なりけむと思ふは、あはれなるぞかし。手なれし具足なども、心もなくて、かはらず久しき、いとかなし。

語釋 ○しづかに思へば——靜かに落着いた氣分で考へると。○よろづ——萬事につけて。何事につけても。○過ぎにし方の戀しさのみぞ——過去に起つた事の戀しさだけは。「方」は、それに屬する方面の事の意。「のみ」は、ばかりの意にして、その以外の事はどうにかなるが、是ればかりはどうにもならぬの意。○せむかたなき——何ともしようがない。止めようとしても止め

口譯 心靜かに考へて見ると、何事によらず萬事、過ぎ去つた昔の戀しさばかりは、如何とも止め難いものである。夜が更けて人々も寢しづまつた後、長い夜の慰みに、これと定つたこともなく、そのあたりにある道具類をとり片付け整理し、自分の死後には残して置くまいと思ふ反古など

破り捨てる中に、今は亡き人が、生前何か書き散らしたり、繪など書き興じたものを見つけて出したのは、ただもうそれを書いた當時のやうな氣持がする。又今、現に生きてゐる人の呉れた手紙でも、それがもう久しく年月を経て、この手紙はどうした機會に、いつの年に貰つたのであらうかと思ふのは、感興の深いものである。今はもう亡き人である人が、嘗て生前に使ひ馴れてゐた道具などで、何か

第二十九段

られぬ。○人しづまりて後——夜が更けて、人が寢静まつた後をいふ。○長き夜のすさび——「長き夜」はおそらく秋の夜長をさしてゐる。「すさび」は、手なぐさめ。何といふこともなくして、或る事がしたくなつてすることをいふ。○何となき具足——これと定つたこともなく、その邊にある道具類。「具足」は道具類をいふ。もとは佛教上の語で、佛具一揃のことをいつたといふ。宇治拾遺物語卷二に、「家に行きて、子孫どもに家の具足どもおほせ持たせて、おのれも持ちて云々」とある。近世には甲冑のことも具足といつた。○とりしたため——鳥部山物語に、「具足とりしたため、かのよもぎのやどへたちこえぬ」と見え、とりかたづけ整理すること。○残しおかしと思ふ反古など——自分の死後に残して置くまいと思ふ反古の類。その反古の中には、つまらぬので捨てるものあらうし、又、後の人に見られて困まるから捨てるものもあらう。「反古」は、第二十二段に既出。○やりすつる——破り捨てること。やりは破ること。○なき人の——今はもう死んで、この世に居ない人がの意。「の」は、「が」に同じく主格を示す助詞。○手ならひ——無駄書きをすること。字を書きちらすこと。動詞連用形の中止法で、名詞となつてゐない。この語は必ずしも習字の意でない。○繪かきすさびたる——興に乗つて繪を書いたのを。この「すさび」も、前の「すさび」と同じく、何といふことなく、筆にまかせて繪をかくをいふ。「すさびたる」は、「すさびたる、それを」と譯するとよくわかる。○その折のこちすれ——それを見ると、その字や繪をかけた故人のまだ世に在つた當時のやうな氣持がする。○此の比ある人——今、現に生きてゐる人。「ある人」は、在る人で、或る人の意でない。○文だに——手紙でも。「だに」は、でも、さへも、だけでさへの意で、或る極限の一つを擧げて、他を想像させる語。

の折に自分の(兼好)もとにあるやうになり、以前の所有者はすでに亡き人と代つてゐるのに、道具だけが無心のさまで昔に變らず、久しい後の今日まで残つてゐる。さういふ物を見ると、實にしみんと淋しい氣持になるのである。

○久しくなりて——その手紙を貰つてから、長い時がたつて。○あはれなるぞかし——しみんと感深いものであるよ。○手なれし具足なども——久しく持馴れてゐた道具なども。この道具といふのは亡き人の持つてゐたものを、兼好が何かの機會に自分のものとなし、今それを見ての感想を述べるのである。近頃の注釋書は、文段抄の「我久しくもちなれたる諸道具也」とあるのによつて、自分の所有する道具で始終用ゐ馴れてゐるものとなしてゐるが、是れは盤齋抄にある「なき人の手なれてつかひし器也」とある方宜し。即ち亡き人が嘗て手馴れて使つてゐた道具のこと。○心もなくて——無心で。手紙は人の感情なども籠つて居るが、道具類は全く無心無情で。○かはらず久しき——永くかはらずにあるのが。道具類は人間とは違つて、何時までも昔のまま變らずに居る。それを見るとといふこと。蓋し道具類は不變であるが、人事は常に變化するから、之に對してゐるのの感想や聯想が湧くのである。○いとかなし——しみんと淋しい思ひがする。

第三十段

口譯 人の死んだ後ほど悲しいものは無い。中陰四十九日の間、山里の寺などに移つて、

人のなきあとばかり悲しきはなし。中陰のほど、山里などにうつろひて、便あしく、せばき所にあまたあひ居て、後のわざどもいとなみあへる、心あわただし。日數のはやく過ぐるほどぞ物にも似ぬ。はての日は、いと情

不便な狭苦しい所に、多數のものが集つてゐて、死者のための追善供養などを、皆でしあつてゐるのは、いかにも心の落落かぬ忙しいものである。従つて日數のどしどしと速く過ぎてゆくのは、たとへやうがない。いよゝ最後の日は、何の愛想もなく、お互に語ることもせず、われがちに自分の物を片付けて、方々へちり／＼に別れ行つてしまふ。さてもとの自分の住家にもどつてきてこそ、今更の

なう、互にいふ事もなく、我かしこげに物ひきしたため、ちり／＼に行きあがれぬ。もとのすみかにかへりてぞ、更に悲しき事はおほかるべき。「し／＼の事は、あなかしこ、跡のため忌むなる事ぞ」などいへるこそかばかりの中に、何かはと人の心は猶うたておぼゆれ。

語釋 ○人のなきあとばかり——人の死んだあとほど。○中陰のほど——人の死後の七週間即ち四十九日の間をいふ。「ほど」は、期間の意。佛教大辭典に、「中陰、又、中有ともいふ。此に死して彼に生ずる中間に於て受くる陰形を云ふ。陰は五陰の陰なり。俱舍宗には一定の中陰ありとし、成實宗には無しとし、大乘宗には有無不定とす。謂く極善極惡の人には中陰なく、直に所至に至る。餘は皆ありと。中陰法事、人間の中陰は、身は童子の形の如く、且つ必ず七日を以て一期として本生處に生ずるなり。若し七日の終に未だ生縁を得ざれば、更に中陰の續くこと七日、第二七日の終に本生處に生ず。此の如く七日を一期として、最も長きものは第七期に至り、第七期の終には必ず一處に生ずとなす。依て七七日の間を中陰と稱し、此間に追薦の法事を爲すを中陰法事と云ふ。未だ生縁の定らざる間に於て追福の力を以て善處に生ぜしめむと希ふなり」と。○山里などにうつろひて——山間の村里の寺などに移つての意。「山里などに」と書いたのは、必ずしも山里にばかり行くとは限らないから、斯く書いたのである。「うつろふ」は、移るの延音。○便あしくせばき所——「便あしく」とは不便なこと。「せばき所」は、狭苦しい所。○あ

やうに新しく悲しいことが多いであらう。「かやう／＼の事は、恨み秘してなきないことである。死んで行つた後に残つてゐる人のために忌み嫌ふ事であるよ」などと言つてゐるのを聞くのこそ、かばかり死といふ事實を目前に見せつけられて、人生の果敢ないことに目醒めねばならぬ場合にありながら、何んでそんなに凶を避け、生を食ふやうな忌み事に汲々とするのだ。そのやうな必要はないと思

またあひ居て——澤山の人が一緒に集つてゐて。「あひ居て」の「あひ」は接頭語で、動詞の上について語調をととのへるに用ゐる。○後のわざどもいとなみあへる——「後のわざ」は、死者の冥福を祈る法事。「いとなみあふ」は、皆でしあふこと。この下に「は」の助詞を入れて、「いとなみあへるは」とすればわかる。○心あわただし——心せはしい。心が落着かない。○日數のはやく過ぐるほどぞ物にも似ぬ——多數の人々が、山寺の狭い所に籠つて法事をしてゐるので、忙しいために、日のたつのが速くてたとへるものがないの意。「物にも似ぬ」とは、物に似もつかぬ。似る物もない。たとふるものなし。○はての日——最後の日。終りの日。即ち四十九日目の日をいふ。○情なう——無愛想に。何の愛想もなく。○互にいふ事もなく——各自が自分の荷物の事ばかり考へて取片附けて居るので、自然その事にばかり心をとられ、つひ話などするひまがないのである。この句は下の「我かしこげに物ひきしたため」の句を形容してゐる。○我かしこげにものひきしたため——他人のことは構はず、我すばしこしといつた風に、きつさと銘々自分勝手に。「ものひきしたため」は、持つて来た着物や道具類などを取片附けるをいふ。○ちり／＼に行きあがれぬ——「ちり／＼」は、方々へ別れ／＼に。「行きあがれぬ」は、行き別れてしまふ。「あがる」は、真行下二段の動詞、別れること。「あがる」は濁音でよむ説と、清音で「あかる」とよむ説とがある。○もとのすみか——自分の住家。○更に——事新しくの意。今更に。山里にこもつてゐた頃は、多勢の人々が一緒に法事にいそしんでゐたので、ごた／＼して悲しみも自然に薄いであつたが、さて自分の家に歸つて、靜かに落着いて見ると、事新しく悲しみが湧いて來るといふのである。○しか／＼の事——かやう／＼の事。これ／＼の事。○あなかしこ

はれて、人間の心はやはりどうも、淺ましい厭なものに感ぜられる。

——「かしこ」の語は、「慎むべきである」「秘すべきである」といふ意で、「あな」は嗚呼の意。故に、ああ、慎んでとか、あゝ、秘しての意。○跡のため忌むなる事ぞ——後に残つてゐる人々のためには、忌み嫌ふべき事であるぞの意。友引の日に葬式をすると、又人が死ぬとかいふ迷信などをさす。○かばかりの中に何かは——かやうな人生の果敢ない中に處して。このやうな死を目前に見て、人生の大事の間に立ちながら。「何かは」は、何もそんなにくだらない事は言ふに及ばない。「何かは」の下に、「さる事を言はむ」などの語を補へばよくわかる。○猶うたておぼゆれ——「なほ」とは、人の心はこんなものと、豫て承知はしてゐながらもやはりの意。うたておぼゆれ」は、いやに思ふ。なまけなく思はれる。即ち、人間が生に執着し、自分を護る心は、あさましい、厭なもの、どうせ感じてゐるが、それでもやはり淺ましく思ふの意。

口譯 年月が経つても、少しも故人のことは忘れはしないけれども、古詩に、「去る者は日々に疎し」といふて居ることであるから、忘れぬというても、自然死んだその當時ほど

年月経ても、露忘るるにはあらねど、去る者は日々に疎しといへることなれば、さはいへど、そのきはばかりは覚えぬにや、よしなしごとといひて、うち笑ひぬ。からは、けうとき山の中なかにをさめて、さるべき日ばかりまうでつつ見れば、程なく卒都婆そとばも苦むし、木の葉こふり埋うづみて、夕ゆふべの嵐あらし、夜の月のみぞ、こととふすがなりける。

然死んだその當時ほど

語釋 ○露忘るるにはあらねど——少しも忘れられるわけではないが。○去る者は日々に疎しといへ

に悲しく感じないのか、つまらない冗談を言つて、笑ふやうな事になる。死骸は人里離れた山の中に葬つて、命日などにあたる日だけ参詣して見ると、間もなく卒都婆も苔が生え、落葉は墓標を埋めてしまひ、夕の風や、夜の月だけが、この墓を訪ねてくれる友であつて、その外には誰も訪ねてくれるものはない。(夕方の風が墓のあたりに吹いてくるのや、月光が墓を照らすのを、墓を訪ねるとい

ることなれば——「去る者は日々に疎し」とは、死んでこの世を去つて行く者は、日に／＼と疎遠になり、忘られて行くといふこと。「いへることなれば」は、古語にも、しか／＼といつてあるやうなわけであるからの意。さて、「去る者は日々に疎し」とは、文選卷十五、注二十九、詩類、古詩十九首中の一首に、「去者日疎。生者日以親。出郭門直視。但見丘與墳。古墓犁爲田。松柏摧爲薪。白楊多悲風。蕭々愁殺人。思還故里闔。欲歸道無因。」とある中の句である。なほその注に、「去者謂死(死者)也。來者謂生(生者)也。不見容貌、故疎也。歡愛終日。故親也。」とある。○さはいへど——さうはいふものの。年を経ても決して忘れぬとはいふものの。○そのきはばかりは覺えぬにや——死んだその當時ほどには感じないのか。「そのきは」とは、死んだその時をさす。陳思道の思亭記に、「服盡則情盡。情盡則忘之矣」とある。○よしなしごと——つまらない事。たはいもない事。○うちも笑ひぬ——笑ふやうになる。「うち」は接頭語。「も」は強意の助詞。「ぬ」は、完了の助動詞であるが、「なつてしまふ」といふ程の強い意でなく、圓滑にその働きを強めた趣の語である。○から——死骸。亡き骸。○けうとき山の中——人里離れた淋しく物恐ろしい山の中。「け疎き」の「け」は人氣などの意ではなく、「けおさる」の「け」と同じく、單に「疎し」(離れてゐる)の意で、「け」は接頭語である。○をさめて——葬つて。萬葉集卷九の「あしびきの荒山中に送りおきて還らふ見れば心苦し」の歌注に、契沖曰く、「兼好法師が、からはけうとき山の中にをさめてといへる、もし此歌をよみてかけるにや」といつてゐる。○さるべき日ばかり——然るべき日。即ち亡者の死んだ命日の日だけ。参詣すべき日。○まうでつつ見れば——「まうで」は、「詣うで」で、参詣の意。「つつ」

つたのである。)

は、同じ行動の幾回となく繰返されることをいふ。即ち詣うで詣うでして見ればの意。○卒都婆——梵語、Stupa 高顯、方墳、靈廟などと譯す。而して、塔婆(タフバ)塔(タフ)ともいふ。後世になり「塔」といへば、五重塔、多寶塔の類を意味し、卒都婆、塔婆といへば、細長い板に經文の句など記したものをいふ。この板は形式上は、簡略ながら、その上部を塔の形にしてゐる。もとは恐らく木の角塔であつたらう。更に古くは石塔のもあつた。もと佛舍利を安置する所の稱であるが、後には廣く死骸を埋めてその上に標識を立てたもの、即ち今日の塔婆、又は石塔の稱となつた。ここは恐らく石の卒都婆であつたらう。「苔むし」とあるから、そのやうに考へられる。○苔むし——苔が生える。「むす」は生える意の動詞。「草むす屍」などといふ。○木の葉ふりうづみて——「ふる」は、雨など降るの「ふる」で、木の落葉が澤山降り積つて覆ひかくすをいふ。「うづむ」は、古くは四段の他動詞、後は下二段となつた。○こととふすが——「こととふ」は、訪問する意。「よすが」は、「寄す處」で、寄る邊、ゆかり(縁)の意。即ち縁故ある者。知己、友人。これを單に「便り」と無形に説くよりは、「便りとする人」と有形にする方が、實際の意味に叶つてゐる。ここの意味は、夕の嵐や夜の月だけが訪ねてくれる友であつて、その外には誰も訪ねてくれるものはないの意。「ける」感動の助動詞。

思ひ出でて、忍ぶ人あらむ程こそあらめ。そも又ほどなくうせて、聞傳ふるばかりの末々は、哀とやは思ふ。さるはあととふわざも絶えぬれば、い

口譯 それでも、まだ時々この墓のことを、なつかしく思ひ出して

くれる人（即ち子孫など）ある間こそ、その墓に行きて参詣することもあらう。その子孫などの思ひ慕ふ人も亦、間もなく死んでしまひ、只聞き傳へに、昔こんな人があつたさうだといふやうな子孫の時代になつては、感慨を催すものさへなく。さういふのは、死者の跡を弔ふことさへ絶えてしまふと、もう何處のどういふ人の墓かといふ名前さへわからず、ただ毎年々々の春の草ばかりが、いたづらに茂つてゆくのを、心ある人は、しみじみと感慨を催して見

づれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ、心あらむ人はあはれと見るべきを、はては嵐にむせびし松も、千とせを待たで薪にくだかれ、古き墳はすかれて田となりぬ。そのかただになくなりぬるぞかなしき。

語釋 ○忍ぶ人——「忍」は當字（アテジ）で、「偲ぶ」である。なつかしく思ひ出してくる人。○程こそあらめ——「ほど」は間の意。思ひ出して慕ふ子孫のある間こそ行きて訪ふことがあらう。○そも又ほどなくうせて——その子孫などの思ひ慕ふ人も亦、間もなく死んで。「又」は「亦」とあるべきである。○聞き傳ふるばかりの末々——その亡くなつた人の事は直接知らず、ただ人の話によつて、昔そのやうな人があつたと聞いて居る末孫。文法上正しくは、「聞き傳ふばかり」とあるべきである。○哀とやは思ふ——氣毒とも懐しいとも思はない。「やは」は反語である。○さるは——さういふのは。あはれと思はないやうになると。○あともふわざも絶えぬれば——法事供養などして、死者の後生を弔ふ事も絶えてしまふこと。○いづれの人と名をだに知らず——いつ死んだ、どのやうな人といふ名前さへわからず。○年々の春の草のみぞ——その墓場に、年々春になると新しく生える草ばかりを。白氏文集卷二、續古詩十首中の第二に、「掩涙別郷里。颯颯將遠行。茫茫綠野中。春盡孤客情。驅馬上丘隴。高低路不平。風吹棠梨花。啼鳥時一聲。古墓何代人。不知姓與名。化作路傍土。年々春草生。感彼忽自悟。今我何營々。」と。○心あらむ人——物のあはれを知つてゐる人。人情を解する人。○あはれと見るべきを——しみじみと感慨を催して見るであらうが。○はては——しまひには。一時はさういふ人もあらうけれども、しまひには。○嵐にむせびし松——「嵐」は暴風のこと。嵐が吹くたびごとに、松が寂しい音を立てるをいふ。「むせび」は、むせ泣きをすることで、風が松の梢にあたつて鳴る聲の、いかにも物淋しく悲しいさまであるをいふ。○千とせをまたで——自然のままにしておけば、千年生きる筈の松が、さういふ千年の壽命にも達しないで。○薪にくだかれ——墓畔の松が、薪として摧かれる。文選古詩十九首中の一（前掲の去る者は日々に疎しの條參照）の「松柏摧爲薪」による。○古き墳は云々——古墓墳は鋤で掘りかへされて。これも前掲の文選古詩十九首の一に、「古墳黎爲田」による。○そのかただに——「かた」は、あとかた、形跡。人を葬つた所だといふ形跡さへもないやうになつてしまふ。○なくなりぬる——なくなつてしまふ。

るであらうが、しまひには、その墓畔に立つて、強風の吹く度毎に寂しい音を立てて居た松も、千年の壽命を保つこともなく、空しく摧れて薪となり、古い墳墓は鋤で掘りかへされて、田圃となつてしまふ。斯くして、墓の跡形さへもなくなつてしまふのは、まことに悲しい事である。

第三十一段

口譯 前夜雪が降つて、面白い景色をなしてゐる朝、人の所へ言つて遣らねばならぬ用事があつて、手紙をや

雪のおもしろうふりたりし朝、人のがりいふべき事ありて、文をやるのとて、雪の事、何ともいはざりし返事に、「此の雪いかを見ると、一筆のたまはせぬほどの、ひがしからむ人の、仰せらるる事、聞入るべきかは。返すは口をしき御心なり」といひたりしこそ、をかしかりしか。今はなき人

なれば、かばかりの事も忘れがたし。

るのに、雪の景色に
いては、何とも言はな
かつたところが、その
返事に、「今朝のこの雪
をどう見るか、一寸
一言位仰せられてもよ
ささうなものを、一筆
も仰せられないやうな
頑冥な人の仰せられる
事は、誰が聞くもので
すか、聞き入れません
よ。くれぐれもなまけ
ない御心である」と書
いてあつたのこそ、實
に面白いことであつ
た。その人は今は亡き
人であるから、これ位
の一寸とした事も忘れ
られない。

語釋 ○雪のおもしろうふりたりし朝——雪が面白く降つたその朝。前夜雪が大層降つて、如何にも雪景色の面白かつたその日の朝の意。雪の降り方が面白かつた翌朝の意ではない。○人のがり——人のもとへ。「がり」は、「があり」の約で、「のもとに」といふに當る。古くは「の」の字はなく、人がり、妹がり、いろせがりと云つた。○いふべき事ありて——何か言つてやらねばならぬ用事があつて。○文をやる——手紙を送るといふので。「必要な用事だけは書いたが」といふやうなことが、「文をやる」としての下について、更に下の語句につづく意味である。「文」(フミ)は、ここでは、消息。手紙のこと。○雪の事何ともいはずりし返事に——その手紙の中には、ただ用事のむきだけ書いて、雪景色のことは、何とも書いてやらなかつた手紙の返事に。○此の雪いかが見る——この雪景色をどう見るか。よい雪景色ではないか。歌でも出来たか、といふやうな意味を含ませた句である。○一筆のたまはせぬほどの——一寸一文句も仰せられぬやうな。○ひが／＼しからむ人——心のひがんでゐる人といふので、ここでは、物の情趣のわからない人。○聞入るべきかは——聞き入れられるものか。即ち誰が聞くものですか、聞き入れませんか。○かはは反語。○返す／＼も——くれぐれも。實にどうも。「も」は、感歎の助詞。○口をきし御心——情ない御心。残念な御心。○をかしかりしか——面白かつた。○かばかりの事——これくらゐの事。こんな一寸した事。

第三十二段

口譯 九月二十日頃、
或る貴人に誘はれて、
夜明け方まで月見をし
て歩いた時に、途中で
その高貴な人が、ふと
思ひ出しなかつて、或
る女の家へ立ち寄ら
れ、取次を乞はせて、
その女の家にお入りに
なつた。私兼好は外に
待つてゐて、その女の
家の様子を見てゐる
と、荒廢した庭は夜露
が一杯で、それに又、
わざとらしくない、不
斷からの香りがしんみ
りと漂つて、世から隠

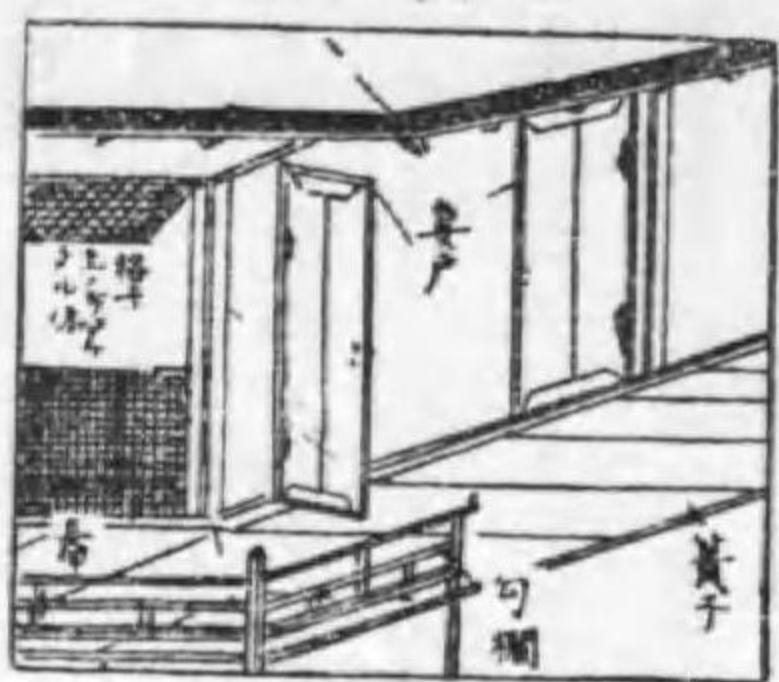
九月二十日の比、ある人にさそはれ奉りて、明くるまで月見ありく事侍りしに、おぼし出づる所ありて、あないせさせて入り給ひぬ。あれたる庭の露しげきに、わざとならぬ匂しめやかにうちかをりて、忍びたるけはひ、いと物あはれなり。
よきほどにて出で給ひぬれど、なほことさまの優におぼえて、もののかくれより、しばし見わたるに、妻戸を今すこしおしあけて、月見るけしきなり。やがてかけこもらましかば、くちをしからまし。跡まで見る人ありとは、いかでかしらむ。かやうの事はただ朝夕の心づかひによるべし。其の人程なくうせにけりと聞き侍りし。

語釋 ○ある人——或る貴人。特に、「貴人」と書いてないが、「さそはれ奉り」とか、「おぼし出づる」「あないせさせて入り給ひぬ」など敬語を使つてゐる所からして考へると、この「ある

れて静かに住んでゐる様子は、大變に情趣がある。その高貴な人はそんなに長くもなく、恰度よい加減の時間で出て來られたが、自分（兼好）は、それでもなほ、そのあたり全體の容子が優美に思はれたので、なほ物蔭から暫く伺つてゐると、女はこの來客を送り出して妻戸を更にもう少し押し明けて月見をしてゐる様子である。これが若し客（貴人）を送り出すなりすぐに、戸をしめて奥へ引籠つてしまふやうならば遺憾なことであらう。人の出たあとまで、斯うし

人」は、或る貴人である。○さそはれ奉りて——さそはれて、そのお伴をして、「誘はれ」の「れ」は受身の助動詞。「奉り」は先方を尊敬する助動詞。○明くるまで——夜が明けるまで。陰曆二十日頃の月であるため、月の出るのが遅く、大體午後八時頃にそろ／＼出て、西に入らないうちに夜が明けるのである。○おぼし出づる所ありて——立寄るべき所のあつたのを、ふと思ひ出されたのである。初はそのつもりでなかつたのが、歩いてゐるうちに、貴人がふと思ひ出したのである。「所」は、場所で、ここは女の家をさす。○あないせさせて——「あない」は、「案内」で、取次を乞ふこと。取次を乞はせて。即ちお伴の人に、「御免下さい」といふやうな事を言はせたのである。文法上ここは、「案内す」といふ佐變の動詞に、使役の助動詞「さす」が附いたもの。又「さす」を敬語の助動詞とする説もある。○あれたる庭——荒れて草などの生ひ茂つてゐる庭。「露しげきに」は、露、繁、きに、で、草の上に露が一杯置いて居るさま。このには、反戻の思想ではなくして、それに加へて又の意である。○わざとならぬ句——今夜に限つて殊更に香を仕立てたでなく、不斷いつも焚きくぶらして、自然と落着きのあるゆかしい薫り。○しめやかに——しみりと。おちつき物静かなさま。鳥部山物語に、「わざとならぬ句しめやかにうちかをりて」と、全く同じ文句になつてゐる。○忍びたるけはひ——世を忍んで住んでゐる様子。世間から隠れて静かに住つてゐるその有様。この或る貴人の立寄つたひとつそりとした家に住んでゐるのは女であることがわかる。○いと物あはれなり——いかにもしみりとして情趣が深い。○よきほどにて——丁度よい加減の時間で。あまり長くもなく、暫くしての意。○出で給ひぬれど——貴人が女の家から出て來られたが。○なほ——貴人は女の家から出て來られたが、自分はそれでもなほ。

て見てゐる人があるとは、彼の女自身はどうして知らうか、無論そんな事は考へもしない事であらう。斯くの如きことは、俄にやらう妻戸



としても出来るものでなく、ふだんの心掛けによることである。この風流優雅な女は、その後、間もなく死んでしまつたといふことで

○ことごま優におぼえて——「ことごま」は、事の様子。その全體の様子が、いかにも優雅なやうに思はれたので。○もののかくれより——物の陰。立ち去りにくくて、兼好が内の女に氣づかれぬやうに、何かの蔭に立つて、なほ暫く見てゐたといふのである。○妻戸——兩方へ開く戸。ひらき戸。又は舞戸ともいふ。部屋の端、廊下などの行きづまつた所にあつて、出入の口になる戸。家屋雜考に云ふ。「妻戸は殿の四隅にありて、主客ともに出入する戸口なり。端戸の義なり。ツマはすべて物のはしをいふ名なればなり。さて其の作りは、板戸を兩開きにして内外共に金具あり。開く時は、外の方へ開き、其の戸のあふらざる爲に掛鐵（カケガネ）をかけてとめおく。是をサルツナギといふ。閉づる時は、又内にかけてがねありて、しめおく事なり」と。○今すこしおしあけて——貴人が出られた時少しあけたが、それを又その女が今少し餘計にあけての意。○月見るけしきなり——「けしき」は容體。客即ち貴人を見送りながら、女が月を見てゐる様子である。○やがて——そのまますぐに。貴人の去るや否やすぐに。今いふ「やがて」は、幾らか時間間に餘裕のある意であるが、「やがて」の本義は、そのまますぐにの義である。○かけこもらましかば——内に引籠つたならばの意。一説に掛金をかけて閉ぢ籠ると解するものもある。これも亦意通ずる。されど「かけ」を接頭語とする前説の方妥當であらう。第六十段に、「眠たければ晝もかけ籠りて」とある。更に又、駈け籠るの意に解する説もあるが、是れは宜しくないと思ふ。○くちをしまし——遺憾であらう。「ましかば……ましかば」は現在さのやうでない事を、假にさうあるとしたらと假設していふ慣用形である。○跡まで見る人ありとはいかでか知らむ——貴人はもう歸つてしまつたのであるから、その後の女の様子まで見てゐる人があるとは、彼の

あつた。
女自身はどうして知らうか、無論そんな事は、女は考へもしないことであらう。○朝夕の心づかひによるべし——平素の心掛けによつて、かかる趣味風情が出来ることなのであらう。

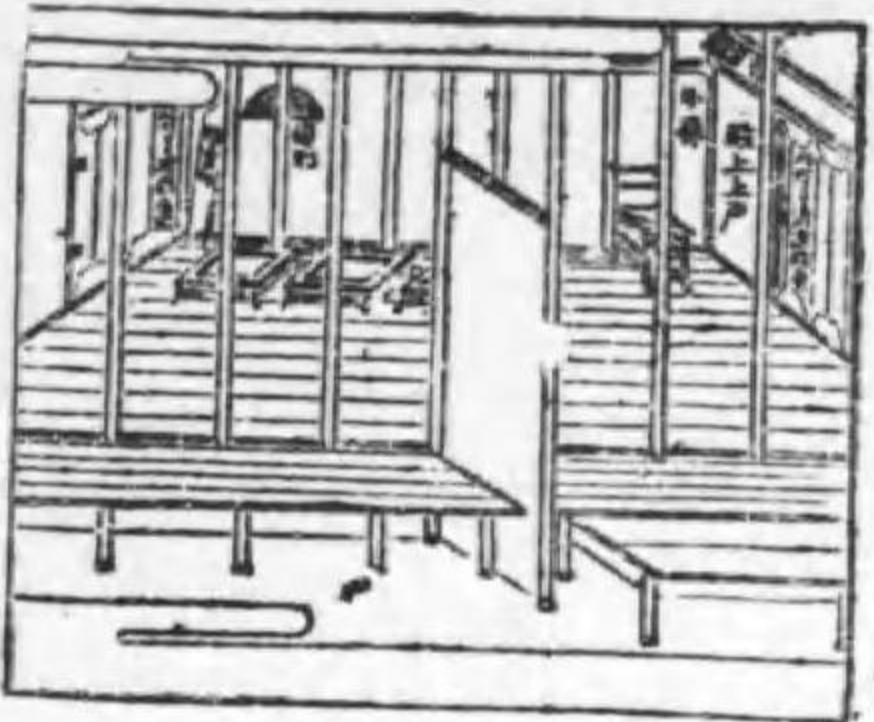
第三十三段

口譯 今の内裏を御造營になつて、故實をよく知つてゐる人達に見せられたところが、何處も非難すべき所はないといつたので、最早御遷幸の日も近くなつた。その時に玄輝門院が御覽になつて、「閑院殿の櫛形の穴は、圓くて縁(フチ)もないものであつた」と仰せられた。よく御幼少の時

路の内裏である。それは閑院殿は正元元年五月二十二日に焼けて、その後再造されてゐない。以前建長元年に閑院殿が焼亡したとき、後深草帝は、冷泉富小路殿(富小路の東、二條の北、京極の西、冷泉の南にある)を、始めて一時は皇居となされた。花園天皇の時に至り、始めて此所を内裏とお定めになり、正和元年(續史愚抄)六月二日造營敷地の評定あり、二年十一月二十四日造營事始、四年二月十日上棟式、文保元年四月竣成した。ところがこの新内裏は、延元元年(建武三年)正月十日、足利尊氏の亂で、主上(後醍醐帝)が叡山へ行幸になつた間に、細川定禪が市中に放つた火によつて焼けてしまつた。梅公論に、「案の如く十日の午の刻計に、山崎を打破りて、久我、鳥羽に攻入り火を上げしかば、所々京方皆逃上る間、同日の夜、山門へ臨幸ある。即ち内裏焼亡しけり。近頃は閑院殿より以來は、これこそ皇居の御名残なりしに、こは如何にと、驚き悲しまぬ人ぞなかりけり」とあるのは、即ちこの時のことである。文保元年御造營から僅かに二十年で烏有に歸したわけである。且つこの後は再造にならなかつた。思ふに經平が建武三年に焼失した冷泉萬里小路の内裏といふのは、畢竟、冷泉富小路内裏を誤つたものである。(佐野保太郎氏説)○作り出されて——造營なされての意。この冷泉富小路の内裏が竣工したのは、文保元年四月で、その七日に新内裏遷幸の御祈願が始められ、十八日には御裝束始があり、翌十九日は早朝、御帳臺を新内裏に立て、この日主上(花園帝)は二條の皇居からこの新内裏に御遷りになつた。○有職の人々——故實に通じた人々。○いづくも難なし——何處にも非難すべき所はない。○遷幸の日——天皇のお遷りになるの日。文保元年四月十九日。四月二日の御豫定であつたのが延びたのである。○玄輝門院——左大臣藤原實雄の女。御名は悋子。増鏡などに、「東の御方」

の事を御存じあそばされてゐられたことはまことに御えらく恐れ入つたことである。今度の新御殿(冷泉富小路殿)のは、櫛形の窓に、葉が入つて、木で縁(フチ)をしてあつたので、それは間違であるから、作りなほされた。

補 「玄輝門院」は、正徹本、傳幽齋本には、「玄輝門院の」とある。



楯形の穴。

上、圓く縁もなきもの下、葉の入りたるもの



とある方である。後深草院脱屣後、院の寵愛を得、伏見帝を生み奉り、帝の即位後、院號を受けたまふ。正應四年八月尼となられ、元徳元年八月薨去。御年八十四。○閑院殿——二條の南、西洞院の西に在り。もと藤原冬嗣の邸であつたが、高倉帝より後深草帝まで皇居たりし里内裏。度々地震や火事のために焼亡破損し、その度毎に修理造營されたが、後深草天皇建長元年二月炎上の後、二年七月造營、三年六月竣工したが、これが又正元元年五月二十二日に焼亡した。建長元年御造營より僅か九年にしかならない。この御殿は嘗て、高倉天皇が始めて皇居と定められてから、九代九十一年間に、火災にあふこと實に三回、今度の焼亡を最後として、再び御造營になることはなかつた。さてこの御殿の焼亡した正元元年には、玄輝門院はまだ十四歳の御幼少でゐらせられた。爾來文保元年冷泉宮小路内裏完成まで五十九年を隔ててゐる。それでも玄輝門院には、少女時代に見られた閑院殿の楯形の穴の事をよく覚えて居られたといふので、その非凡な記憶力と注意力とに感心して書いたのである。從來の注釋書の如く、單に故實に通じてゐられたと褒めるのは當らない。玄輝門院のこの逸話は花園院宸記文保元年三月に出でゐる。○くしがたの穴——「くしがた」は、楯形である。今日の婦人の使ふ楯の形をした窓である。古來の諸注釋書には、古代の楯のやうな形の窓とあるのは誤である。○まろくふちもなくぞ有りし——閑院殿のは形が圓くて縁(フチ)がついて居なかつたといふのである。○いみじかりけり——感服の至りである。えらいことで恐れ入つた。○是はえふの入りて——「是は」は、今度の新御殿(冷泉宮小路内裏)の楯形の穴をさす。「えふ」は、「葉」の字を書く。窓の上部に、花瓣のやうに入り込んでゐる刻みをいふ。葉の入るを入角(いりがく。いりずみ)と云ふ。○木にてふちをしたり——

穴の周圍に木で縁(フチ)を附けたのである。葉を入れたり、縁をつけたりするのには、後世の寺院の建築より影響を受けたものである。

第三十四段

甲香かひかうは、ほら貝のやうなるが、小さくて、口のほどの細長ほそながにして出でたる貝のふたなり。武藏の國金澤かなざはといふ浦に有りしを、所ところの者はへなたりと申し侍るとぞいひし。

語釋 ○甲香——螺貝の蓋(フタ)を粉末にして煉香の一成分となすもの。又その貝の名にも轉用す。蕪集類抄上に、「梅花。擬梅花之香也。春尤可用之。閑院左大臣。沈八兩二分。占唐一分三朱。甲香三兩二分。甘松一分。白檀二分三朱。丁子二兩二分。麝香二分。燕陸一分」とある。又同下卷に、「甲香、一名流螺」と。南州異物志に、「可合衆香燒之。便益芳。獨燒之則臭」とある。もと海螺の蓋(フタ)で、所謂醋貝の事である。類聚雜要抄にその製法を記して、「漬美酒。經一宿取出。削去内外膚。更煎。甘葛煎塗甲香。燥火令色黃。但於甘葛煎。以微火煎之。上自有皮之時用之。一劑六合。甘葛煎用堅美。燥甲之必用微火。以鐵白春篩之。燥甲宜蜜。無蜜用甘葛煎不宜。」とある。○ほら貝——法螺貝のこと。「ほら貝の

口譯 甲香といふ香は、貝からとつたもので、その貝は法螺貝(ホラガヒ)のやうで、もつと小さくて、口の所が細長くて前へ突き出てゐる貝の蓋(フタ)である。武藏の國の金澤といふ所の海岸にあつたが、それをその土地の者は、「へなたり」と申しますと言つた。

やうなるが」は、「ほら貝のやうなる貝が」の意。○小さくて——法螺貝よりは小さいこと。○口のほどの細長にして出でたる貝のふた——口の所が細長くなつて出たやうになつてゐる貝の蓋。○武蔵の國金澤——神奈川県久良岐郡、横須賀近くに在る。金澤文庫のあつたところ。兼好はここに二度行つたことがある。○浦にありしを——海岸にあつたが、それをの意。これは兼好が嘗て東國に行つた時、金澤で實物を見たのであらう。○所の者——金澤の土地の者。○へなたりと申し侍る——兼好に是れは何といふ貝かと尋ねられたときに、金澤の土地の者が答へた言葉である。香の事は當時の上流社會に行はれてゐたが、その香に用ゐる甲香がどのやうなものであるかは、その世の人は少しも知らなかつたのであらう。そのため兼好も甲香に使はれる貝を賞見したので、珍らしくてここに書き記したものである。

第三十五段

手のわるき人の、はばかりす文かきちらすはよし。見ぐるしとて、ひとにかかするは、うるさし。

語釋 ○手のわるき人——筆蹟のまづい人をいふ。「人の」は、「人が」の意。○はばかりす文かきちらす——「はばかりす」は、憚ることなく。遠慮なく。「文」は、手紙のこと。かきちらすは、筆にまかせて、どん／＼書いてゆくこと。○見ぐるし——自分の手蹟の拙く醜きをいふ。○

口譯 筆蹟の悪い人であつても、構はずにどし／＼手紙なんか書くのはよい。自分は字が下手であるからとて、人に書かせるのは煩は

しく厭なものである。

うるさし——煩はしく厭はしい。厭味なものだ。書かされる本人が、うるさしと感ずるのでなく、第三者たる兼好から見ても、くだらぬ事に小面倒な事をするのを識つたのである。第一段の終に、「手など拙からず走り書き云々」とあり、第二百二十二段に、「手かくこと旨とすることはなくとも、之を習ふべし、學問にたよりあらむ爲なり」とある。兼好は元來習字の重んずべきものであることを言つてゐる。然しそれが拙であるからとて、人に代筆させたり、書かないのはよくない。何もみえを張る必要はない。そのやうなときは、悪筆でもどし／＼書くのが、その人の偽らざる眞面目さがあらはれてゐてよいといふのである。

第三十六段

久しくおとづれぬ比、いかばかりうらむらむと、我がおこたりおもひしられて、言葉なきこちするに、女のかたより仕丁やある、ひとりなど、いひおこせたるこそ、ありがたくうれしけれ。さる心ざましたる人ぞよきと人の申し侍りし、さもあるべき事なり。

語釋 ○久しくおとづれぬ比——男が久しく、女のもとへ訪ねて行かなかつた頃。「おとづれ」は、訪問、たよりの意。手紙などで、安否を問ふ場合にもいふが、ここは自身で訪ねて行く意に

口譯 嘗ては親しくしてゐた女の所へ、久しく訪ねて行かなかつた頃、女の方ではさぞ、男（自分）をどんなに怨んで居ることだらうと、自分が永く訪ねなかつた怠慢がすまないやうに氣づいて、何と

も言ひわけのないやうな氣がする時に、思ひがけなく、女の方から、「あなた(男)の方に、下部がございましたら、一寸一人お貸し下さい」などと言つてよこしたのは、このたよりによつて、男の御無沙汰を少しも恨んでゐなかつたことがわかつて、實際珍しく嬉しい氣持のするものである。女といふものは、些細なことにも恨むものであるのに、今のやうな氣立てをした女はよいものであると、或人が自分(兼好)に話したことがあるが、まことに或人のいふ通り尤もなことである。

用ゐてゐる。○いかばかりうらむらむ——女がどんなに我を恨んでゐるだらう。ここは勿論、相手の女と戀愛關係があつたのが、何かの事情で、男が女の方へ永らく行かなかつたのである。○我がおこたりおもしろられて——男が女に對して、自分が随分怠慢であつたと氣がついて。「おこたり」は、怠慢とか御無沙汰の意。○言葉なき心地する——言ひ譯する言葉がないやうな心地。○仕丁やある——仕丁がありますかの意。「やある」は、「あるや」の意。そちらに召使がおありでしたら、少し頼みたい用事があるから一人貸して下さいといふのである。「仕丁」とは、使丁とも書く。雜役に使ふ召使をいふ。主殿寮に屬し、禁中を掃除し、或は庭火を焚く等の事を務む。又親王、大臣家等にも之を置く。海人漢芥に、「仕丁裝束のこと、親王、大臣家は退紅、公達等の家々白丁也。僧中にも家門に隨ひ可_レ用_レ之」と見えてゐる。されば白丁といふも退紅といふも同じく仕丁のことで、その裝束によつていつたのである。又、家々に使はれる小使風のものもいつたのである。○ひとり——もし仕丁がありましたら、一寸その一人を貸して下さい。○いひおこせたる——女の方で、使者に依頼の手紙をもたせて、そのことを言つてきたのである。○ありがたく——在りにくいので、このやうな女は世間に珍らしいといふのである。感謝する意のありがたくではない。○さる心ざましたる人——「さる」は、然るで、そのやうな氣立てをした人。さつぱりとして物恨みなどしない女をさす。「人」は女のこと。○人の申し侍りし——人の申し侍りし事はの意で、連體形止め。○さもあるべき事なり——さうあるべき事だ。如何にも尤もなことだ。「さる心ざましたる人ぞよき」といつた或人の言葉に、兼好が共鳴してゐるのである。

第三十七段

朝夕へだてなくなれたる人の、ともある時、我に心おき、ひきつくるへるさまに見ゆるこそ、今更かくやはなどいふ人も有りぬべけれど、なほげに——しくよき人かなとぞおぼゆる。うとき人の、うちとけたる事などいひたる、又よしと思ひつきぬべし。

口譯 平素始終、隔意なく馴親しんでゐた人がどうかした折に、自分に對して氣兼ねをし、禮儀正しく改まつた様子に見えることがある。さうした時に、「親しい打解けた間柄で、今更そんなに儀式ばらなくてもよいだらう。そんな必要はない」などといふ人もあるだらうが、私はやはりそのやうな人を誠實な品位のよい人だと思ふ。

語釋 ○朝夕へだてなくなれたる人——「朝夕」は、ふだん、平生、平素の意で、今日いふ「朝夕」の意でない。平生心の隔てなく馴れ親んでゐる人。深く打解けた親密な間柄の人。○ともある時——ひよつとした時。どうかした場合。○我に心おき——自分に對して氣がねをする。○ひきつくるへるさま——容姿を正し、行儀正しく振舞ふこと。改まつた態度をすること。○今更かくやは——「今更かくやはある」の略。今更そんなにするに及ばぬ。「やは」は反語である。平素打解けた間柄であるのに、何も今となつて、そんなに他人行儀をするに及ばないの意。○有りぬべけれど——あるに違ひないが。「あるべけれど」を強めて言つた形。○なほげに——しくよき人かなとぞおぼゆる——やはり誠意な、品位のある人だと思ふ。「なほ」は、やはりといふ副詞で、下の「おぼゆる」にかかる。「げに／＼しく」は、尤もらしい。篤實らしい。誠實らしい

又それと反對に、平素何にも親しくない人が、ふとした機會に、打ちくつるいだ事など語ることがある。このやうな人も亦、よい人だと思ふやうになるだらう。

の意にして、この句は、下の「おぼゆる」に係るための中止形とも見られるが、當時の古文の用例から考へると、「よき人」にかかるものとするがよい。又「よき人」は、「上品に情趣のわかつた人」と譯するよりは、善良な人、品位のある人と譯するがよい。○うとき人——親密でない人。平素あまり心安くない人。これは前の「へだてなくなれたる人の」に對立してゐる句であるから、同時にこの語の上に、「朝夕」(平素)といふ語のあるものと考へねばならぬ。「人の」の「の」は、「なれたる人の」の「の」と共に、主格を示す助詞で、「人が」の意。○うちとけたる事などいひたる——うちくつるいで冗談などをいふことである。この句も前の「我に心おきき、ひきつくるへるさまに見ゆるこそ」の語に對立す。従つてこれも同時に、この上に、「ともある時」の語のあるものとして見るがよい。○又よしと思ひつきぬべし——このやうな人も亦、よい人だと思ふやうになるだらう。「又」は、かういふ人も亦の義。「よしと」は、立派な人である。「思ひつく」は、慕はしく思ふの意もあるが、ここは上に「覺ゆる」とあるのに對立してゐるのであるから、さほどまで深い意味に考へず、單に、考へ思ふやうになるだらうと譯するがよい。

第三十八段

名利につかはれて、しづかなるいとまなく、一生をくるしむることおろかなれ。財おほければ、身を守るにまどし。害をかひ、わづらひをまねくな

口譯 名聞利欲に追ひ使はれて、閑靜な暇とてなく、あたら一生を

かだちなり。身の後には、金をして北斗をささふとも、人のためにぞわづらはるべき。おろかなる人の目をよろこばしむるたのしび、またあぢきなし。大なる車、肥えたる馬、金玉のかざりも、こころあらむ人は、うたておろかなりとぞ見るべき。金は山にすて、玉は淵になぐべし。利にまどふは、すぐれておろかなる人なり。

苦しめるのは、馬鹿なことである。財産が多いと、それに心を用ひてゐる結果として、身の行ひを正しく守つてゆくのが不十分である。財寶があると、そのために危害を招き、面倒をひき起す媒介物となる。死後に黄金を澤山積みかさね、それが天にとどくほどになり、北斗星を支える程の遺産を残したところでその遺産の黄金の處置のことで、子孫からは厄介がられるであらう。黄金は愚なる人の

語釋 ○名利——名譽と利益。名聞利慾。○つかはれて——驅使されて。奴隸となつて。「れ」は受身の助動詞。浮世の名聞利慾のために心が奪はれて、東奔西走顛覆してすごすことをいふ。寒山詩下、拾得詩に、「……終朝役名利得致身。形容已顛顛。況復不遂者。」と。○しづかなるいとまなく——心の平靜に落着く暇なく。○一生をくるしむる——生涯を苦しめる。「しむる」は使役の助動詞。愚迷發心集に、「名利大毒、惱二世之身心。」と。○財——「タカラ」とよむ。財産。財寶。○身を守るにまどし——「まどし」は、「貧し」の轉音。財産が多いとそれに心を苦しめてゐる結果として、身の行ひを正しく守つてゆくことが不十分になる。○害をかひ——危害を招くこと。買ふは、「怨みを買ふ」の買ふと同じく、招くとか、求めること。文選の阮嗣宗の詠懷詩に曰く、「膏火自煎熬、多財爲患害」と。文選卷七、註十四に、張茂先の鶴鶴賦に、「伊茲禽之無知兮、何處身似智。不懷寶以買書兮、不飾表以招累。」とある。○わづらひをまねくなかだち——「わづらひ」は、面倒、迷惑、苦勞のこと。面倒をまねき起す媒介物。前注

目を喜ばしめる楽しみとなるが、是れが又つまらない。大きく立派な牛車とか、よく肥えた立派な乗馬、金銀珠玉の装飾も、愚人の俗眼を喜ばしめるが、思慮ある人はあゝ厭な感かな物と思ひ見るであらう。黄金は山に捨て、珠玉は深淵に投げ捨てよ。利慾に惑ふことは格別愚な人間である。

参照。○身の後——死後。○金をして北斗をささふとも——北斗は北斗星 Dipper のこと、大熊座にある七星のこと。斗状をなして並んでゐる。黄金を積み重ね、それで以て天までとどき、北斗星をささへる程に遺産を残したとて。「して」は以ての意。北斗は多く動きなきの意味に使ふが、ここは單に、高い天の意。白氏文集廿一、勸酒の詩に、「勸君一杯君莫辭。勸君兩杯君莫疑。勸君三杯君始知。面上今日老昨日。心中醉時勝醒時。天地迢遙自長久。白兔赤烏相趁走。身後堆金挂北斗。不如生前一樽酒。君不見春明門外天欲明。喧々歌哭半死生。遊人駐馬出不得。白纓素車爭路行。歸去來頭既白。典錢得用買酒喫。」と。○人のためにぞわづらはるべき——その金の處置で、後の人からは厄介がられるであらう。その財産のために、子孫が財産争ひや、遊惰の風を生ぜしめることをさす。「わづらふ」は、難み思ふ。悩み苦むこと。○目をよるこぼしむるのしび——目を喜ばせる楽しみ。黄金の力にて贅澤をなし、華美なものなどを遊ぶ楽しみ。たのしびは楽しみに同じ。○またあぢきなし——それも亦つまらない。あぢきなしは、つまらぬ。何の面白味もない。○大なる車。肥えたる馬——大きく立派な牛車とか、よく肥えた立派な乗馬。何れも「金玉のかざり」と共に、富豪の贅澤で、愚人の眼をよるこぼせるものである。小學外篇嘉言范魯公の誠見姪八百字の詩に、「舉世賤清素。奉身好華侈。肥馬衣輕裘。揚々過閭里。雖得市童憐。還爲識者鄙。」と。「大なる」は、諸本、「おほいなる」とあるが、第四十五段に、「おほきなる榎の木云々」と假名書きにしたところがあるから、「おほきなる」とよむ方よからん。○こころあらむ人——思慮のある人。物の情理のわかつた人の意。「心ある人」といふべきを圓滑に叙したものの。○うたておろかなりとぞ見るべき——「うたて」

は、ああいやだ。あまり情ないの義。いやに愚なる人と見るだらう。「うたて」は嫌悪の感情の伴なつてゐる副詞。ここは前掲の范魯公の詩の意味で書かれてゐる。○金は山にすて、玉は淵になぐべし——「淵」は、河海の水の深いところをいふ。貴い財寶でも捨ててしまへといったのである。文選卷一、班固の東都賦に、「女修織紙。男務耕耘。器用陶匏。服尙素玄。恥織美而不服。賤奇麗而不珍。捐金於山。沈珠於淵。」と。莊子天地篇に、「藏金於山。藏珠於淵。不利貨財。不近富貴。」と。又、新語に、「舜棄黃金於嶠嶠之山。禹捐珠玉於五湖之淵。」とあるのによる。○すぐれて——特に。この上なく。

うづもれぬ名を、ながき世に残さんこそ、あらまほしかるべけれ。位高きやんごとなきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。愚につたなき人も、家に生れ、時にあへば、高き位にのぼり、おごりをきはむるもあり。いみじかりし賢人、聖人、みづからいやしき位にをり、時にあはすしてやみぬる、またおほし。ひとへにたかきつかさ位をのぞむも、次におろかなり。

語釋 ○うづもれぬ名——不朽の美名。身は土中に埋まつても、芳名は永く世の中に残り留めること。白氏文集卷二十一に、「顯故元少尹集後二首」の中に、「遺文三十軸。軸々金玉聲。龍門原上土。埋骨不埋名。」と。○ながき世——永久の後世に残す。○あらまほしかるべけれ——

白譯 不朽の名聲を永く後世に残すといふ事は願はしい事であらう。然し位が高く身分の尊いのを、必ず立派な人といはれようか、さうでもあるまい。愚かな劣つた人でも、名門の家柄に生れ、よき時の運命に遭遇する

と、出世して高き位に上り、奢侈を極める者もある。又之に反して、立派な賢人聖人でも、我が身は卑しい位に居り、不運のまま終に一生涯を終つた者も亦澤山ある。一途に高位高官を望み願ふのも、利慾を求めるに次いで馬鹿なことである。

口譯 高位高官に上つて名譽を後世に残さうなどと思はないで、知

願はしい事であらう。この語の次に、「されど」などの語を入れて解するがよい。○位高くやんごとなきをしも——位の高く尊い人をの義。「やんごとなきをしも」は「やんごとなき人をしも」の略。「しも」は強意の助詞。○愚につたなき人——愚で且つ劣つた人。には重なる意の助詞。つたなきは、拙きで、劣つてゐること。○家に生れ——家は名門。即ち門閥の家に生れること。○時にあへば——よき運命に遭遇すると。運がよいと。○いみじかりし賢人聖人——學徳すぐれた賢人や、學徳完全圓滿なる聖人でも。暗に聖人は孔子、老莊をさし、賢人は孟子、許由、孫農などをさすものか。○みづからいやしき位にをり——みづからは、非常に偉い人で、後世に名を残した人でも、その人自身自身の意。文選卷廿二、六臣注四十三、嵇康の「與山巨源絶交書」の中に、「老子莊周、吾師也。親居賤職。柳下惠、東方朔、達人也。安乎卑位。吾豈敢短之哉」と。○時にあはずして——よき時の運命に遭遇しなくて。運悪くして。○やみぬる——一生を終つてしまふ。やみぬるは「やみぬるものも」の義。○ひとへに——一途に。専ら。○たかきつかさ位をのぞむも——「つかさ」は官職の意。高位高官に上らうと望むことも。○次におろかなり——利慾を求めるに次いで。前節の終りに、「利にまどふはすぐれて愚なる人なり」とあることに次いで愚だといふのである。

智恵と心とこそ、世にすぐれたる譽も残さまほしきを、つらくおもへば、ほまれを愛するは、人の聞きを喜ぶなり。ほむる人、そしる人、ともに世

識と徳行とは是れこそ世にすぐれた名譽を後世に残したいものであるが、然しよく／＼考へて見ると、この名譽

を好むことは、我が智徳を人が聞いて褒めて呉れるのを喜ぶのである。ところが我を褒めて呉れる人も、我を毀る人も、何れもこの世に永住はしない。その毀譽を聞く人も、亦又直ぐにこの世から死んでゆく。されば誰に對して恥づかしく思ひ、誰に知られるを願はうか。そのやうな必要は

にとどまらず、つたへきかむ人又々すみやかに去るべし。誰をかはぢ、誰にかしられむ事をねがはむ。譽はまた毀の本なり。身の後に名残りて、さらに益なし。これをねがふも次におろかなり。

語釋 ○智恵と心——智恵は、知識、才智。心は、賢徳。道徳。徳行のこと。前節には高位高官の人物のつまらないことを言ひ、ここでは精神的の知識、賢徳に就いて述べてゐる。智恵は今日智慧とも書くが、古寫本は多く智恵と書いてゐる。○世にすぐれたる譽も——世には、世の中の意でなくして、非常に、特に、誠に、の義。然してこの副詞は、下の「残さまほし」にかかるにあらずして、古文の格として、「すぐれたる」にかかる。即ち非常にすぐれてゐるといふ名譽を後世に残したいがの意。まほしは希望の助動詞。譽もは、譽をもの意。○つらく——よく。○ほまれを愛するは人の聞きを喜ぶなり——名譽を愛好するのは、世の人々の評判がよい事を喜ぶのである。人の聞きは、人聞き。世人の傳聞し好評をして呉れること。聞きは、噂。評判のこと。○世にとどまらず——この世にとどまらず去ること。死んでしまふこと。○つたへきかむ人——その褒めることや、誹ることを、人から聞き傳へる人。○又々すみやかに去るべし——さういふ人も亦直ちに死んでしまふであらう。又々は、又を強くいふ爲に重ねたもの。○誰をかはぢ——誰に對して恥づることがあらうか。即ちどのやうな人を對象として、その評判を氣にするか、さういふ相手は無い筈だ。○誰にかしられむ事をねがはむ——自分のすぐれてゐる事を、誰に知

無い。名譽はやがて毀られる根本である。死後に名譽が残つた所で少しも益がない。故に知識と徳行との譽れを、後世に残さうと願ふのも、高位高官を願ふ愚に次いで愚なことである。

口譯 但し、無理に智者たるを求め、賢者たるを願ふ人がある。さういふ人のために一言するならば、智恵が出て来ると、その結果として自然偽が生ずる、才智藝能はさまざまの欲望や惱みのだん／＼

られたいと思ふことがあらう。そのやうな相手はない筈だ。○譽はまた毀の本なり——譽められるのは毀られる根本である。即ち一方で褒められると、その反面には必ずそしられることが伴つてゐる。○身の後の名——死後の名譽。列子楊朱篇に、「賢愚好醜成敗是非無不消滅。但遲速之間爾。矜一時之毀譽。以焦苦其神形。要死後數百年中餘名。豈足潤枯骨。」と。同じく又、「從性而游不逆萬物。所好死後之名。非所取也」と。又、晉書に、張翰曰く、「使我有身後名。不如即時一盃酒」と。○更に益なし——少しも益がない。全くくだらぬことだ。更に「これ」は死後の名譽をさす。○次におろかなり——次には高位高官を望むに次いで意。

ただし、しひて智をもとめ、賢をねがふ人のためにいはば、智恵出でては偽あり、才能は煩惱の増長せるなり。つたへて聞き、學びてしるは、まことの智にあらず。いかなるをか智といふべき。不可は一條なり。いかなるをか善といふ。眞の人は智もなく徳もなく功もなく名もなし。誰かしり誰か傳へむ。是徳をかくし、愚をまもるにはあらず。本より賢愚得失のさかひにをらざればなり。まよひの心もちて名利の要をもとむるに、かくのごとし。萬事は皆非なり、いふにたらず、願ふにたらず。

と積もり積もつて出来たものである。人から傳へ聞いて始めて知ることや、人から教へられて始めて知るといふものは、眞實の知識ではない。さてそれでは、どのやうなのは眞の知識といふべきであらうか。つまりそのやうな知識といふものは世の中にないのである。世にいふ善とか、不善とかいふものは、つまり同一のものである。どんなものを善といふかといふに、實はさういふものは世の中にな

語釋 ○ただし——但しと書く。もつとも、さうはいふものの、だが然しの意。上文の事情から起る反對の事情とを接續する接續詞。○しひて智をもとめ賢をねがふ——世には、どうしても飽くまで知識を求め、賢明になりたいと願ふ人がある。さういふ人のために一言するならば。○智恵出でては偽あり——太古、人が皆自然に順つて生活してゐた時代には、偽といふものはなかつた。ところが後世になるにつれて、人智がだん／＼と發達するにつれて、人生に偽といふものが生じて来たといふのである。老子經俗薄章第十八章に曰く、「大道廢有仁義。智慧出有大偽。六親不和有孝慈。國家昏亂有忠臣。」と。蘇子由に注に、「大道廢也。仁義行于其中。而民不知。大道廢而後仁義見矣。世不知道之足以贖足萬物也。而以智慧加之。于是民始以偽報之矣云々」と。○才能は煩惱の増長せるなり——才能は才智藝能をいひ、煩惱は、情慾、願望、等人間のあらゆる欲情である。増長は次第に甚だしくなること。いろ／＼な欲望や煩悶が積もり積つて出来たものが才能である。即ち人間の才能といふものは、もとを正せば、愛欲を成さうとか、名利を得ようとか、豪華をなさうとかいふ、いろ／＼の欲情が原動力となり、そのために色々の工夫、努力が積まれて出来たものである。○つたへて聞き、學びてしる——人から教へ傳へられて知り、人から學んで始めて知ること。これ相對的な世俗の智である。○まことの智——世俗の差別境、相對境を超越した所の絕對的の悟性をいふ。是れ眞の意味に於ける智恵である。○いかなるをか智といふべき——この句の表面は、「どういふものを智といふべきであらうか」といふ疑問であるが、その内面には、「智といふべきものは更になし」の意が含まれてゐる。○不可は一條なり——可は善、不可は不善で、一條は、一すぢといふこと、即ち

い。凡俗の人の中から超越した眞人は、知識もなく、品性もなく、功勞もなく、名譽もない。随つて人の目に立つやうなことはないから、誰がこの眞人の存在を知り、誰がこの眞人を後世に言ひ傳へよう。誰も知らず、誰も後世に言ひ傳へるものは無いのである。但し、是れはわざと品性をかくし、愚をよそほふのではない。斯る眞人はもと／＼から賢愚善不善の境地を超越してゐるからである。迷ひの心

同一といふことになる。つまり世俗にいふ、善といひ、不善といふのも、絶對的境地から見れば畢竟同一のものだといふこと。莊子齊物論に、「道隱ニ小成。言隱ニ於榮華。故有ニ備墨之是非。以是ニ其所レ非。而非ニ其所レ是。欲ニ是ニ其所レ非。而非ニ其所レ是。則莫レ若ニ以明。物無レ非レ彼。物無レ非レ是。自レ彼則不レ見。自レ知則知レ之。故曰。彼出ニ於是。是亦因レ彼。彼是方生之說也。雖レ然方生方死。方死方生。方可方ニ不可。方不可方ニ可。因レ是因レ非。因レ非因レ是。是以聖人不レ由。而照ニ之于天。亦因レ是也。是亦彼也。彼亦一是非。此亦一是非矣。且有ニ彼是ニ乎。且無ニ彼是ニ乎哉。彼是莫レ得ニ其偶。謂ニ之道樞。樞始得ニ其環中。以應ニ無窮。是亦一無窮。非亦一無窮也。故曰。莫レ若ニ以明。」と。○いかなるをか善といふ——これは前の「いかなるをか智といふべき」と相對する語にして、「いかなるをか善といふべき」とあるべきのを少し語を變へたのである。即ちどういふのを善といふのか。それは善といふものはない。絶對境からみて、不可は一條であるからである。○眞の人——本當に悟りきつた人。大悟徹底した人をさす。儒教の聖人に同じ。老莊では、眞人、神人、至人などいふ。莊子大宗師に、「有ニ眞人。而後有ニ眞知。何謂ニ眞人。古之眞人。不レ逆レ寡。不レ雄レ成。不レ讓レ士。若レ然者過而弗レ悔。當而不ニ自得レ也。若レ然者登ニ高不レ懼。入ニ水不レ濡。入ニ火不レ熱云々」とある。○智もなく徳もなく云々——眞人は絶對的境地にゐるから、相對差別の境に存在する智だの徳だの功だのを超越してゐるのである。○莊子逍遙遊に曰く、「若夫乘ニ天地之正。而御ニ六氣之辨。以游ニ無窮ニ者。彼且惡乎待哉。故曰。至人無レ己。神人無レ功。聖人無レ名」と。○是徳をかくし、愚をさもるにはあらず——わざ／＼徳をかくして表はさぬやうにし、馬鹿になつてゐるといふのではない。所謂眞人といふものは、さ

を以て浮世の名聞利欲を求めると、それは皆この通りである。(即ち實在と思ふことが假空のものである。)故に萬事皆、一時的現象的の假りのものである。もう論ずるまでもないことであり、願ふにも足らぬことである。

補「いかなるをか善といふ」の次に、傳幽齋本には、「名をおもふは、人のききをよるこぶ也」との語が入つてゐる。

ういふ境地から超越してゐるからだといつたのである。「愚を守る」の「守る」は、氣をつけて保ち失はないやうにすること。つまり馬鹿なやうな風を何時までもしてゐること。○本より——「本」の字は當字にして、はじめから、元來といふこと。素ヨリといふ副詞。○賢愚得失のさかひにをらざればなり——「賢愚」は、賢者、愚者と考へてもよいし、又は、賢を智者、愚を不智者と考へてもよい。「得失」はもと利不利の意であるが、此處は不可ト同一に、善不善の意と見てよし。智不智、善不善といふやうな差別の境地を超越してゐるからである。○まよひの心——差別に執着し、名利にあこがれ、眞理をつかみ得ない心。○名利の要をもとむるに——名利を肝要として求むるに、又は、名利の肝要なところを求むるにと解けば解かれぬこともないが、林道春の野植の説に従つて、「の要」は不用の文字にして、後人の誤つて混入したものであらう。即ち「名利の要をもとむるに」は、「名利をもとむるに」の誤とする説の方がよいと思はれる。是れは林道春の野植に、「名利の要を求る發端の詞に應映せり。の要の二字（たがひ）衍文なり。莊子盜跖篇に、興ニ名就ニ利ニと云て下の句に非ニ以ニ要ニ名譽ニ也とあり、要の字に、假名付たるを合せて誤り來れる也」と言つて居る。これは「要」の字はモトムルとよむので、もと兼好が「名利を要む」と書いたのを、後世の人が「要」にモトムルと讀假名をつけて置いた。それを更にそれより後の人

が誤つて、脱字を右側に書いたものとして、本文に混入し、「名利の要をもとむる」と書くやうになつたといふのである。この林道春の説がよいと思ふ。されど徒然草文段抄頭書(鈴木弘恭著)に、「野植の説の如くの要の二字を衍文としても開ゆるやうなれど、本のままにてもよろし。名利の要とは、名利の上にて肝要の所といふ意なるべし」といつてゐるのも一説としてよい。○萬

事は皆非なり——世の中の事はすべて皆非である。非なりとは、眞のものではない。一時的な現象的な假りのものであるとの意。○いふにたらず願ふにたらず——彼れ此れと論ずるだけの價値もなく、願ひ求める程のねうちもない。

第三十九段

或人、法然上人に、「念佛の時、睡にかされて、行をおこたり侍る事、いかがして此のさはりをやめ侍らむ」と申しければ、「目のさめたらむほど、念佛し給へ」とこたへられたりける、いとたふとかりけり。又「往生は、一定とおもへば一定、不定とおもへば不定なり」といはれけり。これもたふとし。又「うたがひながらも念佛すれば往生す」ともいはれけり。これも又たふとし。

語釋 ○或人——世俗には、この或人は、佐々木四郎高綱であるといつてゐるが、さして眞とするに足らない。それは和論語（倭論語）の言として諸抄大成に、「山案、文選六臣註、兩都賦序註呂尙曰、或者不定之辭とあれども、今ここに書ける或人は佐々貴高綱なるべし。一日和論語を

口譯 或人が法然上人に、「南無阿彌陀佛と念佛をしてゐる時、頻りに眠氣に攻められてきて、念佛の修行を怠ることがありますが、どうして、このさまたげを除いたものでありませうか」と申したところだが、「目のさめてゐる間は念佛しなさい」と答へられたといふが、

いかにも怪い事である。又、「極樂往生は、きつと出來ると思へばきつと出來、どうだかわからぬと思ひ疑ふと、極樂往生はどうなるかわからぬものである。」といはれた。これも尊い。又「疑ひながらも念佛をすれば往生出來る」とも言はれた。これも亦尊く有難い言葉である。

讀みけるに、彼書に曰、佐々貴四郎高綱遁世して高野山に有りしが、或時京へのぼりて源空上人に逢ひて問ひけるは、念佛の時ねぶりにをかされて行を怠り侍ること、いかゞして、此障をやめなむやと尋ねしかば、上人の曰、目のさめたらむほど念佛したまへとぞ申されし」とあるが、寛文九年京都版の和論語にはその卷八に、「源空曰、姪欲酒肉をもて不淨とせず、諸道の中には智慧をもて、清淨のみなもととするなり。又曰、往生は一定ぞとおもへば一定なり。不定なりとおもへば不定なり。佐々貴四郎高綱遁世して云々」とあるので、諸抄大成に引用した和論語は別物であるか、この邊の研究はまだ不明である。又和論語そのものも、偽書であるとの説もあつて研究の餘地がある。故に只今はこの或人は、未定の某といふ人の意でよい。○源空上人——淨土宗（淨土尊念佛宗）の開祖。美作の國稻岡の人、漆間時國の子、幼名勢至丸、十五歳で出家し、源空と號し、晩年源信の往生要集に感じ、淨土宗を起したのである。建曆二年正月廿五日寂。壽八十。詳しい傳記は元亨釋書五參照。上人とは、書言故事に、「内有智德、外有勝行、在人之上、名上人」とある。○念佛——南無阿彌陀佛の六字の名號を唱へて祈願すること。黒谷上人起請文（一名、一枚起請文）は法然上人の唱へる教義をわかり易く書いてゐる。それに曰く、「もろこし我朝もろ／＼の智者たちの沙汰し申さるる觀念の念にもあらず、また學問をして念の心をさとりと申す念佛にもあらず、ただ往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申せば、うたがひなく往生するぞと思ひとりて申す外には、別の子細候はず。但し三心四修など申す事の候は、皆決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞとおもふ内にこもりて候なり。このほかに奥ふかきことを存せば、二尊の御あはれみにはづれ、本願にもれ候べし。念佛を信ぜむ人は、たとひ一代の法をよく／＼學

すとも、一文不知の悪鈍の身になして、尼入道の無智のともがらにおなじくして、智者のふるまひをせず候て、ただ一向に念佛すべし」とある。○睡ねむりにをかされ——眼氣まなこに攻められること。即ちねむくなること。○行をおこたり侍る——行ぎやう(ギヤウ)は佛道修行のこと、但し、ここは念佛を唱へることをさす。「侍る」は、在り、居りの敬語。○此のさはりをやめ侍らむ——さはりは、障碍。さまざま。佛道修行の邪魔をなす眠氣。「やめ侍らむ」は、止め申しませう。○目のさめたらむほど——目がさめてゐる間。「たらむ」は、「たる」の婉曲叙法。ほどはその間の意。○こたへられたりける——答へられたが、そのことはの義。○たふとかりける——尊いお言葉であつた。○往生——死後に阿彌陀佛の王城である極樂淨土へ往つて生れること。○一定とおもへば一定——一定は、きまつてゐること。必ず出来ること。極樂往生はきつと出来るものだと思つて居れば、きつと出来るものである。○不定とおもへば不定なり——不定は不確定なこと。極樂往生が出来るかどうかと疑つて居れば、極樂往生は出来るかどうかわからぬ。一言芳談に、「法然上人の四往生は決定と思へば定めて生る。不定と思へば不定なり」とある。○疑ひながらも念佛すれば往生すともいはれけり——念佛しても、果して極樂往生が出来るか、どうかと疑ひながらも念佛してさへ居れば、それで立派に極樂往生が出来るものだといはれた。往生要集に、「若雖疑佛智、而猶願彼土、修彼業亦得往生」とある。ここは法然上人がこの考へを受けて言つてゐられると思ふが、佛智を疑ふといふ往生要集の説よりも、むしろ卑近に一定不定を疑ふものを見るがよい。○たふとし——單に尊いといふ意味以外に、有難いの意を持つてゐる。

第四十段

因幡國いなはのくにに何の入道とかやいふ者のむすめ、かたちよしと聞きて、人あまたいひわたりけれども、此のむすめ、ただ栗いりをのみ食ひて、さらによねのたぐひをくはざりければ、「かかることやうのもの、人に見ゆべきにあらず」とて、おやゆるさざりけり。

口譯 因幡國にゐた何とか言つた入道の娘が、容貌がよいと聞いて、澤山の男がいろいろと言ひ寄り、結婚を申込んだが、この娘はひたすら栗ばかりを食つて、少しも五穀類をたべなかつたので、「このやうな變り者は結婚すべきものでない」といつて、親の入道が承知しなかつた。

第四十段

語釋 ○因幡國に何の入道とかやいふ者——「因幡の國に何の入道とかや」といふ言ひ方は、當時の一種特別の言ひあらはし方で、「因幡國に居た何とか入道」の義。第五十二段の「仁和寺にある法師」といふ言ひ方も是れと同じ。斯ういふ「に」は、先づ大きく地點を示すに使ふ慣用詞で、「にゐた……者」「に……地」といふ意である。入道は一般に佛道に入つて修行してゐる人。但し、その場合は、入道の語が三位以上の人に限つて言ふ語で、それ以下は新發意といふ。又、この入道の語は、俗人で剃髮染衣して猶家に在る者をいふこともある。茲は恐らく後者のこの意味であらう。○かたちよしと聞きて——かたちは容貌、かほばせ、器量。即ち容貌がよい。美人であること。○人あまた——男が澤山に。人は男をさす。○いひわたり——言ひ寄ること。即ち結婚を申込むこと。「わたる」は、動作の時間的連續を表はし、男どもが懲りない

で、幾度も結婚を申込んだがの意。わたるは、「思ひわたる」「待ちわたる」などに同じ。落窪物語に、「日々にあらねど、絶えずいひわたり給へど、絶えて御返りなし」とある。○さらに——少しも。下の「くはざりければ」にかかる。○よねのたぐひ——よねは米のこと。米、麥、豆などをさしてゐる。○かかることやうのもの——ことやうは異様の義。こんな風変わりなもの。米の飯を食はないやうな異様な者。○人に見ゆ——人に逢ふの義で、結婚すること。但し、女が男に逢ふ場合にいふ。嫁入る。縁づくこと。○おや——親の義。その父の入道をさす。

第四十一段

口譯 五月五日、賀茂神社の競馬を見物いたしました。牛車の前には下賤の人だちが大勢立ち隔てて見えなかつたので、何れも車から降りて、柵のきには寄つて行つたが、そこには殊に人が大勢込み合

五月五日、賀茂のくらべ馬を見侍りしに、車の前に雜人立ちへだてて、みえざりしかば、各おりて、らちのきはよりたれど、ことに人おほくたちこみて、わけ入りぬべきやうもなし。かかるをりに、むかひなるあふちの木に法師ののぼりて、木のまたについで物みる有り。とりつきながら、いたう睡りて、おちぬべき時に、目をさます事度々なり。これを見る人あざけりあさみて、「世のしれものかな。かくあやふき枝の上にて、やすき心有りてねぶるらむよ」といふに、我が心にふと思ひしままに、「われら

つて、内へ分けて入りやうもない。さうした折に、向ひの側の柵の木に登つて、枝の段にしゃがんでみて見物する一人の僧があつた。枝につかまつたままひどく眠つて、木から落ちさうになると目をさます。さういふ事を幾度となくやつてゐる。その法師のさまを見る人達が、嘲りあきれて、「實に馬鹿な奴だ。あんなあぶない枝の上でよくまあ安心して眠られたものだなあ」といふ。それを私翁好が

が生死の到来、ただ今にもやあらむ。それを忘れて、もの見て目をくらす。おろかなる事はなほまさりたる物を」といひたれば、前なる人ども、「まことにさにこそ候ひけれ。最もおろかに候」といひて、みなうしろを見かへりて、「ここへいらせ給へ」とて、所をさりて、よび入れ侍りにき。か程のことわり、誰かは思ひよらざらむなれども、折からおもひがけぬこちして、胸にあたりけるにや。人木石にあらねば、時にとりて物に感ずる事なきにあらす。

語釋 ○賀茂のくらべ馬——往古は五月五日宮中豊樂殿で騎射の式があり、延喜式にも五位以上の者が走馬を進める式のことが見えてゐる。この式は中古より廢絶し、ここにいふ競馬がその名残と言はれ、毎年五月五日に賀茂御祖神社境内で行はれた。堀河院の寛治七年に始まるといふ。現在は六月五日に行はる。故實拾要八に、「五月五日、於賀茂社人勤之。同一日足揃とて、競馬の習禮あり。往古は内裏の於豊樂殿一騎射ありし事也。左近の馬場の眞手番など云事、公事根源抄に見えたり。又五月五日の節には、五位以上より進走馬と云事、延喜式等に見えたり。然るに中古より此事斷絶して、今は賀茂に而已此式残れる也」と。○車の前——翁好が連れの人だちと乗つてゐた車。車は勿論牛車のことである。斯ういふ時は、貴人は車をとどめて簾越しに見物

聞いて、ふと自分の心に浮んだままに、「吾等の死の到来すること、今すぐであらうも知れぬ。それを忘れて、斯うして競馬を見物して目を暮す。その愚さはこの僧にもましてゐるものを、どうしてあの僧のことを嘲られやうか」と言ふと、前にゐた人達が、「實際さうである。全く私だちの方が愚なことである」と言つて、皆うしろを振りかへり見て、「こへいらつしやい」と言つて、場所をあけて、

する例である。次に「各おりて」とある「各」は、それ等の貴人達をさしたものと思はれる。○雑入——下賤の者。見物に来てゐる群衆をさす。○立ちへだてて——競馬の方と、兼好等の乗つて居る車との中間に立つて、兩者の隔てをなすをいふ。○みえざりしかば——兼好等の居た所からは、競馬の様子が見えなかつたから。○らちのきはによりたれど——らち、馬場の周囲の柵をいふ。その柵のすぐそばまで近寄つたが。○ことに人おほく——埒の際は特別に人が多く。その邊はよく見えるわけだから、一層人が多かつたのである。○わけ入りぬべきやうもなし——澤山立つてゐる群衆の中へ押分け入れられさうもない。○あふちの木——あふちは、柳又は棟の字を書く。俗に梅檀の木といふが、香木の梅檀とは別物である。和名鈔甘の木類に、「棟……本草云。阿布智」と。梅檀の古名。棟科、棟屬の落葉喬木。幹は高さ二三丈、周三尺に及ぶ。花は小形五出、淡紫で香氣あり、攢簇し圓錐花序をなす。花期五月。歳時記に曰く、「蛟龍畏棟、故端午以葉包粽投江中祭屈原。今俗五月五日取葉佩之云、辟惡也」と。枕草子に、「木のさまぞ、にくげなれど、棟の花いとをかし。枯花に様ことに咲きて、必ず五月五日にあふもをかし」とある。○木のまたに於いて——木の枝の分れた所に、ちよつとしゃがんでゐての意。ついで、は、膝をついてゐて、しゃがんでゐて。即ち木の枝に鳥のとまつたやうにしてゐたのである。大鏡(道隆の所)に、「鳥のつゐる形を瓶に作らせ給ひて、興あるものに思して、ともすれば大御酒入れて召す」とある。第四十九段の「しづかにつゐるることだになく」の條参照。○物見る——競馬を見てゐる。○とりつきながら——木の枝にとりすがりながら。○おちぬべき時——木から落ちさうになるその時に。○あざけりあさみて——嘲笑しあきれかへつて。「あさみて」

自分を呼び入れてくれた。これくらゐの道理は誰だつて思ひつかないことはなからうと思はれることであるが、こんな場合としては思ひがけない心地がして、胸にこたへたのであらうか。人は無情な木や石でないのだから、さうした何かの場合に、物に感ずることがないでもない。

は、淺を活用して、あさむといふ。おどろきあきれる。あきれかへる。あつげにとられる。興さむる意を含むこともある。あさみては、増補雅言集覽に廣足補註として、「廣足云、さ文字すみてよむべし。あさましと同じ義なり。ほむる事にも、おどろく事にも、たふとむ事にもいへり。あさみ興ずともいへり。宇治拾遺にいと多し」と。○世のしれものかな——ひどい馬鹿者だなあ。世のは非常なるの意。世の中のと解かぬがよい。「しれもの」は、馬鹿者。痴人。愚人。無分別者の義。○やすき心有りてねぶらむよ——安心して眠ると見えるよ。全體の語調としては、よくまあ安心して眠られたものだとの義。「いふに」は、「いふので」の義。○我が心——兼好の心の中に。○ふと思ひしままに——ふつと思ひ浮んだのに従つて。別に前から考へてゐたのではないがの意。○生死の到来——死の襲ひ來ること。「生死」の「生」は意味なく、ただつけただけで、「一旦緩急あれば」の緩の字に意味なきと同じ。○ただ今にもやあらむ——今すぐの事であるかも知れない。○なほまさりたる物を——一層まさつてゐるものを。あの梅檀の樹の上にある僧の愚よりも、更に一層の愚だといふのである。「ものを」の下に、「いかで之を嘲りあざむべき」といふやうな意を含めたものである。○前なる人ども——兼好の前に立ちふさがつて居た人だちをいふ。○まことにさにこそ候けれ——全くその通りでございませう。如何にも貴説の通りである。○最もおろかに候——實に愚です。兼好の言葉に感じて、人々が自分自らを愚かだといつたのである。最もは軽い意味で、實際とか、全く位の意。○所をさりて——場所を譲つて。さるは避ること。居た場所をよけのいて。○かほどのことわり——これ位の道理。前に「われらが生死の到来ただ今にもやあらむ云云」といつた兼好の言葉をさしてゐる。○誰かは思ひよらざらむなれど

——誰だつて思ひつかならう。誰でも思ひつく事ではあるがの意。反語で文章を切らずに、なれどもと續けるのは一種の慣用法で、ものがなれども前に略された形。ここは「誰かは思ひよらざらむものなれども」の義。○折からのおもひがけぬこちして——「折からの」は、斯ういふ場合として。見物以外には、何も考へて居なかつた斯ういふ場合としては、思ひもかけぬ珍らしい眞理を聞いたやうに感じて。「折から」は古くは、時節がら。その場合の様子がら。時態の意。源氏物語の横笛の巻に、「物のついでにほのかなりしは、折からのよしづきてをかしうなむ侍りし」とある。現代では、「折から」は主として副詞的に用ゐられる。「折から雨が降りだした」の如し。○胸にあたりけるにや——皆のものが席を譲つたのは、なるほどさういへば、さうだと思ひあたる所があつたからであらうといふ意。胸にあたるは、なるほどと心に思ひあたること。○人木石にあらねば——人間は誰も皆、喜怒哀樂の感情があり、木や石のやうな非常なものではないからといふこと。この語は文選の鮑照の詩に、「人非木石、豈無感」の句による。白氏文集卷四に新樂府李夫人に、「人非木石、皆有情、不如不遇傾城色」と。○時にとりて——「折にふれて」と同意。場合に應じて、何かの機會に於ての意。

第四十二段

口譯 廣橋中將といふ人の子に、行雅僧都と

唐橋中將といふ人の子に、行雅僧都とて教相の、人の師する僧ありける。氣の上る病ありて、年のやう／＼たくる程に、鼻の中ふたがりて、息も出

いうて、經文教理を以つて人を教ふる學僧があつた。その人はのぼせる病氣があつて、だん／＼と年を取るほどに、鼻の中がふさがつて、呼吸も困難になつたので、いろ／＼と治療をしたが、重くなるばかりで、目や眉や額なども一ばいに腫れ上つて、覆ひかぶさつたので、物も見えなくなり、まるで二の舞の面のやうであつたが、ただもうおそろしく鬼のやうな顔付になつて、目は頭のてつべんの方

でがたかりければ、さまざまにつくろひけれど、わづらはしくなりて、目、眉、額などもはれまどひて、うちおほひければ、物も見えず、二の舞の面のやうに見えるが、ただおそろしく鬼のかほになりて、目はいただきのかたにつき、額のほど鼻になりなどして、のちは坊のうちの人も見えす、こもりゐて、年ひさしくありて、なほわづらはしくなりて死ににけり。かかる病もある事にこそありけれ。

語釋 ○唐橋中將——村上源氏久我の庶流。唐橋雅清といふ。系圖は、村上天皇—具平親王—師房—顯房—雅實—雅定—雅通—通資—雅清。大納言通資の二男で、雅親の同母弟である。新勅撰集の作者。承久三年四月參議。右中將は元の如し。十一月從三位。四年正月備中權守。十月左中將。十一月正三位。翌貞應二年、三年は同様、同三年十二月出家して、後堀川天皇の寛喜二年四月薨去。年四十九。○行雅僧都——行雅の傳記不明。但し、父雅清の薨年から推すと、兼好より五十三歳以上の年長者になる。故に此の話は兼好當時の事ではない。僧都は僧綱の一で僧正に次ぐもの。僧には僧位と僧官とがある。僧位は、法印大和尚位、法眼和尚位、法橋上人位、傳燈大法師位、傳燈法師位、傳燈滿位、傳燈住位、傳燈入位の八階。僧官は僧正、僧都、律師。この中、僧官の僧正、僧都、律師と、僧位の法印、法眼、法橋とを僧綱といふ。弘安四年の制によると、法印は俗位の四位に相當してゐる。○教相の人の師する僧——教相を以て人に師たる僧。「教相」

につき、額の邊が鼻になつたりなどして、後には同じ僧舎の中に居る人にも顔を會はず、一人一間(ヒトマ)

二の舞の面



に立籠つたまま永らく居たが、しまひには更に一層ひどくなつて、死んでしまつた。こんな不思議な病氣もある

とは理論的教義、即ち經論聖教を學ぶ方面。眞言宗には、教相事相の二部を分ち、教相部は教理を專攻し、事相部は三密の行法を修す。「人の師する僧」とは、人の師匠たる僧。人に教へる僧。學僧。○氣の上る病——のぼせる病氣。○年のやうくたくるほど——だん／＼と年を取るうちに。「年たく」とは、年をとつてゆくこと。高齡になつてゆくこと。○鼻の中ふたがりて——鼻の中がつまつて。ふたがるは、ふさがること。○息も出でがたかりければ——鼻の孔がふさがつて、呼吸も難澁になつたから。○さま／＼つくろひけれど——いろ／＼と方法を盡して治療をしたけれども。「つくろふ」は、治療をする。病の手當をする。○わづらはしくなりて——病氣がひどくなつて。○はれまどひて——むやみに腫れあがつて。目鼻もわからぬやうに、むやみに腫れあがつたのである。○うちおほひければ——餘りに腫れ上つたので、目が上からおほはれたやうになつたことをいふ。○二の舞の面——二の舞は古舞樂の安摩の答舞(前の舞に番ひて次に行はれる舞)で、今日も宮内省雅樂部に傳つて居り、昭和六年九月二十九日の夕刻より、東京日比谷公會堂に賞演があつて親しく拜觀することを得たが、當時の舞樂の曲目解説に云ふ。「安摩。天竺の樂なり。傳來年月詳ならず。承和年中(千九十年前)大戸清上修飾せりと云ふ。最初の調子以後は、龍笛と打物のみの演奏下に舞ふは、此曲の特色なり。古の伎樂の面影を傳ふるは、此舞及次の二舞とのみなるべし」「安摩、二舞。安摩二舞は、天神地祇の醉舞する様を象ると傳へ云ふ。傳來は安摩と同じく詳ならず。其面の怪奇的なると、安摩の手振を模倣する所に言ふべからざる興味あり」と。これは中世藝能に所謂もどきと謂ふもので、もどきは滑稽な動作で、その先に行つた藝の注釋的な役割を果して行くものである。安摩と二の舞との關係も是れである。その舞

ものである。

に用ゐる面であるから、やはり滑稽な面であるのが當然である。安摩の方の附けて居るのは藏面といひ、今は厚紙の上に白絹をはり、目鼻の形に似たものを描き、中央の三角形内に兩眼の孔を作つたものである。二の舞の方の二人は、男と女であつて、右は男、是れは笑つてゐる。だから是れをエミオモチといふ。左は女、これは目のあたりがすつかり腫上つて居る。だから是れをハレオモチといふ。二の舞の面といへば、この兩方を指すのであるが、此所にいふのは、ハレオモチの方である。色は赤黒い色である。それは醜怪であるが、こわい顔ではない。舞そのものも決してこはいものではなく、寧ろ滑稽である。さうして安摩の舞人の眞似をして舞ふのであるが、なか／＼うまくゆかない。そこに面白味があり、又滑稽味がある。人の眞似をすること。又は他の覆轍を踏むことを、古くから「二の舞」といふが、是れから出たものである。(佐野氏の説による)○みえけるが——目のあたりが腫れあがつて、兩眼のあり場所もわからないやうになつた様子。子は、ちやうど二の舞の「はれおもて」のやうに見えた。○ただおそろしく鬼のかほになりて——「ただ」は、一途にとか、全くの義。「おそろしく」は下の「なりて」に掛る副詞。全く鬼の顔のやうに恐ろしくなりて。○目はいただきのかたにつきて——いただきは頭の頂上のこと。下方から上方に腫れあがつたので、目が頭の上の方に附いたやうになつて。○額のほど鼻になり——ほどはあたり。鼻もはれて上の方へ行つて、額の邊に鼻があるやうになつた。○坊のうちの人も見えず——坊は僧の居る所。「見えず」は會はずの義。同じ僧舎の中に居る人にも顔を合はさない。○なほわづらはしくなりて——「なほ」は一層。一層ひどくなつて。○死ににけり——死んでしまつた。大槻氏廣日本文典、助動詞「ぬ」の條に、「此の語も諸動詞の第五活用(連用

形のこと)に連なれど、奈變の「往に」「死に」にのみは絶えて連ならず」とあり、「古書に用例を見ず、稀に死ぬるなどあるは死ぬるべきを僻讀したるなるべしと云」とあるから「死ににけり」の「に」といふ完了の助動詞はつかない筈であるが、光廣本、嵯峨本、文段抄にかくあるから、兼好時代には「死ににけり」と、完了助動詞「ぬ」の連用形が奈變の「死に」に接続して、「死ににけり」とよんだのではないかと思はれる。

第四十三段

春のくれつかた、のどやかに艶なる空に、いやしからぬ家の、おくぶかく、木立ものふりて、庭にちりしをれたる花見過しがたきを、さし入りてみれば、南面のかうし皆おろして、さびしげなるに、東にむきて、妻戸のよきほどにあきたる、御簾のやぶれより見れば、かたちきよげなる男の、とし二十ばかりにて、打ちとけたれど、心にくくのどやかなるさまして、机の上に文をくりひろげて見るたり。いかなる人なりけむ、たづねきかまほし。

口譯 晩春の頃、静かにのんびりとして、美しい空模様である或日のこと、或所を通つたところが、上品な一軒の家があつて、邸内は廣々として、見たところ、いかにも奥深い感じがし、庭に植ゑ込まれた樹木もこんもりと

時代がついて、庭には散り敷かれてゐる花のさまが如何にも見過しがたいので、ずっと邸の圍ひの中へ入つて見ると、南向きの部屋の前の格子は、すつかりと閉め下ろされて、ひっそりとしてゐるが、東向きの部屋の方は、妻戸が丁度内部を見るのに、都合のよい程度に開いてをり、そこに掛つてゐる御簾の破れの隙間から窺ひ見ると、容姿の美しい男で、年頃は二十歳ぐらゐなのが、うちくつるいで

語釋 ○春のくれつかた——晩春の頃。○のどやかに艶なる空に——「のどやか」は、春日の暖かく、何となくのんびりとした静かにゆつたりとした心地をさす。「艶なる」は、春の空の美しく、氣もうき／＼するさまをいふ。空は單に天空そのものをさしてゐるばかりでなく、空の景色の長閑なさまをいふ。○いやしからぬ家——賤しくない家で、相當に上品な家をさす。○おくぶかく——邸内の敷地が相當に廣く、門の邊から見ると、ずっと奥の方に深く邸が見えるをいふ。又實際の有様が斯くあると共に、それを見て起る感じも、高貴な奥ゆかしさがあるのである。○木立ものふりて——木立(コダチ)は、庭に植ゑ込まれてゐる樹木をいふ。「ものふる」は、物古るで、相當に樹木に時代がついて古びて見え、上品で重々しい感じがするといふのである。○庭にちりしをれたる花——しをるは花のしぼむをいふ。故に散りしをるは、枝頭にある花でなく、庭に散り敷かれてあるしぼんだ花をさす。但し、沼波氏の徒然草講話に、「これを落花を指示すると思ふべからず、枝頭の花なり。庭にある、もう大分散つて、散り残つたのも色あせ、見頃の過ぎた花を云々方なり」とある。これも一説の解き方である。○見過しがたきを——この「を」は、見過し難きにの意である。見過しは、見ながらそれに留意せず、そのままにして過ぎ去るをいふ。○さし入りて——門内に入りて。さしは接頭語。○南面のかうし皆おろして——南面は家の南に面してゐる部屋をさす。かうしは格子と書く。今日の雨戸の代りとなつてゐたもの。細い四角な木を縦横に組んだ建具で、一間毎に上下二枚ある。その上の一枚は釣上げ、下の一枚は掛金で止めておき、上の一枚は蝶番(テフツガヒ)で上から釣り下げて、上げおろしの出来るやうにしてある。下は普通そのままにしておくのである。ここにおろしといつてゐるのは、閉める意に

自然のさままであるが、
どことなく上品で、ゆ
つたりとした有様をし
て、机の上に書物を繕
き讀んでゐた。その男
を見たのは、ずつと以
前のことであるが、今
もなほ、あれはどうい
ふ人であつたかと、ゆ
かしくて尋ね聞きたい
ものと思つてゐる。

なる。此は南に面した格子は皆下してあるので、従つて家の中が見えないのである。○さびしげなるに——ひつそりと淋しいさまであるが。○東にむきて——東の方に向つて。妻戸は建物の東側にあるわけになる。○妻戸のよきほどにあきたる——妻戸は第三十二段参照。よきほどには、すつかりあいてゐるのでなく、又あまり少くあいてゐるのでもなく、恰度よい程度に開いてゐるのである。○御簾のやぶれ——御簾の破れた隙間。上品ではあるが華奢な生活でない。いかにも淋しげな、わび住居といふ趣がよく見えてゐる。○見れば——御簾の破れからのぞき込んで見たといふのでなく、事實は少し離れたところから見たさまをいふので、見ると御簾の破れた隙間から、家の中の様子が見えたといふのである。○かたちきよげなる男——容貌の綺麗な男。○打ちつけたれど——極めて自然な様子で打ちくつるいではあるがの意。行儀をつくらつて堅くなつてゐるのではない。○心にくく——何となく上品で奥ゆかしいことをさす。○のどやかなる——ゆつたりとした様子。○文をくりひろげて——書物を開いて。「くり」は、紙をめくくことをいふ。○いかなる人なりけむ——どんな人であつたらうか。即ちどのやうな家柄、來歴の人であつたらうか。兼好が今斯うして書くにつけて、それはどういふ筋の人だつたかとゆかしく想起せられた心境である。○たづねきかまほし——その男のさまを見たのは、ずつと以前のことであるが、今もなほ、どういふ人であつたかとゆかしくて尋ね聞きたいものだと思つてゐる。

第四十四段

口譯 粗末な家の竹の
編戸の内から、まだ年
も若い男が出て來た。
月明りで、その男の着
物の色合は判然とわか
らないが、何でもつや
／＼とした美しくよい
狩衣に、濃い紫色の指
貫をはいて、如何にも
由緒あるらしい様子
で、小さい可愛い童子
一人を連れて、田圃の
中のずうつと長くつづ
いた細道を、稻葉の葉
露にぬれながら、稻葉
の中を押し分けてゆく
その道中、何とも
いへないよい聲で笛を

あやしの竹のあみ戸のうちより、いとわかき男の、月影にいろあひさだか
ならねど、つややかなる狩衣に、こきさしぬき、いとゆるづきたるさまに
て、ささやかなる童ひとりわらはをぐして、遙かなる田の中のほそみちを、稻葉
の露にそぼちつわけゆくほど、笛をえならす吹きすさびたる、あはれと
聞きしるべき人もあらじと思ふに、ゆかむかたしらまほしくて、見おくり
つつ行けば、笛を吹きやみて、山のきはに惣門そうもんのあるうちに入りぬ。榻しぢに
たてたる車の見ゆるも、都よりは目とまる心ちして、下人しもんどにとへば、「し
か／＼の宮のおはします比くらにて、御佛事おんぶつじなどさぶらふにや」といふ。

語釋 ○あやしの竹のあみ戸——「あやし」は、粗末な。はかなげの賤しい。「あみ戸」は、竹
又は、片木へぎを編んで作つた戸。玆は勿論、竹で作つた編戸のことである。「あみ戸のうちより」
の下に、「出でたる」などの語が省略されてゐる。○月影に——月明りで。月光にては。新勅撰
集秋部に、「月影に、色もわからぬ白菊は心あてにぞ折るべかりける」とあるのに同じ。○いろあ
ひさだかならねど——「いろあひ」は色の濃淡、模様をいふ。後にある「狩衣」の色合ひ
をさす。さだかは、はつきりとしてゐること。月の光はあつても、何といつても夜のことであるか
ら、男の着てゐる狩衣の色あひが判然とわからないが。○つややかなる——光澤があつて美しく